

---

# 素敵な勘違い（利知未シリーズ 番外 4）

茅野 遼

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

素敵な勘違い （利知未シリーズ 番外 4）

### 【Nコード】

N1763E

### 【作者名】

茅野 遼

### 【あらすじ】

利知未と倉真の結婚までのお話、番外の四つ目です。『見つけてくれて、ありがとう』の、続きとなります。研修医一年目の年が明け、利知未は倉真の実家・館川家へ、初めて訪問をする事と成った。利知未は元旦から緊張してしまう。（残りは、後1作です）

〈婚約時代 2〉 1 研修医一年・一月～二月（前書き）

時代背景は、世紀を跨ぐことと言つ1999年頃となります。（実際の地名なども出て参りますが、フィクションです）ごゆっくりお楽しみ下さい。

《婚約時代 2》 1 研修医一年・一月～二月

《婚約時代2》

1 研修医一年・一月

—

新しい年が明けた。利知未は今日、倉真に連れられて、始めて館川家の敷居を跨ぐ。朝美からレクチャーを受けた通りに、薄化粧も施した。

前日の大晦日から、利知未は元日の準備に大忙だった。洋服を決めて、バッグの準備をし、出勤前に手土産も準備をした。何を持って行けば良いのか悩み、倉真の実家が和菓子屋を営んでいる事を思い出した。

『って事は、定番の和菓子とかは、持って行けないよね……？』  
それで、考えた。お年賀代わりにも、成る物が好ましいだろうと思った。

珈琲ギフトを持って行く事も考えたが、果たして、館川家では飲むのだろうか？ 倉真に聞いても、八年近く親元を離れていた彼は見当が付かない。

それなら、商売屋の事だから日本酒はどうかと考えたが、婚約者の両親に始めて会うのに、日本酒も無いだろうと直ぐに却下した。結局ベターに、海苔と鰹節と顆粒ダシの入った、乾物セットお年賀を用意して見た。本当にそれで良かったのかどうかは、元旦に目を覚ました時もまだ不安だった。

朝は、倉真の為に雑煮を作って出した。利知未本人は緊張で胃

が萎縮してしまい、何も入らない気分だ。

倉真には心配をさせたくなくて、無理矢理、小さな餅を一切れだけ腹へ収めた。けれど、誤魔化し切れる事でも無い。

食欲の無さは、見ていれば判る。倉真は、何時も通りの食事量だった。

「お前、大丈夫か？」

「ん？ 平気だよ。昨夜も遅かったから、そんなにお腹、空いてないだけ」

聞かれて、利知未は緊張を押し込み、少し無理をして笑顔を作った。「心配するな。お前には家族全員、感謝してるんだ。胸張って堂々としていてくれれば良い」

倉真はそう言つて、優しい笑顔を見せてくれた。

その目を信じて、利知未は少しだけ気持ちが安らいだ。

全ての準備を終え、アパートを出る前に思い出した。

『写真、今日、持って行って上げた方が……、きっと、良いよね？』  
玄関へ出掛けて、リビングへ引き返した。

「どうした？ 忘れもんか？」

「うん、ちよつと。直ぐ行くよ」

リビングから、利知未の声が聞こえて来た。

プロポーズをして貰う前に整理をしてあつた倉真の写真を、書棚の隣に置いてある物入れから取り出した。

中身を確認して、ハンドバッグの中へ仕舞った。

『土産やお年賀より、これが一番、嬉しいよね？ きっと』

……倉真の、ご両親は。

恐らく、家を出てからの息子の様子を、ずっと気にされていただろう。

『一美さんにも会えるのか。ボロが出なければ良いけど』 それ

を思つて、少しだけ気が楽になった。ご両親との初顔合わせは確かに緊張しているけれど、将来、義妹となる一美とは、すっかり仲良しだ。

『友達に会うくらいのもりで、行く』 責めて、館川家の門を、潜るまでは……。

気持ちを切り替えて、玄関で待っていた倉真には笑顔を見せた。

館川家では、朝からそわそわした空気が流れていた。

今日、始めて。長男が、将来のお嫁さんを連れて来てくれる。

散々、息子の腕白振りとヤンチャ振りには、手を焼かされて来た。彼が父親と大喧嘩をして家を飛び出してから、八年近い月日が流れている。

二ヶ月前、七年半振りに連絡を寄越した息子は、その後、七日間かけて、喧嘩別れした父親と将来の事を話し合う為に、通い続けて来た。あの時の長男は、すっかり落ち着いた大人の男に育って来ていた。

その成長が今日、連れて来てくれる女性のお陰である事は判っている。まだ顔も知らないその女性に、家族一同、心から感謝をしていた。

長女・一美は、家族には内緒で、すっかりその人に懐いてしまっている。

『利知未さん、今日はどんな格好してくるんだろう?』

想像して、楽しみが膨らんでいる。緊張気味の両親に比べて一人、気楽なニヤケ顔だ。

「あんたは、肝が座つていいると言うか、何と言うか……」

呑気な娘の様子に、母親が呆れてそう言った。

「どうして？ ワクワクはするけど、緊張はしないよ」

一美は茶を啜り、お節の煮豆を摘んでいた。

利知未に会いに行った事は、まだ言っていないかった。父と兄の話し合いが、もう少し延びてしまう様なら、折を見て報告しようと思っていた。

利知未の言葉も、二人の話し合いが思いの外にスピード解決をしてくれた事で、伝える機会を逸していた。

「一美を見習って、少し落ち着いた方が良さそうね」

母はそう言って、気を落ち着ける為に、夫と自分の茶を入れた。

家族三人は、居間に揃っていた。テレビには、今年の初日が映っていた。

利知未と倉真がアパートを出たのは、九時半頃だ。バイクでも片道一時間半掛かる。今回は利知未の服装もワンピースだ。バイクで行く訳にも行かない。前日の内に、倉真が準一の車を借りて来てくれた。

車に乗り込んで、ハンドルは倉真が握った。

「ジュン、正月に車、使う予定は無かったの？」

「バイクがあれば、用は足りるって言ってたぜ」

「樹絵と、どっかへ初詣に行ったりしないのか」

「樹絵ちゃんは、流石に実家へ帰ってるらしい」

「そっか、普段はジュンの所へ泊まってるんだから、正月くらいは実家に帰るよね」

自分には、下宿時代から、正月に帰る場所が無かった。裕一の

生前、二年間だけは、裕一の一人暮らしのアパートが実家代わりになっていた。

年末年始に家族の元へ帰ると言う行為自体、縁の無い事だった。

「そう言う事だ。 樹絵ちゃんは、俺とは違うからな」

「北海道は今頃、雪が深いんだろうな」

「だろうな。 今度、夏にでも行ってみるか？」

「和尚は毎年、行ってるとんだよね。 働いてる所、見に行ってみようか？」

「今年も行く気なのか？」

どうせ行くなら、由香子の所へ行っただ方が良いのではないだろうか、倉真は思った。

「今度、聞いてみようか？ で、今年も行くって言うなら、遊びに行ってみるのもイイかもね」

「休み、取れるのか？」

「それが、問題かな」

「取れたら、行くか」

「お盆休みくらい貰えるんじゃないかとは、思うけどね」

倉真も同じ事だ。 有給休暇はあるけれど、家族持ち以外の従業員一同は消化し切れずに、たんまりと残ってしまっている。

元日で道は空いていた。 車は順調に、東京の東の端へと距離を伸ばす。 利知未は成るべく気を紛らせるように、余り関係の無い事を選んで話題に載せていた

一美は、二人が来る予定の時間を聞いて一端、自室へ引っ込んでいた。

居間での両親の雰囲気は、そわそわしていた。 緊張の所為か、父も新聞を上下逆さまにして手に取ったり、母も、まだ茶が残って

いる湯飲みに、ついうつかり注ぎ足して溢してしまったりと、小さな失敗が多くて面白かった。

けれど、それに釣られて自分まで緊張し始めてしまった。

自室で定期購読している雑誌の、『新年特大号・今年の運勢』のページを、自分と全く関係ない星座欄まで熟読してしまった。

それから時計を見た。十時半に成る所だった。

「あと、三十分くらいかな？」

呟いて、他にすることは無いか考えてみた。思い付かなくて、衣装換えなどしてみた。部屋着から普段の外出着へ着替えて、髪を直す。

『そう言えば、利知未さん。化粧はそんなにしてなかったよね』  
スッピンに近い感じで、それでも綺麗な顔立ちをしていた。少し中性的な感じだったかもしれない。

お客様を迎える支度を整えて、五十分頃、階下へ降りて行った。

キッチンへ顔を出すと、母親の緊張は天辺まで届いていた。落ちて着けなくて、お客様の食器を色々と引っ張り出して並べて、比べていた。

「一美、どれが良いと思う？」

「どれでも一緒じゃない？ だけど、その桜の湯のみ、綺麗だね」

白い地に、淡い桃色の八重桜の花が描かれている湯飲みに、手を伸ばした。

「こんなの、あったんだ」

「出て来たのよ。棚の奥の方へ仕舞いつ放しだったわ。それに

しょうか？」

「良いんじゃない。そろそろ、来るかな？」

時計を見て母も頷いた。

「そうね。お父さん、早く戻ってくれば良いけど」

「どっか行っちゃったの？」

「散歩してくるって、十時過ぎに出て行ったのよ。落ち着かないみたいだね」

そう言って、くすりと笑う。

「落ち着かないのは、お母さんも一緒でしょ？ 緊張がこっちにまで、移ってきちゃいそうだったモン」

「そりゃ、緊張するわよ。どんな人何だろうね？ 利知未さん」  
利知未が来る前に、あの言葉を伝えてあげた方が良いかも知れないと、一美は思った。

もったいぶるように間を置いてから、言い出した。

「背が高くて、綺麗な人だよ。で、凄く優しく、お料理が上手なの」

娘の言葉に、母親が目を丸くする。

「まるで、見て来たみたいと言い方をするじゃないの？」

「会いに行つて来ちゃったから」

母はビックリして、言葉が一瞬、出なかった。

「…いつたい、何時の間に」

「お兄ちゃんが、まだ通つて来てた時」

「どうやって探したの？」

「病院、六軒回つて、足で探しました」

「……あんたつて子は」

娘の行動力に、呆れ果ててしまった。

「利知未さんに言われていたの、伝えるの忘れてた。自分が言う事じゃないかも知れないけど、お母さんに、息子さんをもっと自慢にして下さいって伝えてくださいと、言っていました」

「……自慢出来るような息子じゃ、なかったわね。……昔は」  
言葉の裏を良く考えて、母親は、そう呟いた。

二人が到着する寸前に、父親が帰宅した。自宅へ向かって歩いて行く後姿を、倉真は車の中から見付けてしまった。

「親父だ。何処、行ってたんだ？」

自分達が来る事は、判っていた筈だ。

「お父さん？」

一気に、利知未の緊張が復活してしまった。

少し前を歩く後姿を、じっと見つめてしまう。狭い道で、車の

速度はゆっくりだった。

『背、高い人なんだ……。身体も、ガッチリしている方なのかな』

そんな感想を持つ。利知未の視線は、その背中に釘付けだ。

「追い抜いちまうな。……。緊張、してるか？」

チラリと利知未の顔を横目で見て、倉真が言う。ギアから手を離

して、利知未の膝の上に置かれている手を取る。

掌の向きを変え、倉真の手を確りと握り返した。緊張で震えて

いた。

「…平気だ」

呟いて、倉真は、自宅前へ車を止めた。

ギアを切り替える為、一度確りと利知未の手を握ってから、その手をそつと解放した。

自分の横を通り過ぎて行った車に、神経は届かなかつた。今の気持ちには、それ所ではない。数メートル先の自宅前で止まった車を見て、始めて運転席と助手席の後頭に注目した。足が止まる。車のドアが開いて、頭をぶつけないように少し身を屈める様にながら、息子が姿を現した。

倉真は振り向いて、父親にニヤリと笑って見せた。

「よう、親父。何処まで行ってたんだ？」

「…散歩だ。挨拶も出来んのか？」

「明けておめでとう」

肩を竦めて言いながら、助手席側へ周ってドアを開く。利知未の緊張した顔を覗き込んで、もう一度囁いた。

「平気だ」

小さく頷いて、利知未は漸くシートベルトを外した。倉真が身体を開いて、車を降りる利知未の手を取ってくれた。

父親は、自宅の玄関に向かって、漸くゆっくりと歩き出した。

助手席から、すらりと背の高い、綺麗な女性が、息子に手を取られながら降り立った。さわやかな水色のワンピースが、良く似合っていた。

女性は自分の姿を認めて、深々と頭を下げた。顔を上げて、緊張した声で挨拶してくれた。

「始めまして。明けて、おめでとうございます」

落ち着いた声質だ。聞いている方も、少し気が落ち着けそうな声だった。

「…うむ」

そんな声しか、出て来なかった。

倉真の父親は、利知未に小さく頷くような会釈を返して玄関へと消えた。

利知未は動けなくなってしまった。

「大丈夫か？」

言いながら、後部座席から利知未のバッグとお年賀を取り出して、ドアを閉めた。バッグを受け取って、利知未は小さく頷いた。

自宅前で車が止まる音と、その後の、兄と父の声を聞いて、一美は急いで玄関へ向かった。母親は小さく深呼吸をしてから、ゆっくりと動き出す。

娘から、今日やってくる女性に会いに行った時の話を聞いた。兄には内緒にしてと、頼まれた。

話を聞いている内に、益々、これから会つのが楽しみに成つていた。

今日、漸く。その女性を見る事が出来る。

一美は、パタパタとスリッパの音を響かせて、廊下に行く。父親が何とも言えない顔をして、靴を脱いでいた。

「お父さん、お帰り！ 利知未さん!？」

父親には言い流して、一美がサンダルを引っ掛けて顔を出した。

玄関に向かっていた利知未は、一美の笑顔を見て気持ちが和らいだ。

「明けましておめでとう、一美さん」

笑顔が自然に出てしまった。二人の様子を見て、倉真が変な顔をする。

「初めてじゃ、無いのか？」

つい、聞いてしまった。一美と利知未は視線を合わせて、しまった顔をする。母親が漸く玄関へ到着した。散歩から帰宅した夫に声を掛けた。

「あなた、お帰りなさい」

夫は無言で頷いて、居間へ引っ込んでしまった。

兄に突っ込まれて、一美は小さく舌を出していた。二ヶ月振りによつて来た息子と、その場の様子を見て、母親は小さく笑ってしまった。

「もう、ばれちゃったのね」

「失敗した」

「倉真、ごめんね」

利知未は素直に、倉真に頭を下げていた。

「いらつしやいませ。お待ちしましたよ」

倉真の母親に声を掛けられ、慌てて身体の向きを変えた。恥ずかしくて赤くなつてしまふ。深々と頭を下げて、顔を上げる。

「始めまして。 瀬川、利知未と申します」

「息子が、お世話になっております。 兎に角、上がって下さいな」  
倉真にも、お帰りなさいと声を掛けた。

一美の登場で、利知未の肩の力が抜けてくれた。 いくらかりラ  
ツクスすることが出来て、漸く利知未の頬に笑顔が浮かびだした。  
「ったく」

倉真はそう呟いたが、内心で、少しだけ一美に感謝していた。

居間に通され、改めて倉真の家族と挨拶を交わした。

「新年早々、お邪魔致しまして」

確りと三つ指を突いた利知未を見て、両親は感心した。

「こちらこそ、元日からお呼びたて致しまして」

母親も頭を下げた。 顔を上げて、ニッコリとしてくれた。

「ご挨拶代わりに」

利知未は用意して来たお年賀を差し出した。

「ご丁寧にも」

受け取ってくれた。 利知未は、ほっとした。

「彼女が、結婚したい人だ」

倉真も少し気恥ずかしい。 利知未が、自分で名乗ってくれた。

「瀬川 利知未と申します。 宜しく願います」

自分から言つべき事は、他には何だろうか……？ 少し考えてしま  
った。

父親は何を言うべきか、全く判らない。 元々、口が達者な方  
ではない。 母親が、今までも上手にフォローして来たのだ。 お得  
意様になってくれたお客様へのご挨拶も、いつも母親の仕事だった。  
それから、母親が上手く舵を取ってくれた。

結婚しても、同居する事にはならない。姑として言うべき事も、特には無い。そのつもりで、色々と彼女の人となりを知りたいと思っただ。

利知未は素直に、母親からの質問に答えた。

「一美が、行き成りお邪魔したんですって？ ご迷惑お掛けしました」

「いいえ。尋ねて来てくれて、嬉しかったです。とても、良いお嬢さんですね。彼女が妹に成ってくれるのなら、本当に嬉しいと思いました」

「我が俣で、困ってますよ。利知未さんのご家族は？」

その質問は、少し怖かった。けれど、それにも素直に答えた。

「お恥ずかしい話ですが、私の両親は、私が幼い頃に離婚してしまいました。兄が二人居りまして、三人とも母に引き取られました」

「そう……。お兄さん達は、何をされているの？」

倉真が、心配そうに利知未を見ていた。その倉真へ小さく頷いて見せて、利知未は話し出した。

「長兄は、もう十一年前に事故で亡くなりました。もう一人の兄は食品会社の営業職へ就いております。結婚が早くて、二人の子供と、奥さんと、今は練馬におります」

「お母様は、お兄様とご一緒に？」

「…母は単身、ニューヨークで働いております」

目を伏せてしまう。利知未にとって、家族構成は一番聞かれない事かも知れない。

言葉が無くなってしまった。

「彼女の事情は承知の上だ。利知未と結婚するんだから、関係ないだろ」

利知未の代わりに、倉真がそう言ってくれた。その言葉に勇気を貰って、利知未は続けて話し出した。

「そう言う事情で、幼い頃から両親とは離れて暮らしておりました。小学校までは大叔母に引き取られ、育てて頂きました。大叔母

夫妻が亡くなって、中学から十年間、神奈川の下宿でお世話になりました。……倉真さんとは、その頃に知り合いました」

利知未の事情に、両親は何も言葉が出ない。一美も始めて聞いた。

「……私は、彼の優しさに救われました。感謝してます」

「利知未」

倉真が呟く。母親が、漸く言葉を見つけた。

「感謝だ何て……。それは、私たちの言葉です。どうし様も無かった息子が、こんなに確りして、戻って来てくれて……」

そして、言ってくれた。

「貴女のお陰です。利知未さん、本当に、…本当に、有り難うございます」

深々と利知未に頭を下げる。

「そんな、…あの、頭をお上げ下さい」

どうして良いのか判らなくなってしまった。倉真を見て、一美を見て、父親を見て、母親に手を伸ばす。

腰を浮かせて、倉真の母の身体へおずおずと触れる。その手を取り、頭を上げて貰った。母親の目には、薄っすらと涙が浮かんでいた。

「ごめんなさい、……つい」

一美も手を伸ばして、母の背中をそつと撫でた。男二人は、どうして良いやら判らない。父親は言った。

「泣くヤツがあるか」

「ごめんなさい、あなた。いい年をして、見つとも無いですね」

母は泣き笑いの顔を見せる。父は目を逸らす。暫らくして、漸く利知未を見て言ってくれた。

「息子を、頼みます」

それまで、全く利知未に対して口を利いてくれなかった。利知未の目にも涙が滲んで来てしまう。瞬きして、涙を拭いた。

「……はい。有り難うございます」

再び姿勢を正して、深く頭を垂れた。立ち上がり部屋を出掛ける父親に、倉真が声を掛ける。

「親父！」

足が止まる。倉真は向きを変え、姿勢を正して無言で頭を下げた。

『有り難う』 心の中で、そう言っていた。

ふん、と小さな息を漏らして、父親は部屋から出て行ってしまった。

「ごめんなさいね、あの人は不器用な物で……。 利知未さんに、どんな顔をして見せればいいのか判らないのよ」

「いいえ。……倉真の、お父さんらしい」

首を横に振り、呟いてしまった。母親は、にこりとして言った。

「本当に、そっくりなのよ。これから先も、ご迷惑を掛けてしまふと思っけど……。 息子を、どうか宜しくお願いします」

再び頭を下げられて、恐縮してしまった。

利知未の事情は、確かに複雑だ。格式ばった家庭では、その身を受け入れるのも難しいのかもしれない。けれど、家庭の事情よりも、何よりも。

今、こうして目の前に居る息子の成長を思えば、その人柄一つが大切だと思う。他の事など問題にする気は、毛頭なかった。

暫らくして、倉真が立ち上がる。

「親父、探してくる」

「じゃ、お昼の用意、しておくわね」

「おお」

短く返事をして、倉真は居間を出て行った。

「あの、ご迷惑でなければ、お手伝いさせて頂けますか？」

言い出してくれた利知未に、母親は素直に手伝ってもらう事にした。

「そうですか？ じゃ、遠慮無しで、お手伝いして貰おうかしら」

「あたしも、やろうか？」

「そうね。三人で、急いで準備してしましましょう」  
女三人は連れ立って、キッチンへと引っ込んだ。

父親を探して、倉真は先ず家中を歩き回った。玄関に父親のサングラがなくなっているのを見つけて、靴を履いて外へ出た。

『何処へ行ったんだ？』 考えて、家の裏手にある店へ周る。そこにも居なくて、考えた。

徒歩、十五分ほどの所に、父親のお気に入り釣りの釣りスポットがある。この寒空の下、流石に釣りはして居ないのだろうが、散歩にも丁度良い距離だ。

思い付いて、河原へ向かった。

父親は、考えながら歩いていた。

息子が、もしも途中で挫折したら、その時は改めて自分の跡を継がせるのも、これから先の考えの一つだった。

その時、彼女は どうするのだろうか？

その考えと、別の思いが、もう一つ。

『あの利知未さんが、倉真と一緒になってくれるのなら……』

何事にも中途半端だった不祥の倅も、本当の意味で一人前に成ってくれるのかも知れない……。

息子よりも、一つ年上だという。現在は大学病院で、外科医として働いていると言うのは妻から聞いていた。

その生い立ちも、中々、苦勞をして来た女性のようだ。……あの若さで。

『アイツには、丁度良い女性かも知れないな……』 勿体無いくらいだ。そう、感じた。

息子と引き比べて、結婚したばかりの頃の自分達を思い出した。

妻は、昔から確り者で明るく、頭の良い女性だったと思う。思い遣り深い女性で、長年、自分を信じ、文句一つ言わずに着いて来てくれた。

妻の協力があり、自分は店を立ち上げ、軌道に乗せることが出来て来た。結婚して二十九年。普段は口には上せないが、深く感謝をしている。

『少し、昔の母さんを、思い出すな』 利知未に関して、そうも思う。

やはり、血は争えない。息子と自分は、女の好みも似ているらしい。……外見よりも、その中身を指して。

それにしても、アイツは随分と面食いだっただな、とも思った。考え事をして歩き、ふらふらと河原まで来てしまった。

何時も釣り糸を垂れている辺りに腰を下ろす。川面は、昼近くの高さから射す太陽の光を照り返している。

少し先で、少年達が凧揚げをしていた。風は強い。それでも日の光は暖かく、新春の青空には、飛行機雲が、たった一筋……。

何時もの、お気に入りスポットで。背中を丸めて、座り込んでいる父親を見付けた。倉真は近付いて行く。

「親父」

声を掛けられ、後ろを少し振り向いた。

「お袋が昼飯、準備してるぞ」  
「判った」

返事をした切り立ち上がらない父親を見て、倉真はタバコを取り出した。

火を着け、呑気に吸い付け煙を吐き出した。父親の眺めている川面に、自分も視線を向ける。

父親がポツリと、溢すように言った。

「お前は随分、面食いだつたんだな」

「外見に惚れたんじゃない、ネーよ」

「……判っている」

ゆつくりと立ち上がり、もう一言、漏らした。

「母さんの、若い頃を思い出した」

「お袋は、美人だったのか？」

少し、ふざけて聞き返してやった。

「そう言う意味じゃない」

「……判ってるよ」

父親は立ち上がって、まだ川面を眺めて止まっている。

「腹、減った。戻ろうぜ？」

息子に促されて、漸くゆつくりと歩き出した。

昼食の準備を整えて、まだ戻らない二人を待ちながら、倉真の母が入れてくれた茶を飲んでいた。

思い付いて、利知未はバッグから封筒を出した。

「あの、部屋を整理していたら、出て来たのですか……」

言いながら、封筒を母親の前へ差し出した。

「これは？」

「写真です。倉真さんとは昔からの仲間だったので、友人達と一緒に旅行へ行った事もあったので。……私も同じ物を持っているので、宜しければ、こちらへ彼の分を置いておいては、頂けませんか？」

ニコリと微笑んだ。母親はビククリして、封筒へ手を伸ばす。

「……有り難う。何よりの、贈り物です」

「二人が戻るまで、見てませんか？」

「何？ お兄ちゃんの写真?! 利知未さんも写ってるの?」

「写ってるよ? 余り、自分の顔は見られたくないけどね」

「早く開けてよ、お母さん！」

一美にせつつかれて、母親は封筒の中身をテーブルの上へ出した。

そこには、自分達と離れていた間の、息子の活き活きとした笑顔が写っていた。

「それは、倉真さんが十九歳の頃の写真です」  
キャビンの写真を指して、利知未が教えてくれた。

「この子、この頃まで、あの頭のままでったのね……」  
母親は嬉しげに、恥かしげに微笑んでいる。

一美は兄よりも、隣に写っている利知未に興味を示す。

「利知未さん、格好イイ！」

「オートバイ、乗るの？」

母親にも驚かれて、利知未はややバツが悪い感じもする。

「お恥かしいながら……」

「元は、お兄ちゃんのツーリング仲間だったって」

「それで……」

何故あの息子が、こんな確りしたお嬢さんと知り合えたのか、漸く理解した。

「利知未さん、活発なお嬢さんだったんですね」

母親はそう言って、笑顔を見せてくれた。

それよりも前は、里真達と倉真達が知り合った、彼らが十七歳の頃の写真までがある。それは倉真が焼き増し分を貰ったまま、仕舞いこんでいた中から数枚を、利知未が勝手に入れてしまった。

「その辺りからしか、有りませんが……」

「十分です。本当に、有り難う。……あの子、家を飛び出してからも、良いお友達に囲まれて……。楽しそうな顔してるわ」

まだ、少しあどけなさが残る、その頃の写真を。母親は、長い時間じっと眺めていた。

一美は、利知未と一緒に写っている写真をピックアップして、自分の手元へ引き寄せて、眺めて騒いでいる。

散歩からの帰り道、倉真と父親は殆ど話をしなかった。家が近付いて来た時、父親が言った。

「……お前には、勿体無いくらいのお嬢さんだな」

「会社でも、言われ続けているよ」

「職場では、上手くやっているのか？」

「問題ない」

「そうか」

それ切り、言葉は続かなかった。

玄関を入った途端、一美の笑い声が、居間から響いて来た。

一美は、鳩ノ巣溪谷での集合写真・三枚セットを目聡く見つけて、大笑いしている。

「利知未さん、ビショビショ！」

「悪戯されたんだよね、その双子に」

「この人達は利知未さんの、下宿の仲間だったんだ」

「そう。一人、普段は日本に居ない女の子が居るけど」

「成る程ね。 沢山、妹みたいな子が居たんだ」

下宿の仲間の話や宏治達の話をも、楽しそうに聞いていた。 母親

も、家を出ていた間の息子の様子を、興味深く聞いていた。

ただいまと、玄関から呼ばれる倉真の声に反応したのは、利知未だった。

「帰って来たみたいですね。 ……仕舞っちゃいましょう？」

「そうね」

母親は利知未に声を掛けられて、写真を集めて封筒へ仕舞い直した。

そのタイミングで、二人が居間へ姿を現した。

「お帰りなさい。 直ぐにご飯、食べられますよ」

妻の言葉に、低く唸る様な声で返事をして、父親は腰を下ろした。女三人、再びキッチンへと引き返して、昼食を居間へと運んで来た。

昼食までよばれ後片付けを手伝って、帰る前にチラリと、倉真の部屋を見せて貰った。

「ここで、十七歳になる前まで寝起きしていたんだ」

母親は、あの頃、倉真が読んでいた雑誌も、そのまま取って置いてくれていた。一冊手に取って、利知未が言う。

「この音楽雑誌、買ってたんだ」

「おお。俺の好きなバンドが、良く特集されてたからな」

「あたしは、立ち読みしてたな。小遣いが勿体無くて」

「これも、懐かしいぜ？」

倉真がバイク雑誌を手に取る。流石に、漫画雑誌だけは片付けられていた。

倉真の勉強机は、勉強する環境では無かったらしい。教科書の類よりも、音楽雑誌、バイク雑誌が、卓上を埋めている。

利知未は、その勉強机の椅子を引いて、腰を下ろしてみた。

「成る程。勉強机じゃなくて、趣味の机だった訳だ」

あの頃の倉真を思い出して、小さく微笑んだ。

後ろから利知未の肩へ、倉真が腕を回した。そっと抱き締める。

「倉真？」

「緊張、解れたみたいだな」

「一美さんの、お陰かな？ ……ね、怒らないでね？」

「何を？」

「一美さんが、倉真に黙って、あたしに会いに来てくれた事」

「……そうだな。役には、たっただけだからな」

「…うん」

それからまもなく、二人は館川家を後にした。帰りの車で、倉

真が言う。

「今日は、有り難う」

「あたしこそ、有り難う。……倉真のご家族、好きだよ」

利知未は倉真に、笑顔でそう言ってくれた。

三

翌日・二日は、利知未の用事だ。倉真は今年も、一緒に来てくれた。

「正式にって訳じゃ、ねーけどな。優さんにも、挨拶しないと」

「高笑い、してくれるんだよね？」

「マジ、やるか？」

バイクを降りて、玄関へ向かう前に、そんな事を言っていた。

今年も二人揃って顔を出してくれた事に、優夫妻は喜んでくれた。去年と違って、今年のお年玉は利知未から出ている。去年と同様、新年の挨拶をして同時に手を出す真澄を見て、明日香が呆れていた。

長男・裕一も四歳。今年の六月で五歳になる。姉の真似をし

て、挨拶と同時に手を出したりする。

「早いな。もう、こんなに大きくなったんだ」

倉真が感心してそう言った。真澄は倉真にも懐いている。裕一は、真澄よりは少々、引つ込み思案な様だ。利知未からお年玉を貰って、そのまま母親の後ろに隠れてしまった。

「裕一。貰ったら、何て言うの？」

明日香が自分の後ろに隠れた長男に、優しく問い掛ける。

「…ありがとう」

小さな声で、そう言ってくれた。

「どーいたしまして」

利知未は、笑顔で答えてやった。

新年の挨拶を終えて、改めて倉真が優に報告をした。

「俺達、結婚します」

「そうか。そうしてくれると、有り難い。コイツは、並みのヤツじゃ相手に成らないだろうからな」

「あれ？ 高笑い、しないの？」

利知未は照れ隠しに、倉真に突っ込んでみた。

「出来るか」

そう、少し剥れ顔で返事をする倉真を見て、利知未は笑った。

館川家に挨拶に行った時に比べて、気楽な物だ。倉真は既に優

一家とも顔見知りで、兄・優とも仲が良い。

冗談交じりの挨拶をおえ、今年も三人で大叔母夫妻と兄・裕一の墓参りへ向かった。出掛けに、明日香が言った。

「利知未さん、良かったわね」

今度は素直に照れた笑顔を見せて、利知未が頷いた。

「倉真と利知未が結婚したら、倉真はお兄ちゃんじゃなくて、叔父さんに成るんだ」

「賢いな。学校で習ったのか？」

真澄の言葉を聞いて、倉真は感心して言っていた。

真澄は、利知未も倉真も呼び捨てだ。明日香は、流石に咎める。

「全く。お母さんが、さん付けで呼んでるのに、どうして真澄は年上の二人を呼び捨てにするの？」

「だったら、お母さんも呼び捨てにすれば？」

「そう言う問題じゃ無いの」

軽く、頭を小突いてやった。母子の会話に、利知未と倉真は笑う。

「いいぜ？ 呼び捨てで。どーせ、近所のガキもそうだし」

「あたしも、気にしないよ。だけど、真澄。他の人達の前では、一応、さん付けで呼んでね？ そうしないと、お母さんが恥かしい

思いをするから」

「はい。判りました！ 利知未、叔母さん！」

「……ま、イイか」

肩を竦めて、利知未が言う。

「行くぞ？」

外から優が声を掛けた。返事をし、兄を追い掛けて二人は玄関を出た。

『利知未さん、すっかり女らしくなったのね』

後姿を見送りながら、明日香はそう感じていた。

今年も、始めに大叔母夫妻の墓参りを済ませた。倉真は後ろから、優と利知未を見守る。暫らくすると優が立ち上がり、利知未が振り向いた。

「お前も挨拶しておいてくれ。このじゃじゃ馬を自分が引き受けたって、ばあさん達にも報告してやってくれ」

「じゃじゃ馬って、言う？」

「じゃじゃ馬じゃなけりゃ、跳ねっ返りでどうだ」

「…ま、イイけど」

優の言葉に少し剥れて、倉真には笑顔を向けた。利知未に呼ばれて、二人で並んで墓前に手を合わせた。

利知未は今年も、長い時間、頭を垂れていた。

それから瀬川家の墓所へ移動して、三人で手を合わせた。倉真は四度目の墓参りだ。

始めて利知未に連れられて、この場所へ来た時から、そろそろ三年を数える。つまり、お互いの思いが通じたあの日からも、そろそろ三年。

始めの一年は、お互い一人暮らしをしていた。利知未の勉強とアルバイトの都合で、中々、会えない日々が続いた。

一緒に過ごす時間がもつと欲しくて、生活を共にし始めた次の一年間には、沢山の思い出が出来た。  
そして、同棲生活二年目だったこの一年間。 本当に色々な事が有った。

漸く、始めて暮参りした時の、約束の中間報告をする事が出来た。  
『婚約しました。 俺の家族は、利知未に感謝しています。 ……  
家族揃って、裕一さんの大事な妹さんを、大切にしていきたいです』  
手を合わせて、倉真は裕一に、そう伝えた。

先に顔を上げた男二人は、相変わらず長話の利知未を、後ろから見守っていた。

利知未も、裕一に報告中だ。

倉真と知り合ってから、十年以上の年月を振り返っていた。

『始めて会った時には、昔のあたしみたいな、どうし様も無い感じの男の子だった。 守ってやらないとならないヤツだって、思ってた。 ……裕兄の苦勞、少しだけ判ったと思うよ。 これも、倉真のお陰なのかな?』

小さく、微笑んでしまった。

『……今は、倉真に守られてる。 その方法は、裕兄とは違うけど……。 昨日は、倉真のご家族に始めて会って来たよ。 凄く、緊張したけど……。 倉真と、妹の一美さんに助けてもらっちゃった。 ご両親も、素敵な人達だった。 お父さんが倉真にそっくりで、お母さんは、お父さんの事、確りと立てていたよ。 あんなご夫婦に成れたらいいなって、思った。 裕兄。 あたしは。 ……倉真に一生、着いて行くから』  
……だから、もう心配しないで、ゆっくりと休んでね。

「相変わらず、利知未は話が長いな」  
優は、少し呆れ顔だ。 倉真は、その利知未の後姿に微笑んでい

る。

「一年振りだ。 積もる話が、あるんでしょよ」  
「ポケットから、タバコを取り出した。」

「一服する暇、有りそうだ。 優さんは、吸わないんですね」

「体育会出身だからな。 酒は飲むが、タバコは吸わない」

「良いっすか？」

「おお」

返事を貰って、火を着ける。 吸い付け煙を、優に掛からないように気を付けて吐き出す。

「美味そうに吸うな」

「長過ぎて、止められないんす」

「始めて家に来た時は、モヒカンだったよな」

「メタルで、好きなバンドが有って。 そのドラマーが、ああ言う頭してたんすよ。 ボーカルとギターはロン毛で、流石にそれは気が引けた」

「モヒカンの方が、気合、要りそうだけどな」

「長髪の方が、気合、要りそうっすよ」

男二人は、そんな話をして時間を潰していた。

漸く利知未が頭を上げて、立ち上がる。

「お待たせ」

「おお、行くか」

「っすね」

頷いて、タバコを消して携帯灰皿へ吸殻を捨てた。

「確りしてるじゃないか」

「利知未に、躡けられました」

「利知未に、ね」

この妹はタバコも吸っていたのだろうと、改めて思った。

優宅へ向かう車の中で、結婚の話が出た。

「何時、結婚するんだ？」

「あたしが、研修医終わるまで待ってて貰う事になってる」

「と言うと、少なくとも来年の三月以降だな」

「そうなるっすね。利知未のお袋さんにも、挨拶しねーと」

「家の母親は、日本に戻って来る気は無さそうだ。親戚の顔合わ

せと結婚式に位は、出て貰わなきゃな」

「……優兄は、明日香さんと式、してないんだよね？」

「まあ、事情が事情だったからな」

「ウエディングドレス、着たかったんじゃないかな……」

ポツリと、利知未が呟いた。

「……そうだろうな」

それについては、優にも心当たりが、無い事もない。

二人の結婚は、書類上の手続きだけで終わってしまった。一人目の子供、真澄がまだ腹の中に居た頃。明日香は、偶に結婚情報誌を開いていた。

大学と、当時のアルバイトから優が帰宅すると、慌ててクッションの下へ隠していたのを見てしまったことがある。

「あたし達の前に、明日香さんと写真だけでも、どっかで撮って貰う？」

「写真か……」

「カメラマンには、当てが無いことも、無いんだけど」

「準一の事を思い出していた。その師匠に頼む事でも、出来ないだろうか？」

「……明日香に、聞いておくか」

それ位は、感謝の気持ちとして、表してやっても良いかも知れない。

「そうして。あたしも、アテに当って見るよ」

「ジュンか？」

「その、師匠。ジュンから、聞いて見て貰おうよ？」

「……そうだな、また、その内に行って来るか。昨日の車の礼もあ

るし」

「夕飯に呼んでしまっても、良いんじゃない？」

「それもそうか」

利知未と倉真の会話を聞いて、優は安心した。倉真のお陰で、  
どうやら妹も、随分と女らしく成ってくれたらしい。

「倉真。妹を、頼む」

ふと、優が言い出した。倉真は、確りと頷いてくれた。

「絶対、幸せにします」

兄と婚約者の会話を聞いて、利知未は少し照れ臭かった。

「……普通、移動中の車の中でする会話じゃ無いかも」

「そりゃ、そーだな」

利知未に突っ込まれて、男二人、小さく笑ってしまった。

優宅へ一端、戻り、明日香に挨拶をして、バイクへ跨った。優

達はこれから子供を連れて、明日香の実家へ顔を出すと言う。

「正月くらい家族で顔を出しなさいって、夕食に誘われてるのよ」

「そっか。孫とも、遊びたいんだろっね」

「それが、一番の目的でしょうね」

明日香はそう言って、少し呆れた笑顔を見せていた。

帰宅して、新年二日目の夜を、のんびりと過ごした。

リビングで新年らしく日本酒で晩酌をしながら、話をしていた。

「やっと、落ち着いたね」

「そうだな」

「次は、顔合わせをどうするか、考え始めないと……」

何時もの落ち着く姿勢で、背中を倉真の身体に預けている。

「昨日は、その辺りの話は余り出なかったな」

「うん。 だけど、結婚は来年に成る事、倉真のご家族、残念がつてたよね」

「お前、親父にもそう感じたか？」

「何と無く。 ……気の所為かな？」

グラスを口に運びかけ、止まった。 少し視線を上を泳がせて、利知未が首を傾げている。

「気の所為じゃ、無いと思うぜ」

散歩からの帰り道、父親が言っていた事を思い出した。

お前には、勿体無いお嬢さんだ、そう言っていた。 河原では、昔の母さんを思い出したとも。

早く、嫁に来て貰いたいのかも知れない。 同居の予定は無いけれど。

「ガキ、作つちまえば早まるな」

「また…！ ……今日は、駄目だよ？」

「残念だ」

倉真に言われて、それも良いかも知れないと、利知未も一瞬だけ思ってしまった。

「それより、あたしの母親には、どうするの？」

「挨拶、行かないとな」

「態々、ニューヨークまで行くのも面倒臭いな」

「お前の、お袋だろ？」

「………そうだけど」

母親に対する思いは、直ぐには変わらない。

この事に関しては倉真も、利知未に強く言うのも可哀想な気もするが、ケジメはつけなければ成らない。

「もう少し、先でもいいよ？」

「何時だよ？」

「………じゃ、結婚式の目処をつけて、その半年前。 ……それじゃ、駄目？」

「親戚の顔合わせってのは、その位にする物なのか？」

「結論すれば、それが顔合わせって事に、成るんだろっけど」

暫らく考えて、倉真が言った。

「結婚は何時、してくれるんだ？」

「……早くても来年の九月、かな？」

「もう少し、早まらないか？」

「……早く、したいの？」

「早いトコ、自分のモノにしちみたいのが、本音だよ」

「……ごめんね」

目を伏せた利知未の表情が、色つぱく見える。

「不安になるよ。……お前、また最近、綺麗に成り過ぎだ」

自分で言っつて、照れ臭い。そっぽを向いて酒を飲む。赤くなっ

た利知未が、俯いて呟いた。

「……倉真の、所為だよ」

その雰囲気も、女らしい。始めて会った頃を思うと、驚くばかり

だ。

「……寝るか」

何と無く照れ臭い空気が流れて、倉真は寝室へ逃げることにした。

その夜、夢を見た。

夢枕に立ったのは、倉真が始めて見る、落ち着いた雰囲気の優し

げな目をした青年。少しガツチリした体格を見て、その年を憶測

して、倉真はその正体を微かに知る。

「……い……うと……」

「何だ？ 声、はつきり聞こえねーよ」

その青年は、少し困った顔をして笑顔を見せる。

「……妹が、世話になってる……。……漸く、女らしくなってくれたみ

たいだな。……やっと見る事が出来た」

「……あんだ、裕一さん、か？」

微笑して、頷いた。

「君の、お陰みたいだな。……あいつの事を解ってくれて、有り難う」

「……これは、夢か……？」

「夢枕に立つしか、出来ないだろう？ ……杯を、交わそう」

何も無い空間に、青年・裕一が腰を下ろす。

杯と徳利が、いつの間にか、その手に握られている。

気付くと、向かい合って杯を酌み交わしていた。

「ヘンな夢だな。……利知未じゃなくて、何で俺の夢に出て来るんだ？」

「妹を、頼みに来た。幸せにしてやってくれよ」

倉真の杯に、裕一が酒を満たす。自分の杯にも酒を満たして、軽く掲げる。

「……言われるまでもない。あんだと、約束した」  
「信じている」

真摯な瞳の光は、何時か利知未の瞳に感じた、信頼の光と同じだった。

乾杯の仕草をして、二人、酒を飲んだ。

「俺の方こそ、利知未には感謝している。……アイツを幸せにするのは、俺の役目だ」

「……これで、やっと落ち着いて眠れる」

杯を空けた裕一は、既に倉真の夢の中で、消えかけている。

「待ってくれ！ ……利知未にも、会ってやってくれよ」

「……魂の存在など、信じたことも、無かったが……。」  
「そうしよう」

優しいな笑顔を見せて、裕一の姿は、霧の中へ掻き消えてしまった。

同時に、目が覚めた。

隣の利知未の、寝言が聞こえた。

「……………裕兄？」

利知未の寝顔が、安らかな表情へと変わって行く……………。

「裕一さん、今度は、利知未に会いに行っただのか……………」

利知未の頬が、笑み崩れて行く。

利知未の夢にも、数年振りに裕一が現れた。

「昔、俺があれほと言っただのに、中々、女らしくなってくれなかつたよな……………。随分、長い事掛かった物だ。あれから、もう十一年だ」

懐かしい裕一の、困ったような表情。

「裕兄……………」

「やっと、見たかったお前が、見られるようになったよ」

「……………待たせてごめん。倉真の、お陰だよ」

「……………良い、青年だな。少し、口惜しい気もするが」

小さく、笑ってしまった。

「それ、焼き餅？」

「ああ。……………けど、嬉しいよ」

何も言え無い。ただ、懐かしい兄の表情を、じっと見つめてしまふ。

「……………俺は、お前達の父親代わりのつもりで、生きて来た。本来、父親の変わりに、妹はやらんと我を張る立場だ」

そう言って、自分の冗談にくすりと笑う。

「……………うん、そうだね。じゃ、裕兄。……………私を、倉真と結婚させて下さい」

何も無い空間で、利知未がキチンと正座をして、三つ指を着いている。

裕一は、その利知未を見て、穏やかな笑顔を浮かべた。

「お前の事は、頼んで来たよ。……幸せに成れよ」

「……うん。有り難う、裕兄」

「結婚式は、早めに見たいな。……あの世から、利知未達の事を見守っているよ……元気で」

顔を上げた利知未の前で、裕一はゆっくりと、消えてしまった。

倉真の前で、利知未の目から、一筋の涙が流れていた。

「……利知未」

優しい声に、利知未が薄っすらと目を覚ます。

「……倉真。裕兄に、会ったよ」

「俺も、会った」

「……幸せにしてね？」

「裕一さんとも、約束したよ」

「……うん」

頷いて、倉真の首筋に腕を回した。キスをして、唇を離して囁いた。

「愛してるよ。……倉真」

「一生、大切にするよ」

小さく頷いて、身体を離れた。

横になり直して、倉真の身体にピタリと寄り添った。

「……あのね、良い青年だなんて、言ってたよ」

「……期待に、応えなきゃな」

「うん。信じてる」

「……裕一さんにも、言っただけだよ」

魂の存在など、信じて来なかった。けれど、倉真は始めて、そ

の存在を信じようと決めた。

「優しそうな、兄貴だったんだな」

「……うん」

頷いて、もう一度お休みのキスを交わした。

寄り添ったまま二人は、朝まで、ぐっすりと眠った。

翌日、倉真は準一に連絡を入れた。

「正月休みが明けたら、聞いてみる」

利知未の兄夫婦の話が簡単に聞いて、準一はそう言ってくれた。

電話を切ろうとした時に、利知未が受話器を受け取った。

「ジユン？ 今度、ご飯食べにおいで」

「マジで？ 行く行く！」

「何時が、都合いいんだ？」

「俺、正月休みが七日まであるんだ。 師匠、沖縄旅行中だから」

「じゃ、その前が良い？ それとも、その先なら、」

今月のシフトを思い出して、利知未が言う。

「今月は、十三・十四と、二十七・二十八が土日休みだな」

「倉真、日曜は休みだよな？」

「そう。 土曜は、完全にずれ捲くってるから」

「んじゃ、十四・十五はスタジオが忙しいから、二十八日」

「スタジオが有るんだ」

「有るよ。 ポスター撮りとか屋外で撮影する時以外は、そこ使う。

空いてる時は証明写真とか、お見合い写真とかも受けてるし」

「そっか。 じゃ、そこで頼めば、優兄達の写真も撮れるんだ」

「ウェディングドレスは、どっかで借りて来て貰わなきゃだね」

「了解、兄貴に言っておくよ。 じゃ、二十八日、夕方六時くらい

に来て」

「アイアイサー！」

「樹絵とは、会ってるの？」

「明日から、四泊の予定」

「上手く行ってるんだ。何より、何より」

「倉真とは違うから」

「倉真の方が、確りしてると思うけど」

「電話でまで惚気ないですよ。んじゃ、月末に」

「うん、待ってる」

電話を切って、倉真に伝えた。

利知未達の休みは、明日までだ。

仕事が始まる前に、映画にでも行こうと約束をした。

2 研修医一年・二月

一

二月は、十一・十二日の日・月曜日の連休に、利知未の休みが丁度良く噛みあった。

先月末に準一が来た時、成人式、七五三、夏祭り辺り以外の連休なら、比較的スタジオが空いている情報を貰い、直ぐに優へ連絡を入れた。

少し照れ臭いながらも、利知未の申し出を聞いて喜んでいた明日香の為に、優も覚悟を決めた。

優の休みは、カレンダー通りだ。明日香は専業主婦である。

日曜日ならば比較的簡単に、夫婦の予定が立てられる。利知未と倉真も同行させてもらう話しに成って、二月十一日・日曜日に、写真撮影の予約を入れた。

当日は、子供も一緒に写真を撮る事に成った。優一家は自家用車を使い、利知未と倉真はバイクを使って現地へ向かう。

スタジオに着くと、準一が休みを返上して利知未達を迎えてくれた。

準一の師匠は、眼鏡をかけ、鬚を生やした、優しげな男性だった。弟子から今日の話聞いて、二つ返事で引き受けてくれた。

明日香の化粧は、利知未が朝美からレクチャーを受けて来た。

会社のパソコンを使い、利知未のパソコンとメールをやり取りして、予めウエディングドレスのデザインを知った。

数日前、利知未自身が自分の顔を使って練習をして来た。朝美の休みと利知未の休みを合わせて、下宿まで行って教わった。

「後は、あんたの感性で、モデルさんの顔考えて工夫してね」  
そう言われて来た。

その日、レクチャーの授業料変わりに、利知未が下宿の夕食の準備をしてやった。

当日は、明日香の緊張もさる事ながら、利知未も緊張してしまった。早めにスタジオへ入り、用意されていた控え室でメイクを施した。緊張で、手が震えてしまった。仕上がりを見て、明日香は満足してくれた。それで、漸くほっとした。

着替えも手伝い、スタジオに入ると、花婿姿の優が照れ臭そうに待っていた。準一と倉真は、子供達のお守り役だ。裕一もすっかり倉真に慣れた。

準一は元々、子供達にとってはヒーローみたいな奴だ。得意のカードマジックで、待ち時間の気を逸らすのに役立つた。

撮影が始まると、利知未と倉真に出番前の子供達を預けて、師匠の助手に早代わりだ。中々、確りとした働き振りを見せてくれた。

母親の姿を見て、真澄は感動した。

「ママ、綺麗！ 利知未がお化粧したの？」

「そうだよ。友達に、教えて貰って来た」

先ずは、夫婦だけでの撮影だ。その間、利知未とお喋りをしていった。

裕一は、倉真に男の子遊びをして貰っている。少し騒がしく成りそうで、スタジオの外へ出ている事にした。

「ソーマは、おじさんになるって、お姉ちゃんが言ってた。おじさんって、なに？」

聞かれて、教えてやった。

「裕一の親父さんの、妹の旦那だ」

「おとうちゃんは、リチミの、お兄ちゃん？」

「そうだ。お前も、賢いな」

頭をかいくつてやった。

それから肩車をしてやって、スタジオの周りを一周して来た。

裕一は、元気にはしゃいでいた。

「おとうちゃんと、おんなじくらい、高い！」

頭の上ではしゃいでいる裕一を見て、何時か自分の子供にも、こういう事をしてやる日が来るのだろうと思った。

倉真達が戻る頃、夫婦の撮影は終わった。明日香は母親の顔に戻る。

「裕一、涎たらして……」

倉真の頭から下るされ、母親にハンカチで顔を拭かれた。

「お前の頭、裕一の涎が落ちてるぞ？」

少し伸びをすれば、倉真の頭の上は見える。優に言われて、倉真が参った顔を見せた。

「俺の頭は、昔からガキの涎を垂らされ易いんすよ」

利知未が手を伸ばして、ハンカチで倉真の頭を拭いてやる。

「いつか、由香子を見送りに行った時も、凄かったよね？」

クスクスと、笑っていた。

二人を待っている間に、真澄にせがまれ、薄く口紅を塗ってやった。真澄が倉真のズボンの裾を引っ張って、気を向けてセクシーポーズを取ってみせる。イッチョ前な様子に、夫婦と利知未は笑ってしまう。

「倉真、どう？ 利知未に少しだけ、お化粧して貰ったの！」

倉真も小さく笑って、腰を曲げて視線を合わせてやった。

「将来、美人に成りそうだな」

「へへ」

照れ臭そうな笑顔を見せる真澄に、もう一言、言ってやった。

「利知未には、負けるけどな」

直ぐに剥れる。

「いいよーだ。 利知未より、綺麗になってやるんだから」

「明日香さんの血を引いてるんだから、きっと可愛く成れるよ」

利知未が、優しい声でそう言った。

「利知未、倉真は意地悪だ。 結婚、止めちゃえ！」

真澄が利知未の近くへ寄って来て、倉真に向かって舌を出した。

「折角、綺麗にして貰ったのに、舌出してどうするの？」

母に言われて、照れ臭そうに笑った。

「準備、整ったよ！」

準一に声を掛けられ、家族はファインダーの前に並んだ。

家族の撮影まで順調に済んで、サービスと準一の修行で、利知未と倉真も加わって写真を撮った。ファインダーを覗くのは準一だ。ピントや光彩の調節には、師匠のチェックが入る。

ゴーサインを貰って、準一が一瞬、顔を上げる。変な顔をしていた。真澄が吹き出すのを逃さずに、シャッターを押した。

真澄に釣られて、我慢していた全員が笑ってしまう。再び、シャッターの音が響いた。師匠は準一の撮影を、苦笑いして眺めて

いた。

全ての撮影が終わり、着替えを始めた。手伝ってくれる利知未に、明日香が改めて礼を言った。

「利知未さん、今日は有り難うね。夢が、一つ叶ったわ」

「…そんな。ただ、家のバカ兄貴が考え無しで、……明日香さんには、寂しい思いさせていたかなって、思ってた」

自分の結婚が身近な物に成った事を受けて、利知未の心に当時の明日香の思いが、浮かんで来たのは確かだ。

「ね、折角、借りて来た衣装、このまま返すの勿体無いし。利知未さんも、着て見ない？」

言われて、ビックリしてしまう。

「サイズ、合わないよ。明日香さんと十五センチ以上、身長差があるんだから」

「平気よ。私だって十センチヒール何だから、五センチ位、短くたって」

「…けど」

「ね、着てみてよ？ 見てみたいから！」  
半分、無理矢理、押し付けられた。

「……じゃ、少しだけ、ね」

興味は出始めていた。それでも、恥かしいのも確かだ。

「ここで着て、直ぐに脱ぐからね？」

「はいはい。着替え、手伝ってあげるわ」

明日香はニコリと微笑んで、利知未の着替えに手を貸した。

着替えてみると、ドレスの裾は利知未の踝辺りだ。ウエストが少し大きくて、胸が余ってしまう。それでも始めて袖を通したウエディングドレスに、利知未は鏡を見て頬を染める。

「……素敵。 やっぱり、いいデザインのドレス選んて来たわね、私」

明日香は少しふざけて、自分の見立てに対して自画自賛している。

「ね、もう、脱いでいいよね？」

「ちよつと待つて！」

明日香は利知未を控え室へ置いて、スタジオへ出て行った。

優を見つけて倉真の行方を聞いて、喫煙所でタバコを吸っていた倉真を、こっそり呼んで来た。

「何すか？」

「いいから、チョットだけ、ね？」

背中を押して、控え室のドアを開けた。

倉真は控え室へ入って、利知未のドレス姿を見た。

利知未はスタジオまでライダーブーツだったので、靴は履かずに裸足のままだ。 少し裾は短かったが、シンプルなデザインのドレスは、利知未にも良く似合っていた。

「……倉真！」

「……着て、見たのか？」

利知未はビックリして、姿見の影へ隠れてしまった。

「明日香さん！ 直ぐに脱ぐつて言ったよね？」

「勿体無いでしょう？ 予行練習よ」

倉真は、利知未に見惚れてしまった。

冴吏のパーティーへ行った時のワンピース姿以来、何も言えなくなつてしまった。

ノックの音がして、真澄が控え室のドアを開ける。

「ママ？ 利知未、ドレス着たの？ ずるい！」

自分も着たいと思う。

「真澄には、まだ大き過ぎるでしょ？ それに小学生の内からウエディングドレスなんか着たら、パパが卒倒しちゃうわよ」

明日香の声を聞いて、優も顔を出す。

「どうした？」

「利知未さんに、ドレス着てみて貰ったのよ。見る？」

利知未は益々、恥かしくなってしまった。準一まで顔を出した。

「あれ？ 着たの？！ 折角だから、オレが写真、撮ってやるよ」

カメラを構えて、行き成りシャッターを押した。

「あ、待って！ 倉真君、利知未さんと並んで！」

「あ？ いや、俺は……」

「おれの衣装、貸すか？ サイズは合うだろ」

「いいわね、そうしましょう！ スタジオは、まだ平気？」

「今日は、この予定だけだよ。 師匠に断って来るよ」

「ちよつと、ジューン！」

利知未が慌てて、声を掛けた。 ……けれど、遅かった。

本人達より、周りが盛り上がってしまった。 倉真を連れて行き、

優が自分の服へ着替えさせてしまった。

明日香が、さっきのお返しにと言って、利知未のメイクを直し始める。

真澄は楽しそうに、その様子を眺めていた。 裕一はスタジオの準備をし直している準一に、くっ付いていた。

準一の師匠も、利知未と倉真を見てアドバイスをくれた。

「靴は履いていないのか。 それなら椅子を使って、バストアップと上半身だけ収めてやればいい」

サービスとお遊びだ。 ファインダーは、準一が覗く。 けれど師匠も、優達を持って来た家庭用のカメラを使って、数枚フィルムに収めてくれた。

全ての撮影が終わり、着替えてスタジオを出る時。 ついでに自分達で撮ったピンナップ写真も、現像へ出して行った。

「現像できたら、オレが持って行ってやるよ」

準一が、そう言ってくれた。 利知未達へ渡しに行き、優達には、利知未がまた休みの日にでも、届けに行く事にした。

準一の師匠は、モデルとして、利知未と倉真の姿を気に入った。

「お二人の結婚式の時は、私に撮影させて下さい」

利知未達に言って、名詞を渡してくれた。

「来年の、春以降になっけてしましますが……」

「早めに教えて下さい。 予定を空けて、待っています」  
そう言って、笑顔を見せてくれた。

二

写真は、一週間で出来上がって来た。 優と明日香の分は、キチンと結婚式の時のように表装してくれてあった。

準一が写真を届けてくれたのは、翌週の日曜日、午後の事だ。

その日、夜勤だった利知未は仮眠を取っていた。 準一と倉真の声を聞いて、目を覚ました。

眠そうな目を擦りながら、利知未がリビングへ顔を出す。

「あ、利知未さん、邪魔してる」

「おはよ。 写真、出来たんだ」

「おお。 見るか？」

「うん、見たい」

ニコリと頷いて、利知未がソファに腰掛ける。

「珈琲でも、入れるか。 インスタントでイイか？」

「うん、お願い」

倉真がキッチンへ出て行く。 準一が写真を差し出して、指を指している。

「これ、オレが撮った家族写真。 結構、上手く撮れてるっしょ？」

「本当だ。 腕、上がったの？」

「コイツはね。 師匠も褒めてくれたよ」

嬉しそうに、ニコニコしている。

「被写体がリラックスしている、いい写真だって」

「あの顔、今、思い出しても笑えるよ」

カメラから顔を上げた時の、準一の顔を思い出した。 改めて吹き出してしまふ。

次に、準一が撮った利知未と倉真の写真を見せてくれた。

「これも、良い出来だって言ってくれたよ。 けど、同じ所を取った師匠の写真の方が、やっぱり上手いよな。 家庭用のカメラだったのに」

師匠の写真と、自分の写真を並べて見せてくれた。

利知未は、少し照れ臭い。 けれど確かに、良く撮ってくれてあった。

「何か、改めて見るのは、恥かしいな」

「似合ってるじゃん？ 本番は、何時になるんだ？」

「来年の春以降。 そこは、変えられない」

「研修医終わるまで、待つのか？ 結婚しても、研修医は続けられるんじゃないの？」

準一の言葉は、一理ある。 それでも、中途半端にはしたくない。

倉真が、三人分の珈琲を持って来てくれた。

「ありがと」

笑顔で受け取って、口をつけた。

「研修医って、勉強中って事だから。 中途半端なままで結婚して、その後の生活をするのは、やっぱり出来ないよ」

準一と利知未の話の流れを、倉真は考えた。

「それで良いぜ。 気にするな」

利知未の隣に腰掛けながら、倉真はそう言ってくれた。

「ま、本人達がいいなら、良いんだろうけど」

「そー言うことだ。で、こっちが優さん達の写真か」

「そう。オレの師匠、良い仕事するんだ」

「そうだな。正直、驚いた」

待ち時間の時、少し今までの作品を見せて貰っていた。写真集も

何冊か出している。売れ行きも中々、良いらしい。

「得意なのは、人物や動物だけだね。風景写真も良いよ」

「アイドルの写真集も、出した事が有るみたいだったな」

「引く手数多。だから、撮影旅行も頻繁に行ってる」

「お前は、着いて行かないのか？」

「時と場合によるよ。先輩もいるし。先輩も最近、いくつか仕

事抱えてるから、手が足りない時はオレも行く」

「仕事は、ちゃんとやってたんだな」

利知未が呟いた。あの日の準一の働き振りを、思い出していた。

「給料貰ってるから。確り、やらないとな」

「お前の口から、そんな殊勝な言葉が聞ける様になるとは、思いも

寄らなかつたよな」

倉真が突っ込んだ。準一が、ニヤリとして言い返す。

「倉真に言われるとは、思わなかった」

「そりゃ、どー言う意味だよ？」

「言葉通り」

「テメ、偶に褒めてやると、直ぐに調子に乗りやがる」

「ジユンだから、仕方ないよ」

二人の会話とじゃれ合いを見て、利知未はクスクスと笑っていた。

それから三人分の夕飯を作って、準一も誘って夕食を済ませた。

利知未が出る時に、準一も一緒に暇した。

倉真は二人を見送ってから、のんびりと一人、酒を飲んだ。酒の摘みに利知未のウェディングドレス姿を、眺めていた。

「この写真、お袋に見せてやるか？」  
ふと、そう呟いた。

自分の姿は気恥ずかしいが、あれ以来、偶に母は連絡を寄越す。その度に利知未を気遣い、結婚式の事など心配している。一美もすっかり利知未に懐いている。父親も、利知未の事は気に入ってくれたようだ。

結婚が来年の春を過ぎる事を、やはり残念がっている。

「利知未は、家に連れてくと緊張する見たいだしな……」

その内、利知未が夜勤明けで仮眠を取っている時を狙って、写真を数枚、持って行ってやるうかと思った。

『利知未にバレたら、怒られそうだし』 そう感じて、苦笑が漏れてしまった。

今月の利知未の日曜休みは、来週だ。その後の日曜日と言うと、三月に入ってからになってしまう。

シフトの変更が無い限り、来月頭の日曜が利知未の夜勤明けになる。

その前に一度、実家へ連絡を入れようと思った。

利知未は、その週の平日休み・火曜日。優宅へ写真を届けに行った。

連絡をした時、利知未達の写真も見たいと言われて、渋々ながら一緒に持って行った。

数枚、足りなくなっている様な気はしたが、あの日は利知未も仮眠から目覚めたばかりで、多少、寝惚けていた。

気の所為だろうと思いい、大した違和感も覚えずに持って行ってし

まった。

明日香は大層、喜んでくれた。

義姉の嬉しそうな笑顔を見て、利知未も気持ちが悪くなった。

自分達の写真だけは、あまり見られなくなかったのも、本音ではあつたけれど……。

足りなくなっていた数枚は、準一が撮った二人の写真の一部だ。

倉真が選んで抜いて置いた分だと言う事は、勿論、思っても見なかったのだった。

2 研修医一年・三月〜研修医二年・四月

3 研修医一年・三月

一

二月末に、息子から連絡があった。その時も母親は、結婚の準備についてしきりに気にしていた。

「利知未さんのお母さんは、ニューヨークなのよね。何かあったら、遠慮なく私に相談してくれるように伝えて頂戴よ」

毎回、そう言われる。結婚式前ではあるが、利知未のウエディングドレス姿の写真は、母の心配性にも良い薬になるかもしれない。

倉真は、そんな気楽な気持ちで写真を届けてやる事にした。

母親が、利知未の事をそれ程に気に掛けてくれているのは、嬉しい事だ。もう少し利知未の構えが取れたのなら、その内、一緒に遊びに行っても良いかと思う。両親も一美も、利知未が来てくれる事を期待している。

三月三日。丁度、雛祭りの日曜日、倉真が一人で訪れた事には、一美からブーイングの嵐が巻き起こってしまった。

家に着くなり、一美に聞かれた。

「あれ？ 利知未さんは一緒じゃないの？！」

「利知未は、夜勤明けで寝てるよ」

「信じられない！今日は雛祭りなんだよ？子供じゃないかも知れないけど、女の子のお祭りに遊びに来て、フィアンセを連れて来ないなんて、どういう見なのよ？もう！気が利かないんだから！」

「相変わらず、煩せーな」

倉真は一美に怒鳴られて、久し振りに、耳がツーンとしてしまった。

母親が奥から現れて、やはり同じ様な事を言われてしまう。

「利知未さん、小さな頃からご両親と離れて暮らしていたんだから、お雛祭りも余りした事が無かったんじゃないの？ 一緒にお祝い、してあげたかったわね」

「お袋まで、そう言うか。その内、ガキが出来たらやるだろ？」

何も今、そう騒がなくても」

「あんたは、本当に気が利かない子ね」

母親にも、一美と同じ事をぼやかれてしまった。首を竦める。

「今日は、見せてやりたい物があつたんだよ」

「何を持って来てくれたの？」

「後で見せる。ついでに昼飯、食わせてくれよ」

「散らし寿司しか、無いけど」

「構わねーよ」

そう言つて、奥へ向かつて歩いて行った。

息子の後を追ひ、母もキッチンへと入る。お茶を出してくれた。

「親父は？」

「大分、昼間が温かくなつて来たからね。今日も釣りに行つてるよ」

「そうか。置いてくから、後で親父にも見せてやつてくれよ」

「何を持って来てくれたのかしら」

「楽しみな含み笑いをして、倉真に昼飯の給仕をしてくれた。」

今月中旬、倉真は整備士資格試験を控えている。勉強は順調に進んでいた。利知未は忙しい仕事の合間、倉真の勉強にも相変わらず協力してくれている。

勉強は苦手だと言つていた倉真の仕上がり具合を見て、社長の娘婿も、この調子なら大丈夫だろうと太鼓判を押してくれた。

昼食をよばれて、居間へ移動した。母と一美も一緒になって茶を飲みながら、倉真の土産を見始めた。

「結婚しちゃったの?!」

「説明、聞いてなかったのか? 利知未の兄貴達、結婚式してなかったんだよ。利知未が嫁さんの事を気遣って、写真だけ撮りに行ったんだ。ついでに無理矢理、着替えさせられて撮影された」

「訳なんていいよ。利知未さん、綺麗だね」

母親は、目を細めて写真を眺めていた。

「あなた、本来に来年の春まで待つのかい?」

「どうやら、返って焦らしてしまっただけらしい。母に問われて、倉真が答えた。」

「利知未が、研修医はキツチリ終わらせてからにしたいって、言ってるんだ。俺はアイツに世話掛けてばかりだから。結婚しちまったら、もっと世話、掛ける事になる」

「お兄ちゃんだもん。迷惑、掛け捲りだよ、きつと」

「お前は、一言多いんだよ」

「ふんだ。気の利かない兄貴に、嫌味の一つも言わせて貰いたいわよ」

チラリと舌を出す。利知未の同じ様な顔を思い出して、小さく笑ってしまった。

「出来るだけ、結婚してから協力するから。早く、孫も見てみたいわ」

「……ガキが出来れば、結婚も早まるだろうけどな。やっぱ、それは出来ネーよ。そうになったら益々、利知未の負担がデカくなる」

「それは、そうだけどね……」

小さく溜息をついた母親に、倉真はチラリと、優しい笑みを見せた。「利知未に、言っておくよ。お袋が、孫はまだかって気の早い事、言っていたってな?」

「仕事との両立が大変なら、いくらでも協力するからって、伝えておいてね」

「ああ」

それから一時間ほど実家で過ごして、倉真は帰宅して行った。

その後、一美の説明不足から、父親がトンでもない勘違いをしてしまう事など、その時は思っても見ない倉真だった。

倉真が帰宅したのは、午後四時半近かった。利知未が丁度、起き出した頃合いだ。出掛ける前に、昼食は外で済ませて来ると言ってくれたので、今日はのんびりと休ませて貰った。

帰宅した倉真を、寝起きの利知未が出迎えてくれた。

「お帰り。もう一寸、出掛けていてくれれば、晚ご飯の準備、終わってたよ?」

「用事は済んだからな。勉強でもやってる」

「そう? じゃ、六時半頃までには、ご飯作っちゃうよ」

「サンキュ」

リビングへ倉真が引つ込み、利知未はそのまま、洗面所へ向かった。

顔を洗って、洗濯物を先に片付けた。買い物は仕事帰りに済ませていた。勉強をする倉真の邪魔をしない様に、寝室のベッドの上で取り込んだ洗濯物を畳んだ。洗濯は、溜め込まないように豆にしているの、片付ける数も少ない。直ぐに作業を終えて、リビングへ置いてある箆笥へ仕舞う。

五時前には、一休みだ。二人分の珈琲を淹れて、自分ものんびりとダイニングで一服する。今朝の新聞に目を通して、五時半過ぎには料理に取り掛かる。夜勤日の出勤前は、何時もこんな感じだ。

日曜は、倉真が出掛けていない限り、七時過ぎには夕食を取り始

める。

食事中に、倉真が今日、実家へ行って来た事を聞いた。

「一美に文句言われた。雛祭りに、お前を連れて来ないでどうするんだって」

「そっか、三月三日だ。ばあちゃん達と暮らしていた頃以来、お祝いの事、無かったな」

「ガキが出来ればやる事になるんだから、今、騒がなくても良いだろうと言ったら、お袋にまでばやかれた」

「あはは。一緒にお祝いしてくれ様と、思ってたんだ。感謝しなきゃだね」

「早く孫が見たいと、気の早い催促も受けて来たぜ？」

「それは、確かに気が早過ぎだ。……けど、それがお母さんの本音って、事なんだね。申し訳、無いな」

「仕事との両立が難しいなら、いくらでも協力するからとも言われた」

「本当に、感謝しなきゃ……。あたしは、近くに母親が居る訳でもないから、多分、本当に仕事と育児の両立は難しいと思うよ」

「……ガキ、とつと作って、さっさと結婚しちまうか？」

「そーして上げたいのは、山々なんだけど」

笑顔で話していた利知未が、困った顔になってしまった。

「悪い。冗談だ」

「……うん。倉真が、早く子供が欲しいって言うってくれるのは、嬉しいよ」

ニコリと、笑って見せた。

「けど、将来の事考えると、お金も貯めなきゃならないし。やっぱり、早くに子供を作るのは、結婚してからも難しいかも……」

「試験、受かったら、俺の給料も上がる。結婚すりゃ、手当ても出るだろ。……まだちょい早い話じゃあるが、その内ゆっくり話し

合うか」

「…うん」

倉真の言葉に、利知未は素直に頷いておいた。

館川家では、妻と娘に説明を受ける前に、父親がひよいと、息子達の写真を見付けてしまった。ビックリしてしまった。

結婚は来春過ぎになると、話を聞いていた。それなのに何故この時期に、こんな写真があるのだろう……？

けれど、その事に付いて説明を求めるのは、どうもし難かった。夕食時間の娘と妻の会話を聞いて、勝手に可笑しな解釈をしてしまふ。

「子供が出来れば、お祝いもする事になるって言ったって、どれ位先の話よ？ 大体、一人目から女の子が生まれる確立だつて二分の一何だから。もしかしたら、女の子生まれないかも知れないじゃない？ お兄ちゃん、考え無しだよ。相変わらず！」

「男だから、気が回らなかつたんでしようけどねえ」  
「そう言う理由って、有り？」

一美は膨れている。母親は、それを宥める。

「それに、仕事しながら子供を育てるって、本当に大変な事だよ。近くに実のお母さんでも暮らしていれば、頼み易いんだろうけどね」

「それは、家が変わってあげれば良いだけでしょ？ お父さんだって、孫は可愛いよね？」

話を振られて一瞬、引いてしまった。

ここまでの会話を聞いて、既に父親の頭の中には勘違いの公式が浮かびかけている。まともに返事をする事は、出来なかった。

「倉真が、来たのか」

「ええ。 昼間、写真持って来てくれたんですよ。 後で、お見せ

しますね」

「利知未さん、すっごい綺麗なの！ 早く本物で見たいよね？ お母さんも」

「そうね。早く見せて貰いたいわねえ」

「その時は、もっと利知未さんに似合うドレスを着るんだろうな…」

…。 あ！ あたし何、着て行けばいいんだろ？」

「気が早過ぎないか」

父親は漸くそう言って、会話に参加しかける。

「そんな事ないよ！ 今から考えて、気に入った服があったら即買  
い出来るように、アルバイトしてお金貯めるんだから」

「あんた、いくら服、買うつもりなの？」

「折角だから良い服、欲しいな。これから先、友達の結婚式でも着回せるような」

「それも、そうね。お友達が結婚する度に洋服、増やしていたら、お小遣いがいくらあっても足りないでしょうからね」

「良い服買って、それに合ったアクセサリーも選びたいな」

「写真と言うのは……、」

質問しかけた父親に、一美が言う。

「子供が先に出来て、結婚式出来なくて、それでウェディングドレスの写真だけ、撮って来たらしいの。で、その写真、見せて貰ったの！」

……。それ以降の一美の言葉は、既に頭には、入って来なかった。

「お兄ちゃん、子供が出来たら直ぐに結婚するって、言ってたんだよね」

突然、その言葉だけが頭に入ってきた。

「……そうか」

呟いて、何時もの半分の量で、父親の食事が終わってしまった。

黙って居間へ引つ込んだ父親を見て、妻と娘は、具合でも悪いの  
だろうかと首を捻ってしまった。

倉真の資格試験は、丁度、利知未の木・金の休みと重なった。当日、倉真は工場ではなく直接試験場へ向かう事に成る。試験終了後、職場に顔を出して、本日の出来栄えなど報告してから帰宅してくる。

試験は金曜日だった。前日、利知未は夕食にトンカツを作った。受験生のお母さんになつたつもりで、トンカツ、作ってみました。笑顔でそう言つて、仕事から帰宅した倉真へ夕食を出した。

「倉真、好きだったよね？」

「好物の内だな、サンキユ」

そう言つて、今夜も三杯飯を腹へ収める。

「あんまり食べ過ぎると、頭に血が回らなくなつちやうですよ」

利知未に突っ込まれても、倉真は全く気にしない。

「明日の朝、食い過ぎなきや平気だろ」

飯を掻き込みながら、そんな事を言っていた。

倉真の父親は、あれ以来、妻や娘に言われても写真を手に取らなかつた。頭の中では、すっかり一つの答えが出てしまつている。

『あの馬鹿のことだ。何も考えずに、ガキを作る様な真似をしたに決まつている』

そうだとしたら、予定よりも早くに孫の顔が見られる事に成る。

それはそれで、嬉しくないことは無い。けれど、同時に腹も立つ。

確りして来たと思つていたが、トンでもない勘違いだったかも知れない。

『あのバカは、昔から考え無しだった』

憤りと喜び。期待と、幻滅。両極端な気持ちの狭間で、最近、難しい顔をしたままだ。

妻と娘は、触らぬ神に祟り無しの心境で、父親をほって置く事に決めた。何を誤解しているのかも判らないままだ。

倉真と利知未、二人の周りでは、結婚までの期間の長さに、関係ない人物まで発破をかける。

試験を無事に終わらせ、会社へ顔を出した倉真を捕まえて、保坂が言った。

「婚約から結婚までが、一年半以上ってのは、一般的にはどうなんだ？」

「どうって、どういう意味で？」

「普通、結婚する迄が長過ぎる場合は、途中で上手く行かなくなる可能性が高いんじゃないか？ 女には、マリッジブルーってのがあるらしいからな」

「マリッジブルー、ね……？」

言われても、ピンと来ない。女の心理は難しい。

「女だけじゃないと思うけどな。男も、似た様な気持ちにはなるんじゃないっすか？」

そう、途中で口を差し挟んだのは、最近、中途入社して来た倉真の後輩だ。名前を、田淵 尚武と言う。今年で二十三歳になる、倉真と保坂の二歳下だ。歳が近い者同士、二人とは直ぐに打ち解けた。

「似た様な気持ちって？」

「結婚したら束縛される、他の女に手を出せない。だったら今の内に、ちよつと遊んでみるかって」

「で、遊んだ女の方が良くなって、婚約解消ってか？」

「そうそう。オレのダチ、結婚が早いヤツがいて。二十歳で彼女を妊娠させちまって、結婚したは良いけど、妊娠中に浮気して、

そっちの女が良くなって結局、離婚したのが居るんですよ」

「そりゃ、解らなくは無いか。若けりゃ、特にそうなり易いんだろっな」

肯定したのは、保坂だ。田淵は、その友人の言葉を教えてくれた。「そいつ、言ってますよ。ガキ出来る迄は彼女を一番、好きだ、愛してるってマジ思ってたけど、いざ結婚しちまうと、それまでよりも束縛が強くなって、自由が利かなくなった。その上、今までは可愛いと思っていた所までウザくなった。愛なんていうのは、幻に他ならないモンだって」

そう言う意見も、あるのだろう。それでも、倉真はこう言った。「そりゃ、浮気相手の方が好みだったって、事なんじゃないのか？そっちの心理なら、解る気もする。」

綾子と別れた切っ掛けは、利知末の方が好きだと感じてしまったからだ。

「だから、館川さんも要注意。今の婚約者、オレは知らないっすけど。他にもっと良いと思う女が出来ないとも限らないっしょ？」

その言葉には、保坂が半否定の意見を述べる。

「館川よりも、カミさんに好い男が出来るかもな。かなり良い女だと思っよ、おれは」

「そう言われると、不安になるな」

「そんなに、いい女なんですか？」

「世辞抜きで、美人だぞ。確り者で、モデル並の身長とプロポーションの持ち主だ。コイツには、勿体無いくらいだ」

「へー、見てみたいっすね」

「今度、館川の家へ押し掛けてみるか？」

「そりゃ、遠慮します。アイツ、仕事忙しっすから」

保坂と田淵の会話に、少し焦りを覚えてしまった。

三人の無駄話に、社長の檄が飛んで来た。首を竦めて、二人は仕事へ戻って行った。

「館川、そんなに帰りたくないなら、仕事をして行け！」

「済みません、帰ります！ お先！」

倉真は答えて、急いで会社を後にした。

この所、ずっと利知未には世話を掛けっ放しだった。今日は利知未も休みなものだから、早く帰ってやった方が良いに決まっている。

倉真が整備工場を後にしたのは、午後六時過ぎの事だ。保坂達は、残業時間中だった。

その日は、利知未も落ち着かない気分で、一日を過ごしていた。家においても心配になって、倉真の事が気に掛かる。気晴らしの為、久し振りに一人で、暇な時間帯のアダムへ、バイクを走らせた。

マスターは利知未を見て、笑顔で迎えてくれた。何時も通りに出掛けようと、現在も働いてくれている臯月に、声を掛けようと思っていた所だった。

利知未の姿を見て、取り止めてカウンターへ入り直した。

此処にも、結婚を控えたカップルが誕生していた。松尾と臯月がそれである。臯月は結婚後もパートとして、アダムで働く話が決まっていた。

こちらの二人は、順当に駒を進めていた。半年前に松尾からプロポーズをして、今年の五月末に結婚式の予定だ。略式ではあるが、結納も済ませている。仲人は立てない。既に、招待状の準備に取り掛かっている。

十二月に顔を出した時には、昔話が盛り上がり、話に上がる事はなかった。利知未は始めて、その話を臯月の口から聞いた。

「利知未ちゃん、久し振り！」

臯月が、ニコニコと声を掛けた。

「久しぶり。この前来た時は、パーティムだったから。臯月とも、二年振りくらいだね」

「二年じゃ利かないわよ。今、三月なんだから」

「そっか、二年五ヶ月。約、二年半振りくらいか。元気だった？」

「元気だったわよ。その内、招待状が届くと思うけど、私、再来月に結婚します」

「松尾さんと？ 何時の間に」

「この前、お前達が来た時には、もう婚約していたな」

「何、それ？ 何で、あの時に教えてくれなかったの？」

最近の利知未が使う言葉に、臯月が目を丸くした。

「雰囲気、変わったね。前より女らしくなった？」

「随分、淑やかそうになったと思わんか？」

「淑やか……。そうですね、そんな感じ」

臯月は、マスターの言葉に軽く首を傾げて考えてみて、納得した。

「そう言われると、照れ臭いけど……」

「利知未ちゃん達も、婚約したんでしょ？ マスターに聞いたわよ」

「漸く、ね。でも、結婚は来年の春以降になっちゃうけど」

「どうして？ さっさと結婚、しちやえば良いじゃない。なんだ

ったら合同結婚式でもする？」

「って、もう二ヶ月しかないのに、無理でしょ」

「無理矢理、突っ込んだじゃうとか。ウエディングドレス着て、倉

真君と飛び入り参加しちやったりして？」

臯月の過激な発言に、利知未は笑ってしまった。

「相変わらず、冗談キツイな」

「企画の帝王と呼んで」

話の途中で、新しい客が店内へ入って来た。臯月は利知未に早口で言う。

「後で休憩時間に、のんびり話しましょう？」

いらつしやいませと言いながら、客を迎え入れに入り口へと向かった。

臯月が休憩に入ってから、三人で話が始まる。

「本気で、来年の春なの？」

「春、以降。あたしは、秋位が良いんだけど……」

「それは、待たせ過ぎだろう。二年近く待たせて、更に半年も待たせるのは、アイツにも気の毒だ」

「そうだよ。浮気されちゃっても、知らないよ？」

「アダムでまで、発破を掛けられるとは思わなかった」

「他の人も、同じこと言ってるんでしょ？」

「……倉真のご実家は、もう少し早くして欲しいみたい」

「結構な事じゃないか。嫁ぎ先に気に入られて迎え入れられる程、

幸せな結婚は無いぞ」

「……そうなんだけど」

「どうして、そんな先なの？」

「あたしの研修医が終わってから。出来れば正勤になってからの勤務に、慣れた頃が良いなって」

「それは、お前の我侭と言うやつだ」

マスターに、一言で諭されてしまった。

「相手の親御さんは、早く孫の顔も見たいんだろう」

「それも、言われてるけど……。それについては、倉真の将来の夢もあるから、例え早くに結婚しても、直ぐには叶えて上げられないと思う」

「倉真君の夢って？」

「自分でバイクの整備工場、持ちたいんだって。それには、お金が掛かるでしょ？ あたしは幸い稼げる仕事に就いているんだから、そっちの面でも協力してあげたいから」

「外科医、だもんね。年収、ウン千万の世界だ。」

「何千万もは、稼げないよ。まだペーパーだし、研修医だし。ただ、得意分野を持って、オペの数が増えて行けば、その辺りも夢じゃないんだろうけど」

「一生、医療に携わる気は、無いと言う事？」

「出来れば。……倉真が、本当に整備工場を持てたら、そっちの経営や運営でも手伝ってあげたいと思う」

利知未の話を黙って聞いていたマスターが、呟いた。

「お前らしいとは、思うが」

「勿体無い！」

皐月が、マスターが口にするのを止めた言葉を、代わりに口にした。「……勿体無い、とは、あたしも思わない事は無いけど。折角、医者になったんだから、一人でも多くの人を助けたいのも、本音だよ。だけど、それは欲張りってモンでしょ？」

そう言って、ニコリと微笑んだ利知未を見て、皐月は小さく首を竦めた。

「そこまでの決心、私には、無理かも」

医者になるための努力は、並大抵の物では無いだろう事は、一般的な観点で見ても判る事だ。その努力をふいにして、将来、夫となる人の夢と一緒に見ようとは、もしもそれが自分だったら、考えられない事だと皐月は思う。

「それが、利知未だ」

マスターは、この議論を、その一言で纏めてしまった。

「しかし、お前の事を諸手を挙げて迎え入れてくれ様としている、アイツのご家族の意見は、聞いてやるべきだろう」

「……良く、考えてみるよ」

恩人であり、昔は本気で愛した事のある、彼の意見に。利知未は素直に頷いた。

皐月の休憩が終わってから、暫らくして、利知未はアダムを後にした。

倉真が試験を終え電話を入れた頃には、帰宅して洗濯物を片付け  
終え、一休みしていた。これから会社を回って帰ると連絡を受  
けたのは、五時前の事だ。それから暫らくしてから、夕飯の準備  
を整え始めた。

倉真が帰宅したのは、六時半前だ。食事の準備と風呂の準備は  
終わっていた。帰宅して直ぐに飯が出て来て、風呂にも入れると  
言う幸せな状況を、倉真は改めて実感してしまった。

田淵の言葉と、保坂から掛けられた発破は、ジリジリと効き目が  
浸透し始めている。家族の期待も、勿論ある。

もしも、結婚を早めたとして、今の生活は何か変化があるのだろ  
うか……？

けれど、利知未の意見も判る。取り敢えず、胸の中だけへ収め  
る事にした。

言わないと決めれば、倉真は意地でも口にはしない。夕飯時間  
は、今日の試験の出来栄等を話して、結婚時期については何も話  
題にしなかった。

「結果は二週間くらいで、会社へ届く事になる」

「そっか。良く、頑張りました。お疲れ様」

利知未から笑顔で労ってもらい、倉真は漸く人心地だ。

「マジ、高校受験以来の勉強地獄だったぜ。暫らくは、何にも考  
えたくはないな……」

「いいんじゃない？ 暫らくは、のんびりすれば。晩酌の摘みも

作って置いたから、後でゆっくり飲もう？」

「そっだな」

倉真は頷いて、食事を続けた。

今回の試験は、二級の試験だった。無事に受かっていれば、二年後には二級の試験がある。最低ライン、ここまで取得する必要がある。

その先、社長から自動車検査員の資格まで取得しろと、厳命されている。それが、お前の夢を叶える為に必要な事だと、面接の時から諭されていた。

その為に必要な技術と資格は、お前の頑張りを見て協力してやるとも。

それがあるから、倉真は社長に逆らえない。否、感謝をしている。

「俺は、良い社長に拾って貰ったよ」

食事を終え、晩酌をしながら、倉真がふと呟いた。

「どうしたの？ 行き成り」

何時もの姿勢で飲んでいた。利知未が首を傾げている。

「夢だけだったんだよ。……あの工場で、社長に出会うまでは」

「整備工場を持つって、話？」

「ああ」

頷いて、倉真は始めて、社長が面接をした時に教えてくれた事があると、利知未に話して聞かせた。

整備工場を持つために、必要な資格。 あった方が良い免許。

無ければならぬ条件。 それらの事を、面接の時、一つ一つ教えてくれたと言う。

「当然、実務経験も含めてな。俺が本気で夢を叶える為の努力が出来るのなら、『出来る限り、協力してやる』って、言ってくれたんだ」

だから、好きで続けていたバイク便のバイトを辞める事も、惜しいとは思わなかったと、倉真は言った。

「そっか。倉真にとっては、今の会社の社長さんが、あたしにとつてのマスターみたいな物だった訳だ」

「お前が真面目に学校へ行き始めた、切っ掛けがマスターだったって、前、言っていたな」

「そう。だから、今は凄く感謝しているよ」

それから今日、アダムへ行つて来た事を、利知未が教えてくれた。

館川家では、父親が、考え事をしている。

何時もよりも長湯の夫を、妻は心配していた。様子を伺いに行

き、漸く夫が風呂を上がった来た。

「倉真からは、何も連絡は無いのか？」

風呂上りに、何時も通りの晩酌をしながら、夫が言う。

「この前、顔を出しに来てからは特に何も」

「……そうか」

黙って酒を飲む。妻が言い出した。

「あの子が持つて来てくれた写真は、ご覧にならないんですか？」

利知未さん、凄く綺麗ですよ。あの子の方は、借りて来た衣装らしい感じで、どうも似合わない様子ですけど」

そう言つて、くすりと笑う。

「……見た」

「何時の間に」

「お前が、確りと片付けて置かないからだ」

アイツは、どう言つつもりなんだ？ と、一人呟いて酒を飲んで  
いる。

「済みません。けど、ご覧になったのなら、どうでしたか？」

「どうも、ごつもない」

無感動な夫の不機嫌さに、妻は小さく首を竦めた。

「そうですか。お正月に利知未さんが持つて来てくれた写真と一

緒に、アルバムに整理してありますから。ご覧になりたくなら、どうぞ」

そう言って、お盆を持ってキッチンへと下がって行った。

暫らくして、妻が風呂へ入っている時に、夫はアルバムを開いてみた。

自分達と離れていた間の、不祥の俵の姿を、改めて眺めてしまった。

『……あいつは、それなりに、生きていたらしい』 そんな感想を持った。

二十歳の頃まで、頭は派手な儘だったらしい。

頭をまともに戻してから直ぐの正月の写真で、坊主頭に近い様子を見た。少し間抜けな表情を見て、不覚にも小さく笑ってしまった。

誰も見ていない事を確認して、その先のページを捲る。

去年の七月、どこかでバーベキューをしている写真が出て来た。

それは、利知未が自分達の分から、数枚選んで混ぜて来た物だ。

その先へ進み、結婚衣装の二人の写真を眺めて思った。

『態々、これだけの写真を、持って来てくれたのか……』

その、将来の息子の結婚相手の、優しさと気遣いを改めて感じた。

今年の正月。挨拶に来てくれた時、自分は彼女に対して礼の言

葉も無く、殆ど口を利かないままだった事を反省した。

その上、彼女の事を考えずに先走った事したらしい、愚息の事を考えてむかつ腹が立つ。

『利知未さんには、詫びに行くべきかも知れない……』  
改めて、そう思った。

訪問して来てくれた時の、自分のあまりの対応。

それにつけても、愚息の行動の愚かさ。

一度、改めて、息子の嫁になるべく女性に、挨拶へ行こうかと決心したのだった。……行動に移すまでには、まだ少し時間が掛かる事となる。

三月末頃には、倉真が無事、自動車整備士資格三級の試験をパスした事が判った。利知未は来月三日の記念日に、資格試験合格のお祝いも兼ねて、倉真の好物を夕食の食卓へ乗せようと思った。

4 研修医二年・四月

—

倉真が試験合格をした喜ばしい知らせを、利知未が受けた頃。

館川家では妻が、行き成りの夫の質問に、少し驚きながら答えていた。

「利知未さんの仕事は、何時が休みなんだ？」

「月に二日は日曜日も休みがあると、言っていましたけど」

頬に手を当て、考える。

「聞いておきましようか？」

「頼む」

判りました、と答えて、妻は直ぐに息子へ連絡を入れた。

母からの連絡を受けて、倉真は利知未へ取り次いだ。月末の木・

金は、試験から丁度、二週間後。本日も、利知未は連休中だ。

「お母さんが、あたしに？」

「代わってくれ、だそうだ」

利知未は晩酌の準備を整えている所だった。自分の休日には必ず、一品か二品の酒の肴を用意する事にしている。  
「判った」

頷いて、利知未はやや緊張して、電話口へ出た。

利知未の声を聞いて、母親が夫からの質問をする。

「ごめんなさいね、今、忙しかったかしら？」

倉真の母は、利知未の事をすっかり気に入っている。その声音は優しい。

「いいえ、大丈夫です」

「利知未さんの来月のお休みは、何時になつていているか教えてもらえますか？」

「私の、休みですか？ 来月は、二日・六日、七日。 十一・十二、十六日。 その後は、二十・二十一、二十五・二十六日と、月末の三十日、ですね」

「そう、それなら七日と二十一日が、日曜日になるのね」  
メモを取り、カレンダーと見比べて母親が言う。

「有り難う。 その内、遊びに来て頂戴ね。 倉真の世話、大変でしよう？」

「そんな事、有りませんよ。 倉真さん、家事も手伝って下さいますから」

「あの子がやってるの？ 返つて利知未さんの仕事が、増えたりしていない？」

母親の言葉に、小さく笑つてしまった。

「それは、有りません。 私よりも行き届いている位です。 済みません、やらせてしまつていて」

「結婚もまだなのに。 利知未さんが、そんな事を気にする必要はありませんよ。 鍛えてあげて下さいな」

言われて恐縮してしまつた。 少し、美由紀を思い出した。

宏治の母・美由紀と、倉真の母親は、少し似ている所があるかも

知らない。

「他には、何かございますか？」

「いいえ。息子を、宜しく願いますね」

「こちこそ。倉真さんに、代わりますか？」

「そうね、確り私からも釘を刺して置こうかしら」

くすりと笑って、そう言った。利知未は倉真と電話を代わった。

息子が電話口に出て来て、母親が言う。

「あんた、利知未さんに迷惑掛けてない？」

「世話は、掛けっぱなしだよ」

「結婚前から同居しているんだから、節度は確りと守って頂戴ね。

どうしたって、こうなっているのなら、女の負担の方が多くなる

んだから」

「判ってる」

「あんた、本当に良いお嬢さんと知り合えた物だわね……。早く、

お嫁さんになってくれると安心なんだけどねえ……」

電話の度、顔を合わす度、言う事は同じだ。

「…もう一度、話し合うよ。今は、まだ時期じゃない」

「そう。じゃ、元気でやるんだよ。利知未さんに、何か困った

事が有ったら遠慮なく言う様に、あんたからも言っておいてね」

そう言って、電話が終わった。

「何か、言ってた？」

受話器を置いたのを確認して、利知未が少し不安そうに聞いた。

「何か有ったら、遠慮なく相談してくれ、だそうだ」

「そう。……良い、お母さん。どうして倉真、実家を出ちゃっ

たんだろ」

「お袋じゃない。親父と折り合いが悪かったんだ」

「それは、聞いてるけど。……結婚したら一杯、親孝行させて貰

わないとね？」

「……そうだな」

「晩酌の準備、出来たよ。飲もう？」

「おお」  
そして、のんびりと晩酌時間を取った。

月が替わって三日には、ささやかなお祝いをした。同棲生活二年が無事に過ぎて来た事と、倉真の試験合格を二人で喜んだ。

七日になり、利知未にはビックリな事件が起こる。  
午前の家事を終え、ゆつくりとしている時。電話が鳴った。

倉真の父は住所を頼りに、利知未達の暮らすアパートの最寄り駅までやって来た。真っ直ぐ、行ってしまおうかと思ったが、息子には知らせたくないと考えた。倉真が居ては、素直な感謝の気持ちも伝えられなくなりそうだ。

電話に出た声が利知未の声だった事に、緊張と、安堵を覚える。

「はい」

「……館川です」

男性の声に、ビックリした。倉真の声に似ている。けれど倉真は、今は外で久し振りに、自分達の愛車整備に没頭中だ。

「……お父様、ですか？」

「利知未さん、ですね」

「はい」

どうして良いか、判らなくなってしまった。

「……倉真さんに、代わりますか？」

「息子は、そこに？」

「いいえ。今は、外でバイクを整備しています」

「そうか」

ほっとした。どうやら、利知未だけ呼び出す事は可能そうだ。

「突然、失礼します。……今、駅に居るのですが」

「駅？ どちらの駅に？」

「戸部に」

ビックリして、声が出ない。目が丸くなってしまふ。

「何か、ご実家で有ったのですか？」

漸うそんな質問だけ、口を付いて出てくる。

「……いえ。貴女に、会いに来ました」

こんな喋り方をする人だと、始めて知った。単語・単語で区切るようにして、無駄な言葉は殆ど無い。

「私に、ですか？」

「ええ。出て、来られますか？」

「私一人で、でしょうか？」

「……そうして頂きたい」

未来の舅からの要望に、否やは出来ない。利知未は、素直に承諾した。

外でバイクを整備している倉真には、買い物へ行くと断って出掛けた。倉真の父は、息子に今日の来訪を知られたくは無いらしい。

駅で、正月に一度、会った切りの館川氏を利知未は見付けた。

館川氏は、利知未の姿を見付けると、深々と一度、頭を下げた。

近寄り、利知未も頭を下げる。顔を上げて、お互いに直ぐに言葉が出て来なかった。

「……突然に、失礼しました」

倉真の父は、利知未よりも背が四、五センチ高かった。この時代の人にしては、長身と言えるだろう。180無いくらいだ。体はガッチリとしていた。倉真は正しくこの人の息子だ、そう感

じられる位の顔付きだ。

「いいえ。取り敢えず、此处ではなんですから……」

利知未の案内で、駅前の落ち着いた喫茶店へ移動した。

席へ落ち着き、館川氏は改めて頭を下げた。土産に自分が作っ

た和菓子を、菓子折りにして持参していた。

「正月には、失礼な態度を取りました」

倉真の前に居る時よりも、怖い雰囲気は無かった。

「いいえ。私こそ、仕事の都合とは言え、元日からお邪魔致しまして……」

恐縮して頭を下げた。菓子折りを押し戴いて、脇へ置く。

館川氏が話し始める。問題の核心には、直ぐに触れる事が出来ない。

氏は、自分があの店を始めるまでの事と、始めてからの事を、ポツリ、ポツリと語って聞かせた。

館川氏は当時の中学卒業後、直ぐに和菓子職人の修行へ入ったと言う。利知未は少し、自分の中学時代の先輩、櫛田を思い出した。

親方の元で十二年間、修行を続け、お得意様の紹介で妻と見合い結婚をし、結婚後二年で子供に恵まれた。

丁度、その頃。十五年近くの修行を終えて、今の店を始めたと言う。

話の句切りが着いた頃、利知未が呟くように相槌を打つ。

「倉真さんが生まれる頃に、ご自分のお店を……」

そうすると、二十五年は自分の城を守り、育てて来たと言う事だ。

「……子供達の事は、妻に任せ切りだった」

だから長男・倉真が産まれ出てくる前。妻の体調を気にする事も、

余り出来なかった。ただ、生まれてくる我が子と、その成長を励みにして仕事へ精を出していた。

「一美が小さな頃には、店も漸く軌道に乗り始めた」

長男の幼い頃には、殆ど構って上げられなかった。その後悔も手伝って、長女・一美には激甘な父親に、なってしまった。

子供達の幼い頃の話へ入り、話の核心へ触れる切っ掛けが出来た。

「利知未さんは、今年で二十六になりますな」

「はい」

「妻が、倉真を身籠ったのと、同い年です」

館川夫妻は、三歳の年の差夫婦だ。

「……丁度良い、時期だとは思うが」

「……ええ」

確かに、肉体的にも、その先の子供の成長を考えても、程良い年齢なのだろう。夫婦の定年前には、子供が結婚出来るかも知れない。

一般的な観点で、利知未は頷いた。けれど館川氏の方は、誤解が確信へ変わった気がした。

「早くに孫を授かる事は、喜ばしいと思います」

「……申し訳ございません」

結婚が、来年の春以降になる事を言っているのだろうと思い、利知未は謝った。館川氏も何故か利知未と同時に、頭を下げた。

「愚息が、申し訳ない事をした」

「……え？」

「直ぐにも婚姻届を、出させるべきだ」

目が、丸くなってしまふ。理解が追いつく前に、館川氏が言う。

「出来れば早めにけじめを付け、腹が目立つ前には……」

「ちょっと、お待ち下さい……！ あの、何か誤解されているのでは……？」

「誤解も何も無い。あの馬鹿が、本当に申し訳ないことを」

「あの、頭をお上げ下さい」

他の客の目もある。利知未は慌てて、館川氏を促す。

「お父様、私が、妊娠していると……？」

頭を上げてもらい、小さな声で確認した。

館川氏は無言で頷いた。利知未は、何と切り替えして良いか解らなくなってしまった。

「あの…、何と申し上げて良いのか、解りませんが」

早くに孫が出来る事は喜ばしいと思うと、ついさっき館川氏は言っていた。……期待は、あったのかもしれない。

「私は、妊娠しておりません」

「…しかし、」

「…どの様な、経緯で？」

そんな誤解を、してしまったのだろうか？

そこで、初めて利知未は、倉真があの写真を持って、実家へ行っていた事を聞いた。写真の数が足りなくなっていたのは、気の所為では無かったらしい。内心で、呆れてしまった。

「…いったいどんな説明を受けて、こんな誤解に発展してしまったのだろうか？」

「……一美の説明が、中途半端だったのか」

一通り話をして、館川氏が唸っていた。

「重ね重ね、トンでもない失礼を致しました」

改めて、利知未に頭を下げた。

「いいえ、頭をお上げ下さい。申し訳ございませんでした」

館川氏が頭を上げて、利知未が頭を下げた。

「利知未さんが謝る事では」

「……私の我が侬で、結婚は、もう少し先になります。……早く子供が欲しいとは、思っているのですが……。何事も中途半端に

は、したくは無いと思っておりますので……」

早く、孫を抱かせてあげたいとは思う。

「せめて、私が研修医を終えるまでは。お待たせして、申し訳有りません」

館川氏は新たに、彼女の人柄の一端を知った。そして少し、納得した。

何事も中途半端なまま育ってしまった息子が、彼女と知り合い真面目になれた事にも、頷ける思いだ。

改めて愚息を宜しく頼みますと、館川氏は頭を下げた。

別れる前に、倉真には知らせないで欲しいと、もう一度、口止めをした。

利知未は素直に頷いて、菓子折りは病院にでも、持って行こうと決めた。

買い物まで済ませて帰宅して、午後一時を回ってしまった。倉真がまだ昼食を取っていなかった事を知る。

菓子折りを隠して、遅めの昼食を準備して、二人で済ませた。

昼食が終わると、倉真はまたバイクの整備に没頭し始めた。

その隙を見て、利知未は一美に連絡をした。

「え？ お父さん、そっちに行っちゃったの?!」

話を聞いて、一美は驚いていた。

「釣りにでも、行ってるのかと思ってた……」

「一美さん、説明不足。……倉真が、あの写真を持って行ったとは、あたしも驚いたけど」

「ごめんなさい。……それにしても」

言葉がなくなる一美の様子に、利知未は笑ってしまった。

「そっくりだね。一美さんとお父さん」

「えー?! それは、キツイな」

「そっくりだよ、あの行動力は」

言われて、一美は照れ臭くなってしまった。

「……確かに」

誤解は解いておいたからと言って、また暫らく他愛の無いお喋りをして、利知未達は電話を終えた。

二

今月は、倉真の誕生日がある。今年も、利知未の通常勤務日だった。

倉真のリクエストで、夕食は揚げ物料理が中心になった。食事をしながら話しをした。

「倉真の食好みは、優兄にそっくりだな」

「みただいな。から揚げ、美味しい」

「どーも。お代わり、いる?」

「頼む」

空の飯茶碗を差し出した。利知未は受け取って、二杯目の飯を注ぐ。

今年の誕生日プレゼントは、見事に裕一の部屋着を着潰してくれた倉真に、新しい部屋着を見繕ってみた。裕一のお古は、次のゴミの日に処分する。

「捨てちまうのか?」

ふと、倉真が聞く。

「何を？」

「裕一さんの古着」

「もう、ボロボロでしょ？」

「整備に、ウエスが要るんだ。捨てるなよ？俺が使う」

「……解った」

どうせなら、そこまで使い切ってくれようと言う、倉真の思い遣りを感じられた。利知未はニコリとして、頷いた。

食事を終え、晩酌時間に一美から連絡が入った。一美は電話で、兄貴の誕生日におめでとうの一つも、言ってるやろうと思った。

そして無理矢理に、父親と代わってしまった。

「どうした？」

父親の声に、倉真が短く問い掛ける。

「……出るつもりは無かった」

「そうかよ。……元気なのか？」

「お前に心配される事は無い」

「そりゃ、悪かったな」

倉真の言葉から、父親との会話を想像して、利知未は小さく笑ってしまう。

あの日、トンでもない勘違いをして、態々、息子の所業に詫びを入れに来た父親に、利知未は初対面の時よりも、畏怖の念が薄らいでいた。

ソファから立ち上がり、そっと二人の会話に聞き耳を立ててみた。隣に立った利知未を見て、倉真が小さく笑う。送話口から口を

離して、利知未の耳元で囁いた。

「相変わらずだ」

くすりと笑ってしまった。

「試験は、どうだったんだ」

「落ちる訳がないだろ」

「……利知未さんには、世話を掛けていないのか」

「世話は、掛けっぱなしだ」

「…大事にしる」

「当たり前だ」

受話器から聞こえて来た言葉に、利知未は少し照れ臭い顔になる。

気恥ずかしくなって来て、ソファへと戻った。

その後、母親が電話口に出たらしい。相変わらずの会話の途中で、利知未が電話口に呼ばれてしまった。少し緊張して、受話器を受け取った。

「利知未さん？ 今度、会えないかしら？」

ビックリしてしまった。

先日の館川氏との会見に続き、今度は母親かと、少しだけ引いてしまう。

「浴衣を仕立ててあげたいと思ったんだけど、サイズが解らないとどうにもならないでしょう？ 一度、測らせて貰えるかしら？」

倉真の母は、利知未に会いたいと思う。何の用事も無くては、こちらには来難いだろう事は想像の内だ。理由を考えて、誘ってみる事にした。

「お母様が、お仕立てをされるのですか？」

初めて知った。恐縮してしまう。

「趣味の内なのよ。一美の浴衣は毎年、私が仕立てているのよ。」

この前、利知未さんに似合いそうな柄を見付けたの。だから是非、仕立ててみたいと思ったのよ。こちらへ、出て来られますか？

どうしようと、悩んでしまう。

「どうした？」

ソファで飲み直していた倉真が、利知未の困った様子に声を掛ける。

送話口を手で押さえ、利知未が答える。

「お母さんが、浴衣を仕立ててくれるから、サイズを測らせてくれないか？ って。……どうしよう」

利知未の浴衣姿なら、是非見てみたい。倉真は直ぐに答える。

「良いじゃネーか？ 親孝行の内だ、相手してやってくれ」

「…でも」

利知未の近くへ寄り、倉真が受話器を取り上げてしまう。

「利知未の次の休みは、明日明後日だな。明後日、連れてくよ」

「そうね、一人じゃ来難いだろうから、そうしてあげて」

利知未の代わりに、親子で話を決めてしまった。

翌日は何時も通りの生活をして、直ぐに約束の日が来てしまう。

「バイクで行きやイイだろ？」

足を相談して、倉真が軽く答えた。

「バイクだと、Gパンになっちゃうよね？」

「構わないだろ、畏まった挨拶をしに行く訳じゃ無し。遊びに行く

感覚で十分だ。何なら、後ろ乗ってくか？」

倉真に聞かれて、考えた。最近、バイクを使う事も少なかった。

「服装、拘らなくて良いなら、自分で運転してくよ」

「この前、バッチリ整備しておいたからな」

「うん」

話が纏まって、久し振りに二人、ツーリングスタイルの外出となった。

館川家へ着くと、今日は一家が揃っていた。

利知未の姿を見て、館川氏が何とも言えない表情になった。母

親には一美から、父のとつぴな行動が確りばれている。

今回、利知未を連れて来て欲しいと思ったのも、一美から聞いた事の顛末に、自分からも利知未へ謝りたいと思ったからだ。

二人を迎えて、父親は倉真から声を掛けられる。

「親父。暇潰し、付き合っぜ」

今日の訪問は、母親が利知未に用事があったの事だ。男がいても邪魔になるだけだろう。

「……そうだな。相手をしてみる」

少し考えて、将棋をする事にした。弱い倉真でも、相手がいれば少しは張り合いになる。

今日は気持ちの良い天気だったが、息子は、釣りは苦手なままだ。

「居間は、お袋が使うだろ。俺の部屋にでも、行くか」

将棋盤を持って、二階へと上がって行った。

「さ、利知未さんは、こっちへ来て」

母親に促されて、居間へと入る。一美が気を利かせた。

「お父さん達のお茶、セットにして持って行っておこうか？」

「そうね、一美、やってもらえる？」

「はい」

返事をして、一美はキッチンへと入って行った。

居間で母親と二人切りになり、始めに謝られた。

「この前は、お父さんがトンでもない勘違いをして、行き成り伺って。本当に、ごめんなさいね。全く、うちの家族は人様の迷惑を、考えられない人ばかりで……」

困ったような顔をしている。

前回来た時よりも、いくらか利知未の緊張も和らいでいる。それは、その父親のとつぴな行動のお陰かも知れない。

「いいえ。お菓子、職場の仲間で戴きました。とても美味しか

ったです」

「お陰様で、お客様からも褒めて戴けていますよ。あの人の、誇りね」

「形も、色も綺麗で……。若いナースの間で、あれ以来、和菓子が行っています。ご馳走様でした」

「そう。喜んで戴けて良かったわ。さ、サイズ、測らせて頂戴ね？」

頷いて、言われるまま、利知未は素直に従った。

二階では、今日も初っ端から、倉真が敗戦中だった。

急須と二人分の湯飲み、茶筒を盆に載せ、一美がドアをノックする。

「おお」

ノックに倉真が返事を返した。

一美が顔を出す。ベッドの上に将棋盤を置いて、片足を上げた半、胡坐状態で、親子は対峙していた。

「お茶、持って来たよ。ポットもあるから、勝手にやってね」「うむ」

父親も、将棋盤から顔を上げずに答える。

倉真は前回より、少しはやるようになっていた。息子は勉強が嫌いだっただけで、それ程の馬鹿では無かったらしいと、内心では少し喜んでいる。

二人の様子を呆れて眺め、一杯だけ茶を淹れてから、一美は階下へ降りた。

一美は居間に入り、母親が利知未のサイズを測っているのを眺めた。

三人で、父と兄の事で話が弾んでしまう。利知未のサイズを測り終えた母親が、今度は一美に声を掛けた。

「あんたのサイズも、ついでに測ってしまおうか？」

「今年も、新しいの作ってくれるの？」

「今までので気に入ったのが有れば、直してあげるよ？」

「利知未さんと、同じ柄が良い！」

「あんたには、似合わないかもしれないねえ。少し、大人っぽい柄だから」

「色が違えば、変わらない？」

「…そうだね。じゃ、ついでに見に行こうか？」

「あの、お仕立て代…、責めて反物代は、お支払いします。おいくらになりますか？」

利知未の申し出に、母親は笑顔を見せる。

「良いのよ、そんな事は気にしないで。倉真が何時もお世話になっているんだから、そのお礼に、私が出しますから」

「でも、それでは」

「一美も、お父さんも、利知未さんには、迷惑を掛けてしまっているのだし」

「ごめんなさい。今回は、あたしの説明不足が原因です」

素直に謝る一美を見て、母親は少しだけ笑った。

「本当に。あんた達は、そっくりよ」

「あんた達って」

「倉真も一美も、まさしく、あの人の子供だわ」

母親の言葉に、利知未も小さく笑ってしまった。一美だけ、少し剥れ顔になってしまった。

一美の分まで測り終え、二階へ声を掛けた。これから近所の呉服店へ反物を見に行こうと、女三人で話しが決まっている。

「ちよつと、出掛けて来ますから。お昼には戻ります」

母の言葉に、倉真と父親の短い返事が、二階から降って来た。

女三人が出掛けて、男二人は将棋盤へ向かい続ける。既に三戦目だ。

初めて盤を挟んだ時よりは、一戦に掛ける時間が長引いている。

「少しは、勉強して来たようだな」

「本屋で立ち読みした」

「だが、まだまだ甘い。王手」

「げ、待て！ さっきの無し！」

「お前の四連敗だ」

「くそ！」

また、ムキになってしまった。父親が、不敵な笑みをを見せていた。

「…始めて見たな」

「何がだ」

「親父の憎らしい薄ら笑いだ」

言われて、大きな手を上げ、口を隠すようにして呟いた。

「…利知未さんの為だ」

長男とも仲良くしてやらなければ、可哀想だろうと、思っている事にした。

「行き成り、利知未びいきになったもんだ」

「お前が世話になっている」

自分の失敗は、知らせたくは無い。

「…そうだな。親父、もう一戦！」

盤上を片付け終え、倉真は駒を、再び並べた。

女三人は、昔から母親が世話になっている呉服店へ向かった。

徒歩で十分以内の距離だ。館川家の店は、商店街の外れに位置していた。同じ商店街にある一軒の店へと、足を踏み込む。

「いらっしやいませ。まあ、澄江ちゃん。今日は一美ちゃんも一緒なのね。お連れの、お嬢さんは？」

この店の女店主は、昔から倉真の母とも仲が良い。名前で呼び合う間柄だ。

「息子の、婚約者なのよ」

誇らしげな笑顔を見せて、そう答えた。利知未は慌てて頭を下げた。

「じゃあ、このお嬢さんが……。綺麗な方ねえ」

ここで利知未に似合いそうな柄を見つけた時、少しだけ話をした。背の高いお嬢さんなので、一反では足りないかも知れないと、相談をしていた。

「この前、見せて頂いた反物、色違いであるかしら？」

「ございますよ、少々お待ち下さい」

店主はそう言って、縦じまが薄く入った朝顔柄の反物を数点、店の奥から持って来た。

「これなんだ！ 素敵じゃない?!」

「背の高い、お嬢さんと伺っておりますから。これくらいの大柄でも栄えるだろうと、この前、お話されていたんですよ」

「あたしも背が高い方だから、大丈夫そうだね」

「色違いで、お召しになりますか？」

「是非！ あたしには、どの色が良いんだろう……?」

「利知未さんには、こちらの深い紺地を考えていたんですけど」

「こつちの深い緑も、似合いそうじゃない？」

一美が、もう一つの色を指差した。

「これは、少し難しい色かと思ったのだけど……。こちらのお嬢さんなら、良く似合いそうですね」

利知未を見て、店主が言う。

「じゃ、あたしは、このレンガ色が良い！」

地味目な赤を指して、一美が言う。

「そうね、一美なら、それくらいが丁度いいかしら？」

「でも、オレンジも可愛いな」

「それだと、子供っぽくなり過ぎな感じもするね」

利知未が口を差し挟んでしまった。始めて自分の意見を述べた利知未を見て、母親は嬉しげに微笑んだ。利知未は慌てて、俯いてしまう。

「良いお見立てですね」

店主がそう言って、褒めてくれた。

二人の反物を購入し、母は別の反物で、良い色を見つけてしまった。

「これは、さっきの柄と並べてみて、どうかしら？」

店主に相談をする。男物の、地味な茶色掛かった緑だ。

「そうですね、良いと思いますよ」

「そう、じゃ、これも戴いて行きます」

倉真の分も一緒に縫って上げようと、母親は思った。

帰宅して、まだ将棋盤を囲んでいるらしい二人に、母親は呆れてしまった。

「お昼は、どうしようか？」

二人の性格は熟知している母親が、頬に手を当てる。利知未が提案した。

「お握りでも、作りましょうか？」

「そうね、それが良いわね」

「お手伝いします」

利知未さんがやるのなら、あたしもやると一美が言い出した。

「前よりも、お手伝いしてくれる様になったわね」

母の意見に、一美が言った。

「やっぱり、料理は一つの武器になりそうだから」

利知未を見て、笑顔を見せる。倉真の事を指しているのは、直ぐに判る。

「武器と言いつつもりも、無いんだけどな……」  
照れ臭そうに、そう呟いた。

面倒なので、五人分を握り飯にしてしまった。父と自分達の分は親子で、倉真の分は利知未が握った。倉真の握り飯を作る時は弁当を作る時の癖で、つい大きくなってしまふ。その大きさを見て、親子は目を丸くした。

「倉真さん、かなり食べますから……つい」

照れ臭そうに、利知未は弁解をする。親子は笑って、納得した。

出来上がった握り飯は、母親に言われて、利知未が二階へ届けた。将棋盤から目を上げずに、二人が返事をする。

「お茶も、取り替えて置きますね」

古い茶がらを用意して来た器へ捨て、新しい茶を淹れた。

「サンキュ」

チラリと利知未を見て、倉真が礼を言う。

握り飯を見て、どれが利知未の作った物が直ぐに気付いた。二人分が一皿に盛られているが、間違える事は無さそうだ。中身は、倉真が好きな、昆布・焼き鱈子・焼き鮭。オカカと梅干も入っている。二人分で九個も乗っている。少し小振りな五つが、母親と一美が作った父親の分だ。

「後で、食器を下げに来ます」

父親に断り、倉真には小声で頑張つてと応援の言葉を残して、部屋を出て行った。

倉真は只今、七連敗中だ。自分なりの起死回生の一手を思い付いて、駒を動かした。改心の手だと思った。ニヤリと顔を上げて、父親の顔を見た。

「親父、その握り飯は、俺の分だ」

父親が、利知未の作った握り飯を何の気なしで手に取り、口へ運ぶ。「ああ、道理だな」

自分の手にしていた握り飯のデカさと、二個目の同じ具に気付く。

「チヨイ待った！ …… そいつは、俺の好物じゃネーのか？」

「お前は、焼き鱈子が好物だったのか」

そう言つて、父親は手に持っていた一つを、ぺろりと平らげてしまった。

「くそ。 親父の鱈子、寄越せ」

手を伸ばした倉真に、父親が短く答えた。

「無い。 代わりにこれを食べ」

適当に、小振りな握り飯の残りを倉真の方へ押しやった。

「テメー、こりゃ、梅干じゃネーか！」

「具なんぞ、どれも同じだ。 王手」

連敗中の上に、改心の一手を軽く交わされてしまった。

倉真は残りの自分の握り飯を、焼けになって食い切った。

「止めた！」

駒を乱暴に片付け、部屋を出て行ってしまった。

「……器の小さいヤツだ」

父親は呟いて、残りの握り飯を食い切り、呑気に茶を啜る。

利知未が食器を下げに行く前に、機嫌が悪い倉真が、下ろしてくれた。

「ありがと。 …… どうしたの？」

倉真の様子を見て、利知未が聞いた。

「何でもねーよ」

膨れっ面が、幼い頃のような。 母親と一美も、目を丸くしていた。

「もう、用事は済んだな？ 帰るぞ」

「ちよつと、倉真？！」

引つ張つて行かれながら、利知未は母親と一美に、短く挨拶を残した。

二人が帰った後、降りて来た夫から、妻は、次は皿を別々にして準備しろと、注文をされたのだった。

3 研修医二年・五月〜七月

5 研修医二年・五月

—

五月は、直ぐにやって来た。その前の話だ。

あの日の夜、母親から利知未へ連絡が入った。

「倉真のご機嫌は、まだ悪いのかしら？」

聞かれて、利知未は晩酌中の倉真を軽く振り向いた。

「そうですね、まだ、少し」

「そう。理由が、解りましたよ」

母親は、くすりと笑った。

「どうやら、お握りが原因だったみたい。」

「お握りが？」

「倉真の好きな具、利知未さんが握ってくれた分も、お父さんが、うっかり食べてしまったらしいのよ」

話を聞いて、呆れた。

「それで、お父様は？」

「将棋も勝ったし、あの人が食べてしまっただけですからね。機嫌が悪い事は、無かったけど。次は皿を別にしろと、仰ってましたよ」

もう一度、倉真を見てしまう。

呆れ顔の利知未に気付いて、倉真が変な顔をしている。利知未

も小さく笑ってしまった。

「何を、召し上がったのですか？」

「焼き鱈子だそうよ」

「そうですね、解りました。明日のお弁当で、作って持たせます」

「世話を掛けます」

「いいえ。それくらいの原因で、良かったと思いますよ」  
小さく笑った利知未の声を聞いて、母親も小さく笑っていた。

翌日、利知未は言葉通り、倉真の好きな具を使って大きな握り飯の弁当を作って、倉真に持たせた。

月の初めに、皐月と松尾の、結婚式の招待状が届いた。利知未は、出席は不可能だろうと思いつつ、封を切った。

二人の結婚式は、二十三日・木曜日となっていた。

「これなら、行けるな」

シフトを見て、利知未が嬉しそうな顔をしていた。

「休みだったのか？」

「うん。行って来ても良い？」

「俺に断る事も無いだろ、祝って来てやれよ」

倉真は、そう言うてくれた。翌日、直ぐに出席の返事を送った。

返事を貰って、皐月から折り返しの連絡が入った。皐月は、倉真とも仲が良い。披露宴は平日でも有り、利知未だけに招待状を送ったけれど、二次会には、是非、倉真も出席して欲しいと、誘われた。倉真は気持ち良く、誘いに応じてくれた。

五月に入り、利知未の外来担当日が半日増えていた。

休日以外の月二日。隔週で、土曜の午後にも受け持つことになる。今年も医師免許取立ての新人が数人、研修医としてやって来た。

外科には新しい医師は来なかった。内科と整形外科、婦人科に其々、一人ずつ。利知未は外科では相変わらず、一番の新人研修

医だ。

この一年で利知未はオペの数も増え、救急からの応援要請に応えた結果、救急車で運ばれて来た患者も、退院後は数週間から数ヶ月間、外来時間に経過を見せにやってくる。

印象的な患者も何人か居る。相変わらず若い男性患者は、利知未の外見と仕事振りに憧れてくれたりもする。日々、忙しく過ごしている。

携帯電話の通常携帯義務も、そろそろ本格的に動き出した。五月の中旬、PHSの携帯義務措置が、スタッフ全員に言い渡された。その夜、夕食時間に、倉真と話した。

「PHS、来月から持つ事になったよ」「そうか」

「基本的には、院内での連絡用だけだ。お金は払ってくれるらしいから、出費は無くて済みそうだけだね。倉真、携帯どうする?」「ありゃ、有ったで便利なんだろうけどな。首輪と鎖が、着く気分だ」

倉真の意見に、笑ってしまった。

「鎖、ね。…浮気防止には、丁度良いかも」

「する訳ないだろ。十分、満たされてるからな」

「それは、女の言葉なら信じられそうだけど……。男は、怪しいな」

「どう言う意味だよ?」

「生態の差?」

「難しい話はパス」

「そう言うだろうと思った。……そうだな、倉真が持ってくれてれば、楽は楽なんだろうけど」

その日の話は、そこまでで、取り敢えず終了だ。

来月、利知未がPHSを持ってから、どこかで倉真の分も、探してみようかと考えた。

その翌週、利知未は皇月の結婚式へ出席した。服装は悩んだ。これまでには何着かのワンピースも増えている。新しい服を買うのも勿体無いと思い、アクセサリーで雰囲気を変えて、気回す事にした。

女らしい雰囲気で見れた利知未を見て、披露宴に呼ばれていたアダムの従業員は、ビックリしていた。化粧も少しはするようになっている。

中でも高林は、随分と淑やかそうな雰囲気になった利知未を見て、まるで自分の娘が成長して来たかのように喜んでくれた。

懐かしい職場仲間と、一つのテーブルを囲んで話が盛り上がった。

二次会には、今年で社会人一年生となった、別所も顔を出した。別所も、始めてアダムでバイトを始めた頃に比べて随分、大人っぽくなっていった。

既に社会人三年目を迎えた妹尾とも、久し振りに顔を合わせた。利知未を見て、やはり目を丸くしていた。

「随分、女っぽくなったじゃないか」

「始めにそう言われた。あの頃の自分が顔を出してしまう。」

「妹尾は、少し太った？」

「言うな。大学卒業して一年間は痩せてた位なんだぞ。二年目になってから、何故か太りだしちまった。5キロは太った」

「貴子とは、まだ続いている？」

「別れた。偶に、電話はしてるけどな」

「今は友達、って事か」

「そう言う事。おれ、この後ちょっと、二人から頼まれてるんだよ」

「何かやるの？」

「大学時代の研究成果を、発表するよ」  
落語か、と思った。

「楽しみだな、頑張れ！」

「おお」

そう言って支度をしに、借りてあった店の奥へ引っ込んでいった。

妹尾と話を終え、今度は別所と話をする。

「久しぶりです」

声を掛けられ、別所と向かい合った。

「久しぶり」

「随分、雰囲気が変わりましたね」

「さつき、妹尾にも言われた」

小さく肩を竦める。別所は、いつかの朝を思い出してしまった。

「瀬川さん、昔から色っぽい所あったけど」

呟いてしまう。

「そう？ そんな事は、無かったと思うけどな」

「……あの、」

「何？」

「いや、やっぱりいいです」

あの朝の事を、突っ込んでみたくなった。

けれど、言うべきではないかも知れない。利知未から、あの頃

と同じ事を言われてしまった。

「男らしくないな。言いかけて、言うの止めるなんて」

「俺は昔から、こんなもんです」

小さく微笑んで、別所は話を変えた。

「何か、アダムの歴代カウンターバイトの同窓会みたいになって来ましたね」

「そうだな」

話していると、後ろから懐かしい声が呼び掛ける。

「利知未、久しぶり！ 綺麗になっちゃって……」  
声の主は、翠だった。 振り向いて、利知未の顔が大きな笑顔になる。

「翠さん！ ホント、久しぶり！！」

「偶に、お客で店へ顔を出す事もあったんだけど。 利知未とは、何年振り？」

「もう、解らないな。 前過ぎて」

「本当ね」

別所は客として来ていた翠を見知っている。 元、アダムの従業員である事も、承知の上だ。 目が合つて、お互いに会釈を交わした。 そこに、松尾と臯月が近付いて来た。

「翠さん、ご出席、有り難うございます」

臯月はニコリとして、翠へ頭を下げた。

いつか、自分がアダムで働き始めたばかりの頃、翠の結婚式二次会に呼んで貰った事を、覚えていた。 松尾とは当然、昔の職場仲間だ。 この二次会には、翠も喜んで顔を出した。

松尾と臯月も混ざり五人で話していると、漸く倉真が姿を表した。 真っ直ぐに、五人の所へ向かつて行く。

「あ、倉真君が来た」

臯月が気付いて、利知未に教えてくれた。

「久しぶりっす。 結婚、おめでとうございます」

先ずは、そう挨拶を交わす。

「お前らも、婚約してるんだよな？ 結婚式、何時になるんだ？」

利知未に言った松尾の言葉に、翠が反応した。

「婚約つて、利知未と彼が？」

倉真が良くアダムへ顔を出す様になったのは、利知未が高校二年になる寸前頃からだ。 その頃、既に翠と利知未の勤務時間は違っていた。

二人は、ほぼ初対面と言ってもいいくらいだ。

改めて利知未の口から、倉真を紹介した。頭を下げ、挨拶を交わす。

「昔は、モヒカンだったんだよね」

皐月に言われて、一度か二度くらいは会っているかも知れないと、思い出した。客としての印象だけで、残り残ってはいなかった。

「お会いした事も、ある筈ね」

「すね」

倉真は、何と無く見覚えている感じがする。紹介を終えた頃、準備を終えた妹尾が座布団を敷いて用意されたステージの上へ、上がって来た。

二次会の司会者が、妹尾を紹介した。出し物が始まる。

妹尾の落語の後、マイクが全員に回って来た。一人十五秒で一言ずつ祝いの言葉を述べると言う、ゲームが始まった。

司会者がストップウォッチを構えて、十五秒経過すると、言葉の途中でも何でも次へ回ってしまう。最終的に新郎新婦が一番、良かったと思う台詞に、商品を贈呈する。

企画は、どうやら皐月らしかった。

進行役を、似非落語家・妹尾に任せてしまった。司会者はタイムキーパーに専念する。招待客は、四十三人居る。全員に十五秒渡したとしても、十分少々。マイクの裁き加減などが、多少もたついたとしても、二十分掛からないゲームだ。初めにマイクが回ってきたマスターは、受け狙いだった。

二人の面白エピソードをタイトル風で紹介して、続きが聞きたい方はアダムへ客として顔を出すようにと、商売に繋げてしまう。

妹尾が突っ込んで、マイクが回る。

祝いの言葉を述べても、テレビのコマーシャル一本分の時間は、短いようで案外と長い。キチンとした言葉を伝えるには、少々、短い。

「ご結婚、おめでとうございます。松尾さん、皇月さん、末永くお幸せに…、え？ まだ、五秒以上あるの？ どうしよう??？あ、そうだ！」

等と言っている内に、時間切れのベルがなる。

容赦なくマイクが回って来て、利知未の番になってしまった。

「何言えば、良いんだろう…？ 兎に角、おめでとう。お幸せに。私も、来年には結婚します。二人よりも幸せになる予定だから、競争しよう。以上！」

間に、おめでとうと言う、従業員達の声も入った。ゲームは進行する。

「おお、時間ぴつたり賞！ はい、次！」

妹尾の声が間に入り、隣に居た倉真へ回る。

「俺から、言う事は無いだろ？ おめでとう。…この飯、美味いな。利知未の料理の次くらいか？ 今度、コイツ作ってくれ」

利知未に言っ、利知未は赤くなる。笑い声が起こる。

「マイクを使って、惚気るな！」

妹尾の突っ込みが入り、爆笑になってしまった

それから、進行役を賜った妹尾以外の四十二人、全ての挨拶が終わった。

優秀賞とは別に、利知未と倉真は特別賞を貰ってしまった。

明日は、倉真の仕事だ。三次会へ流れるメンバーも居たが、二人は二次会を終えて、帰宅して行った。

帰りの電車の中で、利知未が言う。

「懐かしい人達に会えて、嬉しかったよ」

「そうだな。妹尾さんも、相変わらずだった」

「ね。けど、あの祝辞ゲームは、恥かしかった……」

「商品、何だったんだ？」

「まだ見てないけど、商品券みたいだな。家に帰ったら、見てみよう?」

帰宅したのは、十二時近かった。早速、特別賞の商品券を確認した。商品はビール券だった。丁度、買い置きも切れそうな頃だ。

「丁度良かった。明日、これ使って買って来とこう」

利知未は財布の中へ、商品券を仕舞った。

「俺のお陰だな」

「よく言う。結構、恥かしかったんだから」

「他に何にも、思い浮かばなかったんだよ。ああ言つのは苦手だ」  
言いながら、倉真は浴室へと引ッ込んでしまった。

「着替え、出しとくね」

「頼む」

脱衣所からの返事を聞いて、利知未はリビングへ引ッ込んだ。

五月最後の一週は、何事も無く過ぎて行った。

今月は、月頭の土曜が、ゴールデンウィーク中の祝日だった。

その関係で、倉真の隔週休みが一週ずれた。これから暫らくは、月に二日は二人の連休が重なってくれそうな雰囲気だ。

松尾達から新婚旅行先からの葉書が届いたのは、月末の事だった。北海道旅行だったらしい。雄大な景色の絵葉書を見て、正月に話していた、夏の北海道旅行の話思い出した。

有名な観光地だ。夏の予定まで後、約二ヶ月。そろそろ、旅行の資料を集め始めても良いかも知れないと思った。

6 研修医二年・六月

—

月頭に、倉真の母親から連絡があった。

「利知未さんの浴衣、仮縫いまで終わったのよ。細かい直しがあるかどうか確かめたいから、また顔を出してくれる？」  
そんな連絡だ。今回は、倉真のサイズも測りたいと言う。また、二人で行く事になった。

一日に連絡があり、翌日が利知未の日曜休みだ。四月の休みから計算して、恐らく今日・明日が休みなのでは無いかと、考えての連絡だった。

翌日、二人でバイクへ跨り、出掛けて行った。  
既に梅雨時期だ。偶々、梅雨の中休みで二日程は晴天が続いていた。

実家へ着き、倉真は真つ先にサイズを測られた。利知未が仮縫いを羽織った時には、父親に付き合わされ将棋を指す。

前回の食い物の恨みは、翌日の利知未のフォローでチャラにしてやる事にした。

「やっぱり倉真の分、一反じゃ足りないわね」  
倉真のサイズを測り終え、利知未の仮縫いの直し箇所をチェック

も終え、母親が少々、呆れた顔をしている。

「子供は、小さく産んで、大きく育てるのが良いとは言っけど……。うちの子供は二人とも、大きく育ち過ぎてしまったわ」

お茶を飲みながら、利知未と女同士、話をしていた。

一美は今日、友達と遊びに出掛けていると言う。改めて二人で向かい合って、まだ少し緊張はする。それでも三度に及ぶ訪問で、少しずつ打ち解け始めた。

倉真の母は、利知未が来ると大層喜んでくれる。倉真としては、これも親孝行の内だと思っている。

ついでに、長年、確執を持って来た親父とも、そろそろ上手くやる事を考える時期に来たのだろうとも、考える。そう言う意味では随分と成長した物だと、自分で自分に感心してしまう。

今日も将棋盤を挟み、連敗記録の更新中だ。ここまで来ると、倉真の負けず嫌いにも完全に火が着いてしまった。

昼過ぎまで相手をして、昼食を済ませ、二時頃に実家を出てから、利知未に付き合ってもらって本屋へ寄り道をした。

「何、買うの？」

「チヨイ、勉強する必要を感じた」

そう言って、真っ直ぐに趣味のコナーへ歩いて行く。倉真が何を買うのか、興味を持って着いて行ってみた。

「それ、買うの？」

「コイツ読破してから、次回、親父に再戦だ」

倉真が手に取ったのは、将棋の初心者向けテキストだった。

「ま、頭を使う趣味は、持っていた方が良いとは思っけど……」  
少し呆れ、肩を竦めて、利知未が呟いた。

倉真は帰宅してから、日曜版の新聞に載っていた将棋の布陣図に

も、目を通していた。

夜、一美から電話が入る。一美の電話は、何か無い限り、いつも利知未宛だ。倉真が出て、直ぐに利知未と代わって貰う。

「今日、来たんだって？失敗したあ。約束、来週にすれば良かった。」

「一美はすっかり、利知未びいきだ。両親の前では、まだまだ見事に猫を被っている利知未を見て、感心している。」

「今度、こつちへ遊びに来る？」

「良いの？行く、行く！次の休みは、何時ですか？」

「日曜休みは、十六日になっちゃうけど」

「じゃ、お兄ちゃんも居るのね」

「そうなるかな？」

「ま、イイか。利知未さんの前でのお兄ちゃんも、観察してみたいし」

「大して、代わり映え無いと思うけどな」

「そうかな？じゃ、十六日、お邪魔じゃなかったら、遊びに行つて良いですか？」

「良いよ。一人で、来れる？」

「駅まで迎えに来てもらっても、良いですか？」

「OK。じゃ、近くなったら、何時ごろになるか教えてね」

「判りました！」

返事を聞いて、また少しお喋りをした。受話器を置くと、倉真が聞く。

「一美が来るのか？」

「再来週。良い？」

「駄目だって言っただって、アイツが止める訳、無いだろ」

「そーかも」

「一美は、お前に任せる」

「倉真はどうするの？」

「天気が良いりゃ、適当に走らせて来るか。悪けりゃ、駐輪所の屋根の下で整備でもしてる」

「一緒に、居れば良いじゃない」

「アイツの煩さは、手に負えねーよ」

倉真はそう言い捨てて、晩酌を続けた。

こここの所、倉真の実家とのやり取りが増え始めている。流石に

少しずつ、利知未も館川一家に慣れ始めた。

父親と一美は、倉真も含めて、そっくりな所がある。母親は少

し宏治の母親、美由紀に似ている雰囲気かも知れない。

息子を持つ母親同士と言うのは、似て来る物なのだろうか？

利知未は最近、倉真の母親に、そんな感想を持っていた。

館川家で、倉真の母親は、ふと思い出した。

去年末から息子・倉真を取り巻いて、喜ばしい事が続いている。

「昔、倉真が良くお世話になった、あの方には、ご挨拶方々、連絡をするべきね……」

思い付いたのは、宏治の母親、美由紀だ。

息子が、まだ実家に居る頃。父親と喧嘩をする度に、倉真は手塚家に転がり込んでいた。父親と喧嘩をする度に、倉真は手塚家に転がり込んでいた。

麻薬絡みの事件で、息子が警察のご厄介になってしまった時。

美由紀は昔、自分が離婚調停で世話になった弁護士事務所へ問い合わせ、少年法に強い弁護士まで紹介してくれたのだ。

その上、初めて一人暮らしを始めた時には、あのどうし様も無かった息子の為に、保証人にまでなってくれた。

「随分、ご連絡もしないで……。大変な失礼を、してしまって居

たわ』 反省の思いだ。  
将来の嫁となる利知未も、徐々に打ち解け初めてくれた。息子もあれ程、反りの会わなかった父親と、上手くやろうと努力をし始めてくれている。  
人心地ついて、漸くそこへ思いが至った。

翌週の日曜日、以前、聞いていた住所へ伺って見る事にした。  
夜の商売の家でもある。 平日の昼過ぎ、久し振りに美由紀へ電話連絡を入れた。

倉真の母からの電話に、美由紀は驚いた。 昔、倉真がまだ、良く手塚家へ居候をしていた頃には、頻繁に連絡を取り合っていた。  
倉真が、一人暮らしを始めて日が浅い頃には、時折、手紙のやり取りをしていた。  
忙しい日常の中、徐々にそのやり取りも減って来て、ここ数年は年賀葉書を取り交わす程度の、間柄だった。

電話口で倉真の母親から、利知未達の婚約話が語られた。 美由紀には既に判っていた事ではあるが、心からのお祝いの言葉を述べた。

これまでのお礼も兼ねて、一度、ご挨拶へ伺わせて頂きたいと申し出た澄江の言葉を、美由紀は謹んで受け入れた。

二

十六日・日曜日。 約束通り、一美が倉真達のアパートへ遊びに来た。

倉真に内緒の訪問から、二度目の事だ。 道はうる覚えだった。 駅まで迎えに来てくれた利知未を見つけて、大きく手を振った。

「利知未さん！」

「生憎の天気だね。 大変だった？」

「電車へ乗っちゃえば、濡れる事は無いから。 平気でした」

ニコリと、笑顔を見せて答える。 利知未も笑顔を返して、駅の構内を抜けた。

ここからアパートまでは、徒歩十分と言う所だ。 利知未は何時も、バスは利用しない。 けれど、今日は天気も悪い。 朝から雨足が強かった。 一美もいるので、バスを利用して帰宅する事にした。

一美を連れて帰宅すると、倉真がソファでうたた寝をしていた。 顔には、この前、購入して来た将棋のテキストが、裏返しに被さっている。

雨も、もう少し弱ければ、駐輪所の屋根の下でバイクの整備でもしていようと考えていた。 だが今日の天気では、あの場所にしゃがみ込んでいれば、雨水の跳ね返りを受けてビショビショに濡れてしまう。

「だらしないな。 こんな所で、うたた寝してる」

一美は、兄の姿を見て、口をへの字に曲げている。

「活字は、倉真にとつての睡眠薬だから。 けど、これじゃ、ゆっくり話も出来ないな。 倉真、寝るなら、ベッドへ行きな」

利知未に優しく起こされて、倉真は寝惚けてしまった。 無意識に、利知未の身体を引き寄せてしまう。

一美はビックリした。 けれど、つい観察してしまった。

利知未が慌てて、身体を離れた。

「ちよつと、倉真！」

「あん？」

「一美さん、来てるよ！」

「一美？」

漸く目が覚めた。寝惚けてやってしまった事は、覚えていない。

「…そう言や、今日、来るって言ってたな」

大欠伸をして起き上がった。利知未は赤くなってしまう。恥かしくて、一美には顔を見せられない。

一美はニヤけた顔で、寝ぼけている兄を観察していた。

「寝るんなら、ベッドへどうぞ。あたしは、一美さんと静かに話でもしてるから」

「おお。…雨は？」

「相変わらず、酷く降ってるよ。バイクの整備は、今日は無理だね」

「そうか。…ンじゃ、寝て来るかな」

昨夜は、少し遅くまで起きていた。連休で二人の休みが同じなのだから最近、二週間に一度は、夜遅くまで晩酌をしよう。

それから直ぐに、倉真が大人しく眠る訳は無い。当然、利知未

も寝不足気味だ。倉真の大欠伸に釣られて、利知未も小さな欠伸を噛み殺した。

倉真が寝室へ引っ込んでから、利知未が珈琲を淹れてくれた。

お持て成し用に、簡単に作れるレアチーズケーキも準備してあった。食べ切れない分は明日、病棟のナース達の腹へ納まる計算だ。

そう言う事で、利知未はナース達からも人気者である。昔とは理由こそ違うが、女性にモテているのは、あの頃から変わらない。

利知未の手作りケーキは、里沙直伝レシピによる。美味しさは保証付きだ。一美は、二人分ほどのケーキを平らげてしまった。

「利知未さん、お料理だけじゃなくて、お菓子も作るの上手なんですね！」

ニコニコしている。

「これは、下宿時代の大家さんが上手に作ってたのを、教えて貰ったんだよ。 レシピ、書き写して行く?」

「良いんですか? じゃ、是非!」

若い女性らしく、一美は甘い物も好きだ。 これまでも父親の新作和菓子の判定人は、一美が一番の権限を持って来た。 菓子について舌は、かなり肥えている。 喜んで、レシピをいくつか教えて貰った。

余り騒がしくなつては、隣の寝室で眠っている倉真を起こしてしまふ。 極力、声の大きさに気を付けながら、一美と二人で女同士の話で盛り上がってしまった。

一美も大学三年。 年頃のお嬢さんだ。 恋愛の話から、将来の就職についてまで、話しが始まれば取り留めが無い。

倉真が知らない利知未の恋愛話も、一美は教えて貰った。

一番驚いたのは、やはり敬太の事だった。 敬太は今、あのバンドが解散してからも、音楽活動で、それなりの活躍をしていた。

自分の将来の義姉は、芸能人の元恋人と言う事だ。 驚かない筈は無い。

「けど、内緒でね?」

利知未に、念を押されてしまった。

「お兄ちゃんも、知らないんだ」

「倉真は、敬太の事は知っているけど、あたしと付き合っていた事は知らないよ。 ……言えないでしょ? やっぱり」

「どうしてお兄ちゃんが、敬太さんの事を知っているの?」

「……昔、あたしが参加していたアマチュアバンドの、ドラマーだったから」

また、ビックリしてしまった。 利知未はバイクだけではなく、そんな事までしていたのかと言葉も出ない。

「そのライブを、倉真が見に来てくれていた事が、知り合った切っ

掛けだつたから……」

実兄と婚約者の馴れ初め話は、とても興味深かった。そして利知未が昔、かなりのヤンチャ者であった事を、改めて知る。兄との関係も納得だ。

「けど、凄いです。そんなに色々な事をしながら難しい医大に受かつて、今はお医者さんだなんて……。あたしには、絶対無理だ」

「勉強は、兄貴や友達に随分、助けて貰って来たから」

「そう言う利知未の横顔を、じつと見つめてしまった。」

「どうしたの？」

「利知未さん、スーパーウーマンだわ……」

感心した一美の言葉に、小さく吹き出してしまった。

「かなり我が侷で、自分勝手なヤツだよ」

マスターに、我が侷と言われた事を思い出していた。

話が弾んでしまい、時間を気にしていなかった。時計を見て驚いた。午後一時半になるうとしていた。

「昼を随分、過ぎてるな。一美さん、お腹空かない？」

「そう言えば、そろそろ」

「じゃ、何か作るよ。テレビでも見ながら、待つてて」

「お料理、教えて！」

「手伝ってくれるの？」

「お手伝いしながら、教えて貰いたいな」

一美の申し出に、利知未は笑顔で頷いた。

食事の準備を終えてから、倉真を起こした。

三人で遅い昼食を済ませ、余り遅くなってしまう前に二人で一美を送り、駅まで行った。倉真は良く眠れたらしく、随分スッキリした顔をしていた。

和美と別れて、帰り道。倉真が思い付いて聞く。

「来週、お前の誕生日だな。何が欲しい？」

「もう、そんな時期か……。段々、一年が早くなってきたな」

「忙しいからだろ？ 特にこの一年は、色々あったからな」

「…そうだね」

雨が、小振りになって来た。利知未は傘を閉じて、倉真の傘へ入った。腕を組んで、ニコリと言った。

「今年の誕生日は夜勤だから。昼間、倉真とのんびり出来れば、それで良い」

それじゃプレゼントが決まらないと、倉真が困った顔をして呟いていた。

一週間は、あつという間に過ぎてしまった。

倉真は、利知未の誕生日プレゼントを決める事が、出来なかった。

考えた末、日曜日。利知未が仮眠を取っている間に、決心して

花屋の店前に立つ。

「ここは、アパート最寄り駅の、駅前商店街だった。

『宝石店、入るより根性要るな……』

直ぐその本屋の店先と、花屋の店先の間を、うろつくと往復していた。

花屋の奥で、その様子を何気なく見ている人物が居た。

『あの人、お店へ入り難くて、ウロウロしてるみたい……』

女子高校生の、アルバイト店員だった。バイトを始めて、まだ四ヶ月も経ってはいない。現在、高校二年生。学年が変わる前の春休みから、この店で働き始めたばかりだ。異性に対して、好奇心旺盛な年頃である。

少々強面の、背の高い青年が、花屋の前を行ったり来たりしているのは、興味を惹かれる光景だった。その様子を観察しながら、仕事をしていた。

一時間も見ていると、少しだけ気の毒な気がし始めた。

『彼女へのプレゼントとか……？ 自分の趣味で、花を部屋に飾るようには見えないな……』

ガーデニング等にも縁は無さそうだ。ふいに、目が合ってしまった。

じつと青年を見つめていた自分に、照れ臭くなる。慌てて視線を逸らした。

花屋から、自分を観察していたらしい若い女の姿に、倉真は始めて気が付いた。いい加減、覚悟を決めて、足を踏み込むべきかも知れない。

このまま躊躇していたら、怪しげな輩と間違えられて、警察に通報されないとも限らない。

もう暫らく客足を観察し、店内の客が引けた隙を見て、倉真は漸く店へ足を踏み込んだ。

「いらっしやいませ」と、店員に声を掛けられて、ギクリとしてしまった。

『何か、仕出かそうと思ってる訳じゃ、ネーんだけどな……』自分で自分が情けなくなる。急いで五千円札を出して、適当な花束を、お任せで作ってもらった。待ってる間、冷や冷やモノだ。

花の種類を決める為に、どのようなシチュエーションの花束なのか質問をされて、女性への誕生日プレゼントである事だけ、短く答えた。

花束を作ってくれたのは、店主の男性だった。ただそれだけが

安心出来る要素だった。 待っている間、若い女性店員の視線を、痛いと感じてしまった。

帰宅して、利知未がまだ仮眠中だと知り、ほっとした。 手渡すのも照れ臭くて、ダイニングテーブルの上へ置いて置く事にした。

昼過ぎ、まだ眠そうな目を擦りながら、利知未が漸く起き出した。 寝室から出て、テーブルの上の花束を見つけた。 ビックリしてしまった。

リビングから、テレビの音が聞こえている。 倉真が買って来てくれたのである事は、直ぐに気付く。

恥かしくて、手渡してくれる事が出来なくて、こんな風に何気なく置いておいたのだろうと、理解した。

幸せな微笑が利知未の頬へ、ふわりと浮かび上がった。

リビングを覗くと、倉真はテレビを付けたまま、うたた寝中だった。

ソファに近寄りそつと顔を覗き込んで、感謝の気持ちで頬つぺたへキスをした。 それで、倉真の目が覚めた。

「花束、ありがと。 …お昼、直ぐに用意するね」

利知未は、嬉しそうな笑顔を見せてくれた。 その表情を見て思った。

『取り敢えず、苦勞と努力の甲斐はあったらしい』 けれど照れ臭くて、倉真は何も言葉を返せなかった。

利知未の誕生日を一週間過ぎて、七月がやって来た。一週目の木・金が、月初めの利知未の休日だ。今月は、ここから始まるシフトになる。

梅雨は、まだ残っていた。明けるのは二週目に入ってからになるだろうと、天気予報では言っていた。今年も乾燥機能付きバスは、大活躍中だ。

七日・七夕の日曜も、朝から天気が悪かった。倉真は一冊目の本を読破し、二冊目の将棋テキストを探そうと、駅前商店街の書店へ出掛けた。

花屋の前を通る時、先週の恥かしかった買い物思い出した。あの時の若い女性店員の、痛く感じた視線を思い出してしまった。

『別に、怪しいヤツを見る目じゃ、無かつたんだらうけどな……』

それ位は想像出来るが、気恥ずかしさの方が勝ってしまった。

『大体、俺に花屋は似合わない過ぎだ』そう思いつつチラリと店内へ視線を向けた時、あの時の女性店員と目が合ってしまった。慌てて視線を逸らして、急ぎ足で本屋の店先を目指した。

今日もバイト中、何気なく商店街に行く人達を眺めていた花屋のアルバイト女子高生・関宮せいのみや一葉かずはは、視線の先に先週のお客さんを見付けてしまった。

「……あ！」つい、声が出てしまった。

「どうしたの？ 一葉ちゃん」

店長に尋ねられた。一葉は丁度、バラの花を手に持っていた。刺でも刺さってしまったのかと、首を傾げる。

「何でもありません」

答えて、再び店の前へと視線を向けた。

背の高い強面の彼は、本屋の店先へ足を入れた所だった。

『漫画か雑誌でも、買っただろうな。小説とか、読みそうには見えなないし』

先週の事を思い出した。店長に聞かれて短く答えていた声が、印象に残っていた。少し、好みだと思った。

小さな本屋だが、趣味のコーナーには何冊か目的のテキストが揃えられていた。パラパラと捲り、自分でも解りそうな一冊を手に取り会計を済ませた。ついでに、利知未から頼まれていた旅行雑誌を一冊、購入した。

倉真のお盆休みは、八月十五日から、次の日曜までだ。

『利知未は、希望休暇出しているとは言ってたな……。取れるのか？』 考えながら、店を出る。

利知未は今日も、夜勤明けの仮眠中だ。ついでに商店街の肉屋で、昼飯用の惣菜を何点が購入して行く事にした。

書店から出て来た倉真の姿を、一葉は、確りと目に焼き付けておいた。

『背、高いな。日除けの影に、頭が隠れてるよね。顔は怖いけど、女性のプレゼントに花束を買う何て、見かけよりも優しい人なのかも知れないな』

一葉の中では、そんな印象が強い。先週、店に来た時の様子を見る限り、普段は絶対に花など買いはしないタイプだ。恐らく彼女の為に、慣れない店へ足を踏み込んだのだろう。

『あの花束の相手、どんな人なんだろう……？』  
少し、焼ける様な気がした。たった一度、買い物をしてくれた

客相手に、そんな気持ちを持ってしまった事に戸惑ってしまった。  
新しい客がやって来て、一葉は気持ちを切り替えて、仕事へ集中し直した。

倉真が帰宅したのは丁度、昼頃だ。利知未は、まだ仮眠中だ。  
起こさないように気を付けて、勝手に昼食を済ませる事にした。

利知未の分の惣菜も買って来てあった。そちらは冷蔵庫へ仕舞い、昼食の後、リビングで新しい将棋のテキストを開いた。

利知未は、二時少し前に起き出して来た。寝室のドアが開く音を聞いて、倉真が声を掛ける。

「冷蔵庫に昼飯、入ってるぞ」

リビングから聞こえてきた声に、利知未が眠そうな声で答えた。

「ありがと、貰うね」

「おお」

返事をして、再びテキストと睨めっこを始めた。

夜は、利知未が何時も通り準備をして、七時過ぎには夕食になった。

「そう言えば、この前の昼間、美由紀さんから電話があったんだ」

「美由紀さんから？ 珍しいな、何だった？」

「倉真のお母さんが、ご挨拶に見えたって。和菓子を戴いたって言うっていたよ。とても美味しく戴きましたって、実家へ行く事があつたら、倉真からもお礼を言っておいてくれて」

「……そー言や、一人暮らし始めた頃、住所と連絡先も教えた事があつた」

「保証人に、なってくれたからでしょう？」

「そうだ。お袋からも礼を言いたいから教えろって、言われたんだ」

「そっか。あれから、もう八年だ。……早いな」

「俺も、二十五になったからな」

「あたしも、二十六だ。 倉真が生まれた時の、お母さんの年と同じだって」

「んな話し、してたのか？」

聞かれて、利知未は嘘を付いた。

「この前、お母さんから教えて貰った」

深く突っ込まれる前に、話を変える事にした。

「誕生日の花束、結構、持ったな。 良いお花、使ってたみたい」

「そんなモン、解るのか？」

倉真は、花屋へ行った時の、照れ臭い気分が復活してしまった。

「お見舞いに見える方達の、お花。 持たせるの、大変みただけどね」

「そうなのか」

「折角、花瓶も買って来たし。 これからはチョコチョコ買って来て、飾ろうか？ コンテナガーデンングする暇も無いし」

「：お前の、好きにすれば良い」

倉真の照れ臭そうな雰囲気、小さく笑ってしまった。

その日の夜勤で、六十代の女性が一人、運ばれて来た。 激しい腹痛を訴えていた。

偶々、夜勤に内科の医師が居ない日だった。 救急からのヘルプで、利知未が呼ばれた。 患者の氏名と保険証を調べ、以前にも胆石で通院していた事のある女性だと知れた。

「アレは、癖になりやすいからな……」

当時の記録を確認して、利知未が呟いた。 取り敢えず、薬で痛みを散らした。 明日、改めて検査をし、結果によっては外科的な手術も必要に成る。

「あたしの担当に、なるのか」

胆石摘出は、この一年で何度か経験済みだ。 救急で自分が処置をしたのだから、そうなるだろう。

患者の女性は、松原 良子・六十四歳。 三年前、長年勤め上げた会社を無事に定年退職をした夫と、二人暮らした。 近所には嫁に行った娘が、家族と共に暮らしている。 夫は直ぐに、娘の元へと連絡を入れた。

松原氏は定年退職後も、シルバー派遣へ登録して働いている。年金だけで暮らすのは、心許ない。 それ以上に、仕事好きな人だった。

翌日直ぐに、娘が入院の準備をして、駆けつけて来た。 その翌日には検査結果が出て、その二日後に摘出手術を行う事になった。 木曜日、遅出になっていた利知未は、出勤後直ぐの、オペの予定が入った。

手術後、傷跡が落ち着くまでは、外科病棟の入院患者となる。

枕元のパネルに記入された担当医師は、瀬川。 研修医と聞いていたので、家族は少しだけ不安を感じていた。 しかも女性だ。

入院生活が長い先輩患者から、研修医でも良い腕前の持ち主だと聞き、木曜のオペが終わって見て、漸くほっとした。

松原夫人のオペ日は、梅雨明け宣言の、あつた日だった。

二

梅雨明け後、初めの土日が利知未と倉真、二人の連休だ。 久しぶりに、ツーリングに行く事にした。

利知未は今日、遅出の三日を終えたばかりだ。 倉真は利知未の遅い夕食に付き合っつて、ダイニングテーブルで晩酌中だ。

二人は、明日のツーリング先を相談していた。

「この前、倉真の実家へ行った時以来、またバイク乗ってないからな」

「何処、目指す？」

「何処でも良いけど。…責めて、箱根へ行く位の距離は走らせないな」

「ンじゃ、箱根で良いんじゃないか。ついでに、お前の好きな温泉にでも浸かって来るか？」

「そうだね、そうしようか」

行き先は、直ぐに決まった。

食事を終え、後片付けを済ませて風呂へ入った。

倉真は今日もコツコツと、妥当親父に向け、将棋のテキストを開いている。リビングで晩酌の続きをしながら、利知未が風呂を上がってくるのも待っていた。

三十分後、風呂上りの利知未が、グラスを持ってリビングへ入った。

「今度は、あたしの晩酌」

「おお。さつさと終わらせて、ベッドへ行こう」

テキストから顔を上げ、倉真がニヤリと笑った。

「…元気だな」

少し呆れた顔で、利知未が呟いた。

「夜勤の間は、我慢してるからな」

「倉真、頭の運動も良いけど、力抜きは最近してないの？」

「してるぜ？ それでも体力、有り余ってる」

ソファに腰掛けた利知未へ早速、腕を回して引き寄せた。

「ま、その方が安心か」

「浮気か？ する訳、無いだろ」

「男は、解らないからな……。ね、明日はツーリング行って、明日は倉真の携帯、探しに行こうよ？」

「携帯電話ショップ、近くに在ったか？」

「駅前商店街の中に、小さいけど在った気がする」

「……ま、しゃーねーな。それで、お前が安心するなら」

「夜勤の時、休憩時間にチェック入れてやる」

「夜中は寝てるぞ」

「一人で寝てれば、問題ないけど」

「信用してネーな」

少し膨れた倉真を見て、利知未が笑った。

「ついでに買い物を済ませて、夜は携帯の操作方法、一緒に勉強しよう」

「お前が俺の携帯の操作方法知って、どうするんだよ？」

「メールチェック？」

「…恐ろしい事、言うな」

「ばれたら困るような事、何かしようとか思ってる訳？」

「そうか、そう言う手もあるな」

利知未のキツイ突っ込みに、倉真は逆を突いて反撃した。

「ちよつと、倉真？」

「冗談だ」

今度は利知未が剥れてしまった。

翌日、約束通り箱根までツーリングへ出掛けた。利知未はのんびりと露天風呂へ浸かって、最近の疲れを癒した。

以前の様に、時間で休憩室での待ち合わせを決めた。約束時間に少し遅れて、利知未が風呂を上がった行く。約束時間

倉真は約束の時間よりも一足先に出て、休憩所で昼寝をしようと思った。

廊下を歩いている時、前に行く女性が手拭いを落としてしまった。本人は気付かずに、そのまま歩いて行く。

拾い上げて見て、何時か自分も此処で買った事がある、観光地特有の記念手拭いだと気付いた。

折角、此処へ来たのだから、これを使って温泉に浸かろうと考えて購入したのだろう。早足で後を追いつ、後ろから声を掛けた。

振り向いた女性は、三十代の美人だった。

「有り難う。旅行記念に買ったのに、忘れて行ったら勿体無いわよね」

倉真から手拭を、笑顔で受け取った。行き先は同じ休憩所だ。何の気なしに、並んで歩く形になってしまった。

その女性は当たりの良い、人懐きし易い性質の持ち主だった。

親切な青年と、観光客同士の他愛ない世間話が始まった。

「やっぱり、温泉は気持ち良いわね。貴方は、良く来るの？」

「連れが、温泉好きなんすよ」

「彼女？」

「そんな所です」

初対面の行き掛かりの女性に、婚約者が居るなどと余計な事を言う必要も無い。軽く、そう答えた。

「羨ましいわね。私は仕事ばかりで、恋人を作る時間も無かったのよね。お陰でお金だけは貯まったから、こうして呑気に観光旅行する余裕も出来たけど」

「遣り涯のある、仕事なんすね」

倉真は、利知未の事を思う。女でも、一生を掛けて続ける価値ある仕事に就く人は、居るものだ。

「若いのに、良い事を言ってくれるわね」

女性は倉真の一言に、言葉以上の感動を覚えた。

「気に入ったわ、奢らせて。ビールで乾杯しましょう？」

笑顔で言われて、倉真はチラリと時計を見た。利知未との約束まで、まだ二十分はある。

ビール一杯ぐらい付き合っても、問題は無さそうだ。

「時間潰しに、丁度良さそうだ」  
そう言って、休憩所で缶ビールを一本だけ付き合う事にした。

利知未が休憩所へ顔を出すと、倉真が見知らぬ女性と仲良く酒を飲んでいる所を目撃してしまった。

「美人だな。……三十、二、三歳位？」 ムツとしながらも、取り敢えず観察してしまった。 外見は、それ位だ。

セミロングの黒髪。 ウェーブの掛かった、柔らかそうな髪質の持ち主だ。 自分の、少し癖がある栗色掛かった髪を、軽く触ってしまった。

小さく深呼吸をして、気分を落ち着けて二人の元へ近寄って行った。

近くで見ると、その女性は初めの印象よりは、もう二、三歳、年嵩らしい事に気付いた。 やや童顔な顔付きで、美人と言うよりは、むしろ可愛らしい感じだ。 何時も大人びて見られて来た、自分の顔と引き比べてしまった。

「倉真。 お待たせ」

敢えて、ニコリと微笑んで声を掛けた。

倉真が振り向いて、利知未の笑顔の裏に隠れた、鬼の角を見付けしてしまう。 ……頬が、少しだけピクピクしている。

「もう、二時になったのか？」

「ごめんね、十五分、遅れちゃった」

『十五分も過ぎていたのに、気付かない程、楽しかったの？』 声には出さずに、そんなニュアンスで、口を動かした。

「あら、ごめんなさい。 貴方の恋人、お借りしてしまったわ」

女性が、悪気の無いビックリ顔を見せた。

「いいえ、私が少し遅れてしまったので。 お付き合い下さって、有り難うございます。 お陰で、ゆっくりとお湯に浸かって来られ

ました」

お互い浴場で、見掛けている筈だ。彼女は、利知未の事を思い出した。

「ああ、貴女！ 背の高い綺麗なコが居るなって、さっき思った人ね。露天風呂の方へ出て行ったのを、浴室で見かけていたわ」

女性は、すっかり倉真と打ち解けていた。

「倉真君が、彼女の恋人だったのね。 お目が高いわ」

「いや、何つーか……」

女の怖さを実感するのは、これで三度目かも知れない。 つい、言葉が濁る。

「いや、って、…どうして否定するの？」

利知未が、恋人という言葉を否定した意味なのか？ と、怖い質問をした。

表情は、笑顔のままだ。

「じゃない、悪い。 言葉が足りなかった。 敦子さん、彼女が俺の婚約者で、瀬川 利知未って言います」

「婚約者だったの？」

恋人だと聞いていた。 ただ、それだけの驚きだ。 しかし利知未の耳には、別の意味に聞こえてしまった。

「…ふーん、そう」

倉真の缶ビールをそっと取り上げ、利知未は残りを一気に飲み干した。

「中々の飲みっぷりね。 婚約者をお借りしてしまったお詫びに、奢らせてくれる？ 私も、かなり行ける口なのよ」

敦子は、素直に利知未にも好意を示した。

「そうなんですか？ そんな風には、見えませんけれど」

「一緒に飲みましょう？」

帰りの運転もあるが、少しくらいの酒でどうにかなる物ではないだろうと思った。 利知未がかなりの酒豪なのは、判り切っている。 飲んだ後、もう一度風呂へ浸かって、酔いを冷ませば問題は無い

だろう。

そう踏んで、彼女の事をもう少し良く、知ってやろうと考えた。

「じゃ、お言葉に甘えて」

「食堂へ、移動しましょう？ 私、お昼まだなのよ」

敦子はそう言って、縁台から立ち上がった。背は、160在るか無いからだ。その事にも、利知未のコンプレックスが刺激されてしまった。

その後、一緒に酒を飲み、食事を共にして、敦子の人となりには好感を持てた。けれど倉真の態度には、ムカつきを覚える。

酔い覚ましの二度風呂まで付き合っ、近くの旅館に宿を取っていると云った敦子と別れ、二人でバイクまで歩きながら、利知未は倉真とは一言も口を利いてやらなかった。

夜、何時もよりも酒の量を過ぎる利知未に、倉真は兎に角、平謝りして許してもらった。

翌日、先日の約束通り、二人で商店街へ出掛けた。利知未の機嫌は、まだ少し悪いままだ。歩きながら、利知未が言った。

「昨日の敦子さん。可愛い感じの人だったね」

「…そうか？」

倉真は一瞬、ギクリとしてしまう。

「髪も身長も、あたしとは正反対。……倉真、本当はどうだったの？」

「どっつて」

「明るくて楽しい人だったし、あたしは、良い人だと思ったけど」

「面白い人だったな」

「面白い、ね……。ま、良いよ。取り敢えず、許してあげたん

だし」

少し膨れた利知未を見て、小さく首を竦めた。

「携帯電話、探すか」

倉真は話を、切り換える事にした。

携帯電話のシヨップは、直ぐに見付かった。 契約を済ませて、その日の内に電話は繋がった。

お互いの電話番号をメモリに記録して、試しに呼び出して見た。

利知未から掛けた電話に反応する、新しい携帯電話を見て、利知未は漸く笑顔を見せてくれた。

やっと機嫌が、直ってくれたらしかった。

三

携帯電話シヨップを出て、花屋の前で利知未が止まる。

「花、買って行こうか？」

「じゃ、俺は晩酌用に、焼き鳥でも買って来るか」

少し考えて、倉真は別行動を取る事にした。

「この先の肉屋ね、OK。 早く用事が済んだ方が、迎えに行くって事で」

「おお」

引き止められないで、ほっとした。 やはり花屋には、入り難いのが本音だ。

倉真が短く返事をして、二人は二手に、分かれて行った。

利知未は花屋へ入り、出来上がった状態で売られていた花束を眺め、奥にあるケースの中身も検分した。 若い女性店員が、新しい客へ声を掛ける。

「いらっしやいませ。 気に入った花があったら、お声を掛けて下

さいね」

笑顔が、可愛らしい店員だった。利知未は笑顔で返事をし、ゆつくりと花を探してみた。

新しい客は、背の高い美人だった。少しキツ目な感じではあるが、花で喻えれば、すらりと背の高い、ユリ科。清楚な感じよりは豪華な雰囲気、カサブランカかも知れない。一葉は、ほんの少し見惚れてしまった。

肌の色も白い。色々な花を見て、表情が猫の目の様にくるくると変わる。

「ひまわりの時期、何だ」

利知未は視線を感じて、女性店員へ、笑顔を向けて話し掛けた。

「そうですね。夏の花なら極楽鳥花や、春からのキキョウも見頃ですよ。あと、ギリアは青紫の花が人気です。個性的な茎の力

店長の受け売りだ。花を指差しながら、説明をした。

「これ、ギリアって言うんだ。名前は、知らなかったな」

「そう言う方、多いです」

「じゃ、これを使って花束、作れますか？」

「はい。少々、お待ち下さい」

花束を作るのは、店長の仕事だ。奥で花籠を製作中の、店主へ声を掛けた。

倉真は、焼き鳥を十本ほど見繕った。店先で客の目の前で焼いてくれるのを、呑気に待っていた。時々、花屋の方へ視線を向けて、利知未がまだ出て来ないかと伺っている。

「アイツが先に花屋から出てくれば、迎えに行く事も、ねーんだよな」

そんな期待がある。　チラリと迎えに行くだけでも、花屋は入り難い場所だ。

焼き鳥を待つ時間は、五分ほどだった。　金を払い、もう一度、花屋を確認して、期待通りには運ばないだろう事を知る。

『……シャーねーな。　雑誌でも、立ち読みしてるか』  
諦めて、花屋の斜向かいにある、書店へと向かった。

利知未は、完成した花束を受け取り会計を済ませ、店先まで女性店員に見送られた。　直ぐに、斜向かいの書店の店先に、倉真の後姿を見付けた。

一葉も、その後姿を目撃した。　女性客を見送る振りをして、彼の姿を視界に追い掛ける。　その女性客は、真つ直ぐに彼の元へと向かって行った。  
女性が声を掛けている。　彼が振り向いた。　笑顔で受け答えている。　思わず、二人の様子を見つめてしまった。

「倉真、お待たせ」

「おお、済んだか」

「変わった花、見付けた。　可愛い女性店員さんも、見付けたよ」

「そうか。　…行くか」

雑誌を元の場所へ戻して、二人で進行方向を変え、歩き出す。

利知未は、可愛い女性店員と目が合ってしまった。　彼女は慌てて頭を下げていた。　利知未も笑顔で、軽く会釈を返した。

一葉は、慌てて頭を下げながら、思った。

『あの綺麗なお客さんが、彼の恋人？』　先月の、花束の行方。

一葉は、思っていた以上のショックを受けた。

翌日、利知未は通常出勤で、外科病棟に居た。

同日、一葉は母親に言われて、学校帰りに祖母のお見舞いへ出掛けた。病院で、昨日の綺麗なお客さんを見付けてしまった。

廊下を歩いている時、ナースステーションで、入院患者の病室を確認している、制服姿の女子高生を見掛けた。

「あの、松原 良子の病室は、どちら側ですか？」

ナースステーションを挟んで、北側か南側か？ 案内板を見るよりは、聞いてしまった方が早いと思った。

「松原さんの、ご家族ですか？」

自分の担当患者だ。 利知未は何気なく、後ろから声を掛けた。

一葉は、返事をしながら振り向いた。

「はい、松原の孫です…、あ！」

「貴女、昨日のお花屋さんの？」

お互い、びっくりだ。 一葉のビックリは、利知未以上だ。 声を掛けてくれた昨日のお客さんは、白衣を着て、名札には研修医の文字。

「松原さんの、お孫さんだったんですね」

利知未はニコリと微笑んだ。 縁のあるお嬢さんらしい。

「はい、あの」

「担当医の瀬川です。 病室、私のご案内しますよ」

ナースステーションから、一葉の相手をしていたナースが声を掛けた。

「宜しいですか？ お願いして」

「丁度、行く所だったから。 お仕事、続けて下さい」

「はい。 では、お願いします」

ナースはニコリと微笑んで、瀬川医師に会釈をして、仕事へ戻っ

て行った。

「じゃ、行きましょう」

一葉は言葉が出なくて、取り敢えず頷いた。 瀬川研修医の後に着いて、祖母の病室へ向かった。

「松原さん、お孫さんが見えましたよ」

「瀬川先生が、ご案内して下さったんですか？ 済みません」

病室で、松原は体を起こしてテレビを見ていた。 礼を行って、頭を下げる。

「お祖母ちゃん。 具合、どう？」

「一葉、来てくれたの？ 有り難う。 綺麗なお花だね」

一葉の持つて来た花束を見て、笑顔を見せた。

「お花、換えて来る」

学生靴を置き、花瓶を持って病室を出た。 孫を見送り、担当医を見る。

「まだ、お仕事があるんですか？」

「いいえ、もう終わりです。 帰る前に、松原さんの様子を見てからと思ひまして。 お腹は、まだ痛みますか？」

顔色を見て、順調な経過を改めて診た。

「いいえ。 もう、すっかり痛みは無くなりました。 先生のお陰様です」

「明日の午前中には内科のベッドが空きますので、そちらへ移動出来ます。 もう少し食事療法を続けて、月末までには退院出来ると思いますよ」

ナースからチラリと話があった筈だが、明日になると言うのは最新情報だ。 明日には自分の手を離れるので、少しでも様子を見到ただけだった。

「有り難うございます」

「もう暫らく、安静にしていますね」

「態々どうも」

頭を下げて、瀬川先生を見送った。

始めは研修医と言う事で、家族ともども心配をしていたのだが、彼女の女性らしい心配りと処置の適切さに、今ではすっかり感謝をしている。

最近では、良い先生に当たった物だと思つて思つていた。

一葉は古い花を選別し、新しく自分が持つて来た花を足して、綺麗に花瓶を整えながら、祖母の担当医だと言う、瀬川医師の事を考えていた。

『美人で、外科医で、お祖母ちゃんの担当医だった。お母さん、良い先生だつて褒めていたよね』

彼女が、彼の恋人と言うのなら、適わないと思う。

『つて、私、バカみたい。ただ、ちよつと格好イイかなつて、思つていただけなのに。アレから、お客さんとしても来てくれてないし……』

元々、それ程真剣な恋愛感情だとは、自分でも思わない。バイトをしている時、斜向かいの書店に姿を現す彼を時々、見つけて、何と無く幸せな気分になつていただけだ。それ以上、どうなる切っ掛けがある訳でもない。

『ま、イイか』 考えるのを止めて、花瓶を持って、病室へ戻つた。

瀬川医師は、既に病室には、居なかつた。

二十二日の夜勤明け、利知未は何時も通りの生活をして、ふと思ひ出す。

明日、二十三日は、二人の婚約記念日だ。

『もつ、一年経つちやつたんだ……。早いな』

仮眠から目覚めた午後四時頃、思い付いてしまった。

『商店街の花屋、火曜定休だったよね。今日、花束を買って、明日の為に飾るところか』

利知未は、今は内科病棟へ移った松原の孫・一葉を思い出した。彼女は平日も夕方から、アルバイトをしているのだろうか？

『行ってみれば、判るか』

服を着替えて、夕食の準備を始める前に買い物へ出掛けた。

花屋に着いたのは、五時前だ。一葉はアルバイトとしてではなく、今日はお客として、花屋にやって来ていた。

制服姿の彼女を見て、利知未が声を掛けた。

「こんにちは。一葉さん、でしたね」

「え？ あ、瀬川先生」

「松原さんの、お見舞い？」

「はい。瀬川先生は？ って、花屋に来て他の物買う訳、無いか自分の質問に自分で回答して、一葉は自分の頭を軽く小突く。

「あたしは、記念日にダイニングへ飾る花を買いに来たのニコリと笑って、一葉の質問に答えてあげた。

「……恋人の、誕生日、とか？」

一葉は、恐る恐る聞いてみた。

「それも、大事な記念日だけど」

「瀬川先生の誕生日は、もしかして、六月二十三日ですか？」

「どうして、そう思ったの？」

聞かない方が良いに決まっているが、つい口を付いて出てしまった。「この前、一緒に歩いていたら人が、先月の二十三日に此処で、花束を買ってくれたので……。もしかして、思ったんです」目を丸くして、利知未は呟いてしまった。

「倉真、此処であの花束、買ってくれたんだ」

「ソウマさん、って、言うんですか？ ああ、背の高い人」

「どんな顔して、買ってたんだけ」

呟いてから、一葉の質問に答える。

「そう。彼が花屋に居る所は、ちょっと想像できないけど」

「…凄く、恥かしそうにしました。大切な人へ贈る花なんだって、直ぐに判りました。普段は、お花屋さんに何か入らなそうだったから」

「似合わないタイプでは、あるね」

利知未は、花屋で買い物をする倉真の姿を想像して、くすりと笑った。

幸せそうな笑顔に、一葉は自分の小さな恋が、人知れず静かに終わってしまった事を実感してしまったのだった。

一葉と別れ、利知未は買い物済ませて、帰宅した。

翌日は、利知未の休日だ。早くから準備をして、ご馳走を作った。

仕事から帰宅して、豪華な夕食に驚いた倉真と、二人の婚約記念日を祝って、ワインで乾杯をした。

4 研修医二年・八月〜十月

8 研修医二年・八月

—

八月に入り、直ぐの一日・二日。利知未は木・金の休日だ。木曜の夜、仕事から帰宅した倉真と食卓を囲みながら、お盆休みの最終計画を話し合った。

「宿、取ってあったのか？」

話を切り出した利知未に、倉真が目丸くする。

「ごめん、相談しないで決めちゃった。先月の頭頃に」

「ま、良いけどな。お前の好みで決めたんなら、温泉宿だろ？」

「正解！ 昭和新山の方だけ。ご飯も、美味しそうだったから」

「何泊だ？」

「三泊四日。十五日に行つて、十八日まで。一泊は札幌」

「で、レンタカー借りて、移動するのか」

「そう言うこと。和尚にも、連絡入れてみようね」

「連絡先、解るのか？」

「ジユンが、ずっと前に行った事があるって言ってたから、連絡先は解ると思う。駄目なら、和尚のお母さんにでも聞いてみよう？」

「計画性があるんだか、無いんだか、解らねー事してんな」

「本当にお盆休みが取れるか、判らなかつたから。計画し過ぎて、おじちゃんになったら寂しいでしょ？」

昔の考え無し行動が、チラリと顔を出してしまった。

「コースは、大まかには考えてあるから。細かい事は、これから話そうよ」

「晩酌しながら、考えるか」

「うん。倉真は休みだよな？」

「お前と違って、急に休みが変わる事もネーからな」

利知未は先月末、夜勤明けの休日に、PHSでの呼び出しを受けてしまった。

前日まで、落ち着いていた患者が、急変したのだ。夜の事だった。処置後、利知未はそのまま仮眠室で仮眠を取って、連勤になっってしまった。

「この前は持ち直してくれたから、良かったけど……。中には、そのままって事も、有るからね……」

その点は、この仕事に就いた時から、覚悟はして来た事だ。

「兎に角、お盆休みには、何事も無い事を祈るしかないな」

「そうだな。平気だろ」

「そう言い切れる事でも、無いには無いけど」

話題が暗くなる前に、話を変えて、花屋の一葉の事を倉真に話した。「前、商店街の花屋で可愛い店員さんを見付けたって、言ってたでしょ？ びっくりしちゃったよ。先月頭に救急で運ばれて来た人の、お孫さんだったの。倉真、あそこで花束、買ってくれてたんだね」

流石に一ヶ月以上は経っている。あの時の事も、ある程度は客観的に見られる様になっていた。

「話したのか？」

「お見舞いに来た時、偶々、彼女をお婆さんの病室まで案内したんだよ。その後で。この前の婚約記念日、花を飾ったでしょ？」

あの店で買ったんだけど、その時にまたまた偶然、会ってしまったんだ。で、少しね」

「若い女の店員だったと思うけどな。あの時は早く店を出たい一心で、余り周りの事には頓着してなかった」

「だろうね」

小さく笑って、続けた。

「凄く恥かしそうにして居たって、一葉さん、覚えていたよ、倉真の事」

「…なんで、お前に俺の話が出たんだ？」

ふと、その点に気付いた。

「その前に一度、あの店に行っただでしょ？ 倉真が本屋で、あたしが出て行くのを待っていた時。彼女が見送ってくれてたでしょ？」

「そうだったか？」

その時も気恥ずかしくて、花屋の方には視線を向けなかった。

「話し涯、無いな」

「仕方ねーだろ。ンな恥かしい事、一々、覚えていられるか」

倉真は少し剥れて、途中だった飯の続きを掻き込んだ。

翌日、利知未が午前中の家事を終え寛いでいると、荷物が届いた。倉真の実家からの物だった。中身を確かめると、見覚えのある柄の浴衣が二着、入っていた。

「浴衣、完成したんだ」

手紙も二通、入っていた。一通は倉真宛、一通は利知未宛だ。

自分宛の手紙を開いて、読んでいる時に電話が鳴った。

「はい」

一端、手紙をテーブルの上において、受話器を上げる。

「利知未さん？ 今日はお休みだったのね。荷物、届きましたか？」

倉真の母親からの、電話だった。

「はい、ついさっき届きました。有り難うございます」

「また、取りに来て貰っても良いかとは思っただけだ。少しで

も早くに、渡したかったの。サイズは大丈夫だと思っけど、もし

も直しが必要なら、持って来てくれるかしら？」

「はい。ただ、私は浴衣を着た事が、無いので」

「そうだったの。じゃあ、やっぱり取りに来て貰った方が良かったわねえ。ごめんなさいね。つい、急いでしまって。そろそ

ろ、花火大会の時期だから」

「そう言えば、そうですね。どうしましょうか」

「次のお休みは、何時になるの?」

「次は、六日・七日と、十日・十一日ですね。日曜日は、十一日です」

「もし予定が無いようなら、また遊びに来るついでに、どうかしら? 着方を教えてあげるわ。倉真にも、教えてあげないとならないわね」

断る事が出来る訳は無い。

倉真の予定を確認して、十一日に伺えそうならば伺いますと伝えて、電話を切った。

夜、帰宅した倉真に荷物が届いた事を伝え、手紙を渡した。それから倉真の母からの、電話連絡の内容を伝えた。

「特に、用事がある訳じゃなし。面倒だが、行くか」

「将棋。お父さんに再戦、申し込むんでしょ?」

「それもあつたな。あの野郎、次こそ勝つてやる」

「お父さんに向かって、あの野郎って言い方、有り?」

利知未に叱られてしまった。

「それと十日には、お盆休みの準備もしたいから……、ちょっと、忙しくなりそうだな」

「旅行の準備か? そんなモン、前日にすりゃ良いんじゃないか?」

「荷物を纏めるのは、それでも良いけど」

「他に、する事があるのか?」

倉真に突っ込まれて、考えてしまった。

「…特には、無いか? お金は、下ろしておかないとね。けど日曜に下ろすと、手数料が掛かっちゃうし。お盆休みは、ATMが使えなくなる所もあるよね」

「盆休みに旅行なんだから、こっちでどんなに心配したって、無駄だな」

「一々もつともだ。すっかり倉真に会話の主導権を握られてしまった。」

「倉真の方が旅慣れしてるんだから、頼りにしてる」  
利知未はニコリと笑顔を見せて、そう言っただけで収めてしまった。

十日はのんびりと過ごし、十一日、倉真の実家へ二人で出掛けた。  
浴衣の着方を教えて貰い、帯を探しに反物を購入した和服屋へ出掛けた。

今回は一美も、手薬煉引いて待っていた。女三人が買い物に出掛けている間、倉真は居間で父親と、将棋を指していた。

「随分、マシな布陣を引く様になったな」  
息子の上達振りに、父親は少し驚いていた。

「勉強、しちまったぜ。今日こそ親父に勝つ」

「返り討ちだ。王手」

「またかよ?! チョイ待ち、さっきの無し!」

「潔く負けを認めろ」

父親は、不敵な薄ら笑いを浮かべていた。

その日は帯を揃え、男浴衣の着付けまで教えて貰って、館川家を後にした。

お盆休みになり、予定通りに北海道旅行へ出掛けた。和泉の働く牧場には三日目、札幌へ宿を移す前に寄って行った。

久し振りに会った和泉は、すっかり日に焼けて、身体つきもまた遅しくなっていた。

和泉の案内で牧場を見学して、利知未は乗馬の体験もさせて貰った。

「観光客相手のイベントですから、性質の大人しいヤツしか、居ま

せんよ」

そう言っつて、始めは少々渋っていた利知未を無理矢理、馬の背中へ押しやった。もう一頭の馬の背中中、利知未を乗せた馬を引いて、担当者が放牧場を一周して行く。

「お前は乗らないのか？」

「面白そうだけどな。こんなデカイのが背中に乗ったら、馬もビツクリしてしまうだろ？」

「確かに、そうかもな」

倉真もまた少し、筋肉がついて来たようにも見える。

「相変わらず、力抜きの成果か？」

「ンなとこだ」

乗馬を楽しむ利知未を眺めて、男二人は、そんな話をしていた。

始めは、おっかなびつくり馬の背に揺られていた利知未は、元々の勘の良さで、比較的早くに慣れてしまった。

楽しくなり始めて、馬の背中から片手を上げ、遠くから眺めている二人に大きく手を振り、合図を送った。利知未は、楽しそうに笑っていた。

倉真は、放牧場を一周して戻って来た利知未が馬を下りる前に、用意して来た使い捨てカメラで、その姿をフィルムへ納めた。

その日は和泉の誕生日から、二日目の事だ。二人は此処へ来る前に、プレゼントを探して用意して来ていた。昼過ぎまで過ごし、別れ際に渡してから牧場を後にした。

始めの二日間で短めの観光コースを周って、三日目に和泉が働く牧場。最終宿泊所を札幌に決めたのは、土産を探すのが目的だ。

折角ここまで来たのだから、定番の蟹尽くしを戴いて行く。倉真の実家へも郵送して、別口で定番の土産菓子も購入した。優一

家にも、蟹と札幌ラーメンを送った。

「後、何処へ送ったら良い？」

「宏治の所と、アダムのマスター一家にも、送るか？」

「そうだね、後は、ジュンの所と透子、下宿には、取り敢えずラーメンだけでも良いか？」

「全部に蟹を送る程の、余裕も無いしな」

「そう言う事」

「にしちゃ、今回は、金が掛かったな」

「ポーナスの半分、遊んじやったね。でも、今の内だとも思うし、良いんじゃないの？ 結婚したら、今まで以上に節約するからね」

「覚悟の上だ」

土産を準備し終わって、本日の宿へ戻った。夕食は豪華だった。

翌朝、バイキング形式の朝食を済ませて、チェックアウトした。

昼を札幌ラーメンの美味しい店で済ませて、午後三時過ぎの飛行機へ滑り込みセーフだ。帰宅は当然、夜遅くなってしまった。

アパートへ到着すると早速、土産を送った各家庭から、お礼の留守番電話が数件、録音されていた。其々の家庭から、その内また遊びに来いと伝言されていた。

二人のアルバムには、また新しい思い出のページが追加された。

二

十九日から通常勤務だった利知未は、医局とナースステーションへ、定番の北海道土産を持って行った。薬局は香にだけ、そつと土産を渡した。そこまで土産を買って行けば、直ぐ隣の会計にも何か渡さなければならなくなりそうだ。

ついでに久し振りに香と昼食を共にして、保坂に紹介されたと言  
う、恋人候補とのその後を聞いてみた。

何時もの店で、ランチメニューを注文して話をした。

「意外と、上手く行っていたりするのよね」

話を聞き始めて直ぐ、香の幸せそうな笑顔を見る事が出来た。

「年も同じだし、保坂君の紹介だけあって真面目な人だし。保坂  
君たちの方も、上手く行っている見たいよ」

「それは良かった。自分達の事がバタバタしていて、全然、気に  
する暇が無かったからな。少し、心配してた」

「利知未さんは、やっぱり結婚、来年なの？」

「一応、あたしの希望は来年の秋頃なんだけど……。それはいく  
ら何でも、待たせ過ぎだろうって言われている」

「そうね。 婚約して、もう一年経つんだから。 普通なら、とっ  
くに結婚していても不思議は無いもの」

「あたし達より後で婚約した二人が、今年の五月に結婚したよ」

「普通でしょう。 このままじゃ、私の方が先になってしまつかも  
ね」

「もう、そんな話しになってるの？」

「二人とも、二十八だから。 そんな雰囲気では、あるかな？」

「おめでとう。 これで、お見合いする必要も無くなった訳だ」

「そう言う事になるかしら？ 結婚式は、利知未さんも呼ぶから」

「随分、早くからの予約だな」

「式が重ならないように、気を付けないとね」

そう言って香は、幸せそうな笑顔を見せてくれた。

更に月末へ向かい、二十五日の日曜日は花火大会がある。 今年  
こそ花火大会に行きたいと思しながら、これまでは利知未の仕事の  
都合で、見に行く事が出来なかった。 これが今年最後のチャンス  
だ。

当日は昼過ぎから準備を始め、夕方には会場へ着く様に計画をした。

二十五日。倉真の母親から贈られた浴衣に、初めて袖を通した。倉真はギリギリまで渋っていたが、利知未に脅されてしまった。

「倉真が着ないなら、あたしも着ないから。初めての浴衣、楽しみなんだけどな……。どうせなら二人で着て、お母さんとの約束果たしたいし」

利知未の浴衣姿は、倉真も勿論、見てみたい。言われて渋々、頷いたのだ。

母親との約束とは、今年、この浴衣を着た姿を写真に撮って、見せると言うものだ。写真は苦手な利知未だが、息子の写真を心から喜んで受け取ってくれた彼の母親を見て、これも親孝行の一つになるのではないかと、考え方を改めていた。

始めに倉真の浴衣を、教えられた通りに利知未が着せた。

「……何つーか、肩、凝りそうだな」

着替え終わって、倉真が不機嫌そうにぼやく。

「似合ってるじゃない？ 流石に母親は、自分の子供が似合う色を良く知ってるもんだ」

着せるのは、やや大変だった。緊張して冷や汗が出て来ていた。

何とか形になった倉真の姿を見て、利知未はほっとして笑顔を見せた。

「今度は、自分が着替えないと。ちゃんと、着れるのかな？」

「手伝うか？」

ニヤリと倉真が笑う。利知未は少し照れ臭い。剥れ顔になる。

「結構です。そう言うスケベな顔した人には、手伝って貰いたくないから」

大人しく待っていてね、と言い置いて、寝室へと引っ込んだ。

それから、漸く自分の浴衣に袖を通した。大人になって初めての経験だ。

着替え終わり、鏡の前に立つ。自分の姿を見て、昔、大叔母夫婦と過ごしていた頃、一度だけ着た事があったのを思い出した。

あの頃、男の子の様に活発だった利知未は、動き難いのが嫌で一時間も我慢出来なかった。思い切り駄々を捏ねて、直ぐに着替えしてしまった。

『そう言えば、そんな事があった……』今の自分の姿を鏡で改めて見て、気恥ずかしくなってしまった。けれど、嬉しいとも感じられた。

倉真の母は、余り生地を使って巾着も作ってくれた。一揃え身に纏い、リビングで待っていた倉真に、初めて浴衣姿を披露した。

薄い縦縞の入った深い緑地の、大きな朝顔柄の浴衣は、母親と妹の見立て通りに、背の高い利知未に良く似合っていた。照れて薄く頬を染める姿は、中々、そそられる物がある。

暫らく自分の事は忘れて、利知未の姿に見惚れてしまった。

「良く、似合うじゃないか」

「倉真も、似合ってるよ？ 写真、撮らないとね」

「ああ。まだ明るいし、外で撮るか？」

「うん」

頷いて玄関へ向かう。新調であった下駄を引っ掛けて、外へ出た。

部屋を出ると、自分達と同じ様に今日の花火大会へ出掛け様とされていた、お隣さん夫婦と顔を合わせてしまった。挨拶くらいは交わす仲だ。

お隣の奥さんは、利知未達を見て、良くお似合いだと褒めてくれた。

階段の下で、場所を探してシャッターを押す倉真に、お隣の旦那さんは手を差し出して、カメラを受け取った。二人で並んでいる所を撮って上げるからと言われて、照れ臭いながらも二、三枚、フィルムへ収めて貰った。

カメラを返して貰い、礼を言って、一足先に出発した夫婦を見送った。

その後、お互いにシャッターを押して、一人ずつの姿を納めた。使い捨てカメラのフィルムを全て使い切ってから、写真屋へ寄って、駅へ向かった。

半分以上の枚数、倉真が利知未の写真を撮ってしまっていた。

電車では乗客の中に、浴衣を着たカップルも、ちらほらと見掛けられた。始めは気恥ずかしかつたが、その内、雰囲気慣れる事が出来た。

電車の車窓に映る自分達の姿を見て、利知未は、倉真の母親の見立てに感心していた。

『二人の浴衣、色合いとかのバランスが、良く取れているみたい……』

同じ様な浴衣カップルの中でも、一際、センス良く目立っている。しかも、二人とも長身だ。他の乗客達と窓に映りこんだ姿越しに、何度も目が合ってしまった。その度に気恥ずかしくて、視線を逸らした。

会場について、場所を取る前にテキ屋を回って、ヤキソバ、ジャガバタ、カキ氷、フランクフルトや、焼きイカ等を買って込んだ。

缶ビールも勿論、購入した。今日の夕食は、これで済ませてしま  
う予定だ。

場所を決めて花火が始まるのを待っている間に、大量の食い物が、  
殆ど倉真の腹へ納まってしまった。利知未は、焼きトウモロコシ  
が食べたくなった。

倉真が利知未のリクエストに答えて、トウモロコシと缶ビールの  
追加を、買いに行ってくれた。

また一つ、新しい思い出が増えた。二人は初めて空に咲く大輪  
の花火を、肩を並べて眺める事が出来た。

花火大会が終わる頃には二人、ピタリと寄り添って、夏の夜空を  
仰いでいた。

9 研修医二年・九月

—

八月末の利知未の休日には、写真が出来上がっていた。

九月に入り始めの日曜休み、浴衣のお礼を兼ねて、写真を届ける  
為に倉真の実家へ二人で向かった。

「今日で、五回目だ……」

バイクから降り、玄関に入る前に立ち止まり、利知未が呟いた。

「慣れたか？」

「うん、そうだな。……慣れて来た、かな？」

少し首を傾げて考えて、頷いた。笑顔を、倉真に見せる事が出来  
た。

「そりゃ良かった。行くか」  
促されて、もう一度頷いて、館川家へおとないを入れた。

倉真の父は、今日は釣りに出掛けていた。居間へ通され写真を  
見せて、嬉しそうな母親と、お茶を飲みながら話をしていた。

「利知未さんが来てくれると言ったら、お父さんが、これを出して  
やってくれと仰って……」

倉真父の手製・栗鹿の子が、お茶請けに供された。

「もう、秋ですね」

「ええ。残暑は厳しいけれど、和菓子の世界ではすっかり秋です  
よ。甘い物は、余り得意では無いかしら？」

「和菓子の甘さは平気です。戴きます」

ニコリと笑って、栗鹿の子を戴いた。

すっかり母親と打ち解けてくれたように見える利知未を見て、倉  
真も安心する事が出来た。

「今日こそ、親父に勝つつもりで居たんだけどな」

倉真が茶を啜りながらばやいた。母親の目の前で利知未の写真を  
眺めるのは少々、照れ臭い。

「何時もの所に行っている筈だから、お迎えに行つて来たら？」

母親に言われて、チラリと利知未を見た。倉真が、自分を置いて  
行ってしまう事を気に掛けてくれたのが、利知未に伝わった。

「いいよ、行つて来て。あたしは、お母さんと写真を見ているか  
ら」

雰囲気、利知未の言葉から堅苦しさが少しだけ消えた。

「そうしてらっしゃい」

「…んじゃ、行つてくるか」

母親からも言われて、倉真は立ち上がる。

行つてらっしゃいと二人から送られて、居間を出て行つた。

倉真の母は利知未に、もっと打ち解けて貰いたいと常々、思つて

いる。漸く肩の力が抜け始めた利知未の様子を見て、嬉しげに微笑んだ。

浴衣の写真を見終わり、母親が思い付く。倉真の、子供の頃からのアルバムを持ち出して来た。

「あの子、中学からは殆ど写真が無いんだけど。一番、面白かった頃の写真は随分あるのよ」

そう言っって少し笑い、昔話をしながらアルバムを開き始めた。

「倉真さんの写真、無事な姿が、何にも無いんですね」

必ず怪我をしている。絆創膏・包帯の幼い倉真を見て、利知未は小さく笑ってしまった。

「そうなの。保育園に通っていた頃から毎日、喧嘩ばかりで。運動をしていてしてしまっった怪我也、有るにはあるんだけど」

「運動神経、良かったのではないですか？」

「そうだったわね。運動会だけは、胸を張って観戦する事が出来たわ」

その代わり、授業参観で学校へ行く時には何時も、冷や冷やしていたと言っつ。

小学校低学年の頃の、運動会の写真が出て来た。

「でも、この時は恥かしかったわ……」

一等の旗を持った怪我だらけの倉真が、不機嫌そうな顔で写っている。

「これは、どう見ても走っつていて出来た怪我では、無さそうですね」利知未に聞かれて、呆れた笑顔で話してくれた。

「百メートル走で、一等を取っただけだ。東京の学校は、運動場が狭いでしょう？ コースがカーブしているのよ。そのコーナーを曲がる時に、倉真と一等を争っていた子が転んでしまったのよ。それでも、足の速い子だね。ゴール寸前で追いついたんだけど、抜けなかったの。相手のクラスの子が、倉真がコーナーで足を引っ掛けたか、腕をぶつけたかして邪魔をしたんじゃないかって、

言い出して。そんな事はしてないって、走り終わった子達が並んで待っていた場所で、取っ組み合いの大喧嘩」

「成る程。それで、三等の旗を持つてる子も怪我だらけだ」

「転んでしまった子が、そんな事は無かった自分で転んだんだって、言ってくれて。それで漸く、収まったのよ」

そんな事で、取っ組み合いの喧嘩になってしまった。その血の気の多さに、恥かしさと同時に将来が心配になってしまった、と、母親は言った。

その他にも、倉真の面白ネタは尽きる事が無かった。

更に小さな頃は、その余りの腕白、ヤンチャ振りで、自転車の後ろから転げて落ちてしまった事も、有ったと言う。

釣りは、昔から苦手だった。初めて父親と出掛けた日、帰宅した倉真は、父の背中でごつすと眠ってしまった。釣り糸垂らして、十分もしない内に眠っちまった」

その頃、まだ三十代半ばだった倉真の父が帰宅して、眠り込んでいる息子を受け取った母親に、そうぼやいていたと言う。

「昔から、堪え性が無いと言うか、我慢が利かないと言うか……」

あの頃の事を思い出し、母親は頬に手を当てて、軽い溜息をついていた。

「けど、根は優しい子だったから……。小学校三年生の頃には、近所の年下の子供達の、良い親分だったみたいよ」

「良く、年下の子達の面倒を見て居たって、事ですね」

「だと思っわ。一美の事も、可愛がっていたもの」

自分の自転車の後ろへ乗せて、一美の通っていた公文塾への送り迎えをしてくれていた事も、有ったと言う。

『その頃から、二輪好きだったって事だ』

利知未はその話を聞いて、そんな感想を抱いた。

倉真は父親を迎えに行つて、そのまま釣りに付き合わされてしまった。

「釣竿、二本も持って来ていたのか」

苦手な事を強要され、倉真は既に大欠伸だ。釣糸を垂らしながらぼやく。

「……お前は、昔から全く変わらん」

倉真の大欠伸を見て、父親が呆れて咳いていた。

昼を回ってしまった。迎えに行つた切り二時間近く、倉真は戻らない。

「お父さんに、付き合わされているんでしょうけど」

「お昼、届けますか？」

「そうね。また、お握りでも作つて、届けてもらつて良いかしら？」

「場所は、どの辺りなんですか？」

「商店街を西に抜けて真つ直ぐに行くと、川に出るの。少し下流に橋があるのよ。その辺りへ行けば、あの大きな体は直ぐに見えるわ」

この辺りの地図を、頭に思い浮かべた。大体、見当が着く。

「解りました。それなら、解ると思います」

方角的には、自分達が朝やつて来た方向だ。

利知未が弁当を届けている内に、自分達の分は母親が準備をしておくと、言ってくれた。二人分の握り飯を持ち、利知未は河原へ向かった。

倉真の釣竿に当りが来ていた。半分眠っていたので、自分が構

えている竿の変化に、倉真は気付かない。

「引いてるぞ」

父親に教えられて、慌てて釣竿を手に取った。

「こんな川にも、魚は居るんだな」

「いなけりゃ、俺も来ない」

「ごもつとも」

釣りの下手な倉真は、魚との格闘に遭えなく敗北してしまった。

「餌だけ、取られちゃった」

釣り糸の先を見て、倉真が情けない顔をした。

「…腹、減ったな」 ぼやきながら、新しい餌を釣り針に仕掛けた。

母親に言われた通り、二人の後姿は直ぐに見付けられた。近付いて後少しの所まで来て、声を掛けた。

「釣れてる？」

「あ？ ああ、利知未か。 どうした？」

倉真が気付いて、返事をする。

「お腹、空いている頃かと思って。 はい、お弁当。 お父様にも」

ニコリと微笑んで、手渡した。

利知未から弁当とお絞りを手渡されて、父親は微かに頭を下げた。

「握り飯だな」

「それが一番、食べやすいでしょ？」

水筒を準備しながら、利知未が倉真の声に答える。 始めに父親の

分を注いで手渡した。 小声で、礼を言ってくれた。

「お前は昼、どうするんだ？」

「お母様が、準備を下さってるから。 戻るよ？」

「そうか」

「後は、よろしくね。 お待たせするのも悪いから」

そう言って、利知未は戻って行った。

利知未の姿が消えてから、父親が聞いた。

「利知未さんは、魚を捌けるのか？」

時々、利知未が魚を開いているのは見た事があった。

「上手い事、やるぞ？ メス捌きはお手のモンだ」

「外科医、だったな」

「おお、料理も上手い」

「お前には、勿体無いお嬢さんだ」

「二度目だ、その言葉」

父親を見て、倉真はニヤリと笑っていた。

倉真と父親が戻ったのは二時過ぎだった。弁当を腹へ収めてから一時間ほど頑張ってみたが、あれ以来の当りもなく、本日もボウズだ。

手を洗い、一休みついでに将棋盤を挟んでから、帰宅する事にした。

利知未は、アルバムの続きを見せて貰っていた。倉真も同じ居

間にいる。母親は構わず、昔話をしてくれた。

女二人の会話をバツクに、男二人は集中していた。

「あの集中力が学生時代に生きていれば、もう少し成績も良かったのでしょーけど」

母親が倉真の様子を見て、呆れて呟いていた。

倉真は将棋に集中し過ぎて、時間の感覚が無くなってしまった。

母親は、今日は夕食までご一緒できそうね、と呟いて、利知未に声を掛ける。恐縮してしまったが男二人の様子を見て、呼ばれて行く事になった。

母親を手伝って、五人分の食事を準備した。利知未の包丁捌きを見て、母親は感心して褒めてくれた。

「倉真が、好き嫌いがなくなったのは、利知未さんのお陰のようね」  
「私は何も。一緒に暮らし始めた頃には、好き嫌いも無くなっていましたよ」

「そうだった？」

酢豚の事を思い出していた。

準備の途中で、一美が帰宅した。

「今日は、ご飯まで一緒にしてくれるの?!」

キッチンへ立つ利知未を見て、嬉しそうな声を聞かせてくれた。

五人で食卓を囲んだ。久しぶりの賑やかな食卓は、緊張もしたけれど楽しかった。利知未の料理は綺麗に、家族の腹へ収まってくれた。それを見て、利知未は漸くほっとした。

「利知未さん、お料理、上手でしょ?!」

一美が、両親へ自慢げに言っていた。

「お前が自慢する事か」

兄に突っ込まれて、一美は笑って誤魔化した。

食事の後片付けまで手伝ってから、館川家を辞去した。アパ―トへ帰宅出来た時間は、夜九時を回っていた。

二

数日後、倉真の母親から利知未に、相談の電話が入った。

夫が、どうやら最近、体調を崩してしまったと言う。病院へ行く事を勧めても、大した事は無いと、取り合ってはくれない。

心配そうな母親の声を聞いて、利知未は平日の休みに一度、倉真に内緒で様子を見に行く事にした。

「医者だから、きっとで、それを頼みに相談されただろうから…」

…」

ただ、本当に大した事が無いのなら、話を大きくする必要も無いだろう。そう考えて、倉真には伝えるのを止めておいた。

父親の店は、庭続きで母屋と繋がっている。昼は母屋へ戻って済ませていると聞いて、その頃を見計らって伺うことにした。

十七日・夜勤明け翌日の休日。利知未は一人で、倉真の実家へ向かった。

玄関先で、緊張してしまった。

『一人で来るのは、初めてだから』 それでも、倉真父の往診へ来たつもりになって、おとないを入れる。

「いらつしゃい。ごめんなさいね、態々」

母親が奥から現れて、利知未を迎えてくれた。

「いいえ。お父様は？」

「もう直ぐ、お昼を済ませに戻るわ。取り敢えず、上がって下さいな」

促されて、お邪魔しますと断って靴を脱いだ。

父親は最近、食欲がなくなって来たらしい。晩酌のビールも、今までの半分の量でいらないうつ。

時々、腰から背中にかけて痛みを感じるらしく、何度か風呂上りに擦ってあげたと、母親は言っていた。

「それだけじゃ、解らないけれど……」

「ちよつと、診て貰えるかしら？」

「はい。私で、判断がつけば良いけど」

話している内に裏庭の妻戸が開く音がして、父親が昼を済ませに帰宅した。

裏口から入り、居間から聞こえた妻の声に、顔を出す。

「お邪魔しております」

取り敢えず、ニコリと微笑んで挨拶をした。

「倉真も、来ているのか？」

驚いて父親が問い掛ける。その態度を見て、妻は小さく笑ってしまつた。息子の前に居る時に比べて少々、気の抜けた様子だ。

「いいえ。利知未さんに渡したい物が有つたので、いらして頂いたんです」

用意の理由を述べ、話を変える。

「お昼、折角だからこちらで、利知未さんとご一緒にどうぞ」  
「…うむ」

低く唸つて、自分の気の抜けた様子を誤魔化してみた。

三人で昼食を済ませた。父親の食事は確かに減っていた。

後片付けに立ち上がった母親に目顔で合図を受けて、利知未が父親へ食後の茶を入れて出した。

「済まない」

短く言つて、父親は利知未の出した茶に口をつけた。

「少々、お顔の色が優れない様子ですね？」

何気なく聞いてみた。父親は片手を上げて、自分の頬を触る。

「ちよつと、診せて頂けますか？」

利知未に微笑を見せられ、少し躊躇つたが従つてくれた。

脈拍を取り、瞼の裏を返して、舌の状態も確認した。それから

最近、痛むと言つ背中を診せて貰つた。

「血圧は最近、測られましたか？」

聞かれて首を横に振る。血圧計は、持って来てはいない。少し考えて、利知未が言つた。

「私は外科医ですので、内科の病気の判断は、出来兼ねますが……」  
少し顔が浮腫んで居る事は、見て取れた。背中から肝臓の辺りを押してみた時、少し気になる所もあった。

「お酒、長年、飲まれていますね？ 量は、増えていませんでしたか？」

「最近は、減ったな」

父親は、病院に居る様な妙な気分になってしまった。

「その前は？」

「……少し、飲み過ぎていたのを減らした」

「そうですか」

母親が片付けを終えて、居間へ入って来た。

「お酒の量、多くなっていたのですか？」

「そうね、この前までは今まで以上に多かった頃が、有ったかしら？」

頬に手を当てて、考えて答えた。

「一度、内科へ掛かって見て下さい」

父親に向かつて、そう進言した。

大事だいじが無ければ良いが、もしも肝臓が悪くなっているのなら、黄疸が出る前に検査をするべきかも知れない。

「……恐らく、肝臓では無いかと思いますが」

利知未の呟きを聞いて、父親は素直に、病院へ行ってみる事にした。

帰宅して、夕食の準備を整えた。 倉真が仕事を終えて、帰って来た。

利知未は、まだ父親の事を言うのは考えている。 キッチンと病院へ行き、検査結果を待ってみないと、どう伝えるべきかも解らない。 『もう暫らく、倉真には言うの、止めとこう』 そう決めて、今日、倉真の実家へ行ってきた事も内緒のままにした。

倉真は今日、職場で、また突っ込まれて来てしまった。

「自分達よりも、周りが煩い」

そう言って、言われて来た事を話してくれた。

「そろそろ、お前に好い男でも出来た頃じゃないかとか、抜かしやがった」

不機嫌に、そう言った。

「あたしに、ねえ。そんなにモテるタイプじゃ、無いと思ってるけど」

「そう思つのは、自分だけ何じゃないのか？」

「どうして？ あたしに言わせれば、倉真の方が心配なんだけど」

「それこそ、モテるタイプじゃ無いだろ」

「そう？」

七月の、温泉での事を思い出した。

「偶にどうかすると、モテてるみたいだけど」

そう言い捨てて、利知未も食事を進める。倉真はすっかり、あの時の事など、忘れ切っている。

「そんな女が居るなら、俺が知りたいくらいだ」

「で？ 知って、どうするつもりなの？」

利知未に、怖い笑顔で突っ込まれてしまった。最近どうも、利知未は浮気についてピリピリしている様子だ。触らぬ神に祟りなしだ。

その手の話題も、暫らくは封印しておいた方が良くも知れない。取り敢えずそう悟って、倉真は話を止めた。

「お代わりくれ」

二、と笑って、利知未に空の飯茶碗を差し出した。

倉真の父親は、店番を妻に任せて病院へ行つて来た。

医者の見立ては利知未と同じで、肝臓病の疑いだった。検査をして、翌週には結果が出ると言われて来た。

利知未の次の休みは、土日だと聞いていた。土曜日、午前家事を終え、昼前に倉真の母親から連絡をした。

「利知未さんのお陰で、漸く病院へ行ってくれましたよ」

「そうですか。それで、検査は？」

「二十四日に、検査の予約をして来たと言うから、今月末か来月には結果が解ると思います」

「結果が出たら、ご連絡、頂けますか？」

「勿論、連絡しますよ。兎に角、病院へ行つて貰うのが一苦勞な人だから。行つてくれただけでも、有り難いです」

「そうですね。倉真さんには、伝えた方が宜しいですか？」

「検査結果が出るまでは、余り騒ぎ立てるのもどうかと思いますから。それから良いですよ。本当に利知未さんには、お手数掛けてしまいましたねえ」

「いいえ。私で、お役に立てる事なら、いくらでも」

「有り難う。それじゃ、また遊びにいらして下さいね」

「倉真さんに、代わりますか？」

「今日は、いいわ。じゃ、あの子の事も宜しくお願いします」

「はい、こちらこそ」

挨拶をして、電話を終わった。

利知未が受話器を置いたのを見て、倉真が聞く。

「お袋か？ 検査とか言つてたな」

「何でもないよ。倉真のお父さんが、健康診断に行くつて話」

「親父がか？ 鬼の霍乱つてヤツだな」

「個人商店の店主だから。定期的に行つた方が良いですよつて、

この前、倉真がお父さんと釣りに行つていた時に話してたんだよ」

「ま、働き手が親父だけだからな。倒れられたら、大変なのは確かだろ」

「そう言う事。お昼、どうする？」

「何でも良いぜ」

「そ。じゃ、適当に準備するね。将棋の腕は、少しは上がったの？」

今日も将棋のテキストを開いていた倉真に、利知未が聞いた。

「少しは親父の事を、梃子搦らせる事が出来る様には、なったぞ」

「そっか。一勝を奪うまでには、まだまだ時間が掛かりそうだ。

お父さんにも、長生きして貰わなきゃだね」

「そうだな。親父を負かす前に、くたばられちゃ困る」

「努力が、水の泡になっちゃうから？」

「…それも、ある」

少し考えて、倉真は短く、そう答えた。

倉真が考えていた短い時間を思い、利知未は微かに微笑んだ。

『倉真とお父さん、本当に仲直り出来たんだ』

十六歳の頃、大喧嘩をして、飛び出して来た息子だ。

十年間近くもの、長い長い大喧嘩も。漸く丸く収まろうとして

いるのを、改めて感じられたのだった。

10 研修医二年・十月

—

月が変わって、一週目。倉真の父は、検査の結果を聞きに病院へ行った。

「館川さん、肝臓が少々、疲れているようです。お酒の量は？」  
始めに、そう聞かれた。

「早い内に検査をされて、良かったと思いますよ。肝臓は物言わぬ臓器と言いますから。調子が悪くなってから検査をして、手遅れになる人の方が多いいものです」

医者はそう言って、にっこりと微笑んだ。

酒の飲み方を注意され、食事のアドバイスを受けた。それだけで済んだ事に、父親は安心して帰宅した。

その土曜日。早速、利知未に、倉真の母親から連絡が入った。「ご心配お掛けしました。どうやら、肝臓が疲れていただけだったわ」

ほっとした声で、そう報告をされた。

「大事が無くて、良かったですね。お酒の量、気を付けて下さいね」

「お医者様からも、注意されて来ましたよ。お嫁さんがお医者さんと言うのは、頼り涯が有って良いものね。検査が早くて良かったと、言われたそうですよ」

「……お役に立てて、良かったです」

お嫁さんと表現されたことに、照れ臭くなってしまった。

今日は、外でバイクを弄っていた倉真が、昼を済ませに戻って来た。

「今、お母さんから連絡が有ったよ」

「また、遊びに来いとか言われたのか？」

「それも、あるけど。お父さん、検査結果が悪くなかったからって、ご報告をしてくれました」

それで初めて、先月の館川家への訪問を話して聞かせた。

「健康診断じゃ、なかったのか？」

「ごめん。本当は、そう言う事。ただ、結果が出るまでは話さないでって、お母さんからも言われて居たんだよ」

「良かったんじゃないか？ それで済んで」

「他人事だな。倉真の、お父さんでしょう」

「お前の親父にも、なるんだよな」

「お義父さん、将来のお舅さんに、なる訳だけど」

「そう言う事だ。腹、減ったよ、何か食わせてくれ」  
「ごめん、急いで準備するよ。待ってて」  
話を途中で打ち切って、利知未は昼食の準備を始めた。

二

十日の祝日は、利知未も丁度、休みが重なった。  
倉真の母親から、是非この前のお礼をしたいから遊びに来て欲しいと言われて、二人で出掛けて行った。

「あら、倉真も来てくれたのね」  
玄関が入って、母親にそう言われてしまった。

「利知未が居ないんじゃない、昼飯が侘しくなっちゃつまづからな」  
倉真がニヤリとして、母親へ言葉を返した。

「今日は、お昼をご馳走したいと思っていたのよ。評判の良いお寿司屋さんがあるから。倉真も居るんじゃない、随分お金も掛かってしまそうね」

母親はそう言って、小さく笑っていた。

「お寿司、ですか？」

「ええ、少し遠いんだけど」

タクシーを呼んであると言う。何処まで行くのだろうと、利知未と倉真は顔を見合わせてしまった。

「早めに行つて、お父さんと一美には、お土産を買って来ようと思つていたのよ。もうタクシーも着くから、上がってお茶でもどうぞ」

笑顔で促され、二人は居間へ上がった。

二十分ほどでタクシーが着いた。三人で乗り込んで、墨田区に

在る倉真の実家から、江東区の住宅街にある寿司屋まで、片道、約三十分を掛けて足を伸ばした。

タクシーを降り店の入り口に立ち、利知未は、何かを思い出した。「ここ……」

呟いた利知未に、倉真が声を掛ける。

「どうした？」

「ううん。 何でもない」

「さ、入りましょう？」

母親に促されて、利知未は黙って後について、店内へ踏み込んだ。

「いらつしやいませ！」

威勢の良い声が、利知未達を迎えてくれた。 カウンターには、三人の職人が並んでいた。

『やっぱり』 その中に、懐かしい顔を見付けてしまった。 微かに利知未の頬が緩む。

黙って、その人の前に、三人並んで腰を下ろした。

「いらつしやいませ」

そう言つて顔を上げた職人は、一瞬、利知未の姿に注目してしまつた。

「櫛田先輩」

微かな声で、利知未が呟いた。 隣の倉真が、利知未を見る。

「知り合いなのか？」

息子と利知未の様子に気付いて、母親もこちらに注目していた。

「……瀬川？」

櫛田は、じつと利知未を見つめてしまった。

手が止まった様子に、親方からの檄が飛んで来た。

「失礼しました！ 何、握りましょう？」

仕事からだ。 疼く気持ちを押し込めて、櫛田は、そう問い掛けた。

倉真に、無言で問い掛けられた。 小さく笑つて、利知未は答え

た。

「中学時代の、先輩」

母親が、ビックリした顔をした。

「そうだったの？ あら、まあ」

三人の客を見て、親方が利知未を見た。何と無く見覚えている感じがした。

「以前にも、いらしてくれた事がありましたか？」

「はい。中学生の時に、一度だけ」

笑顔を見て、記憶を辿る。珍しい客は、何年経っても忘れる物ではない。暫らく考えて、記憶が蘇ってきた。

「先輩の働き振りを見せて頂きに。一つ上の先輩に、くっ付いて言われて、完全に思い出した。」

中学生だけの五人で来た、櫛田の後輩達が居た。その中に一人だけ、女の子が居た。

「ああ、あの時の」

親方の表情が、笑顔になった。

「再びのご来店、有り難うございます。どうぞ、ごゆっくり」

「有り難うございます」

利知未は笑顔で、親方にそう返した。

「今日は、良い鰹が入っています」

櫛田にそう言われて、お任せで握って貰う事にした。

倉真を挟んで、向こう側には母親が居る。それでも初恋の思い

出は、蘇って来てしまう。

寿司を握る櫛田を見る利知未の目に、倉真はチラリとジェラシーを感じてしまった。

櫛田は無口だった。利知未と一緒に来た客の関係を聞いて、ただ一つだけ教えてくれた。

「俺も、結婚した。…今は、ガキが二人居る」

「…幸せ、ですか？」

「おお」

そう言った櫛田の笑顔を見、利知未は一生、忘れないだろうと感じた。

土産で買った寿司は特上だった。櫛田が、いつかの約束を果たすと言つて、並分の金額で二人前、用意してくれた。

その夜、晩酌中に倉真から聞かれた。

「いつかの約束つてのは、何だったんだ？」

「あたしが女らしく成ったら、何時か寿司を奢ってくれるって」  
ニコリと笑つて、利知未は答える。

「女らしさの株によつて、段階は違う筈だったんだけど。特上の女に成つたつて、ことなのかな……？」

「……今のお前なら、それ位にはなつてるだろ」

ジェラシーは感じたままだ。倉真は少しだけ不機嫌だった。

「そっか。倉真の、お陰だよ。ありがとう」

そう言つて、利知未は倉真の頬つぺたにキスをしてやった。

「あのね、倉真。……櫛田先輩、あたしの、初恋の相手だったんだよ」

二人は何時もの通り、寄り添つて酒を飲んでた。利知未の告白を聞いて、倉真の機嫌がまた少し悪くなつてしまった。

「焼き餅？」

チラリと笑顔を見せて、利知未は少しだけ意地悪な質問をした。

「マジ、焼き餅かも知れねー。……利知未、結婚、早めないか？」

「不安になつちやつた？」

「それも、正直言つてある」

いつか、田淵から聞いた話を、倉真は話した。

話を聞いて、利知未が感想を述べる。

「幻、ね。勘違いだつて、言う意見もあるみたいだけど」

「……それと、親父の事だ」

「お父さん？」

「この前、肝臓が悪いかも知れなかつたつて、話をしたよな？」

「うん。大した事が無くつて、良かったよ」

「ああ。ただ、あの話を聞いた後に、チヨイ考えた」

真面目な顔をして、倉真が話を続ける。

「親父もお袋も、後は歳を取るだけだ。歳を取れば、身体つてのは悪くなる一方だろ？ 親父も、お前を気に入っているからな。

早く、安心させてやりたくなつたんだ」

言われて、利知未は考える。

倉真が、父親の事を思い遣れる様になつた事。

今日の櫛田が、利知未の質問に答えた時に見せてくれた、心から  
幸せそうな、あの笑顔。

『ガキが、二人居る』……その言葉。

今年の四月。利知未が妊娠したと勘違いして、態々、息子の行動に詫びを入れにやつて来た、父親の言葉。

その少し前、アダムのマスターから言われた言葉。

『それは、お前の我侭と言うヤツだ。親御さんは、早くに……、』

「……お父さんも、お母さんも、早く孫の顔、見たいのかな？」

「そうだろうとは、思う」

「そっか。……そうだよな」

目を閉じて、じっと動かない。

利知未の様子を、倉真も黙って見つめていた。

やがて、利知未が目を開けて、小さく頷いた。

「……うん。 良いよ。 ……責めて、三月は過ぎてからにしたいけど」

顔を上げた利知未が、そう言って倉真を見つめた。

「あたしは、秋頃が良いと思っていただけ……。 それは、我侷過ぎるから」

「五月位で、どうだ？」

倉真は少し考えて、利知未に問い掛ける。

「責めて、七月。 って言うのは、やっぱり我が侷？」

婚約記念日。 それが、利知未の頭の中には浮かんでいた。

「俺が、我慢出来ない」

そう言って、倉真は利知未を更に抱き寄せる。

「……解った」

コクリと頷いた利知未の頭を、倉真は優しく、抱きしめた。

「有り難う」

倉真が囁くように、そう呟いた。

利知未の頭には、夢枕の裕一の言葉が蘇って来た。

『結婚式は、早めに見たいな』 裕一は、そう言っていた。

「倉真が、親孝行するのと、同じだ。 ……あたしも裕兄孝行、しなきゃだ」

抱きしめられた姿勢のまま、利知未は、そう呟いていた。

「裕一さん？」

「うん。 ……お正月に、夢を、見たでしょう？」

「ああ。 そうだったな」

「その時に、結婚式は早くに見たいって……、言われてた」  
「そうか」

「うん」

利知未はもう一度、小さく頷いた。

三

翌日の夜、仕事から帰った倉真が、実家へ連絡を入れた。結婚式は五月ごろにしよう、昨夜、利知未と話し合った事を伝えた。

「そう、漸く話が進み始めたの！良かったわ」

母親は嬉しそうな声で、そう言った。

「あんた達、仕事が忙しいんでしょう？ 式場を探すのなら、手伝うわよ」

早くも、そんな言葉が返って来た。

その後、母親は父親に伝えて、一美は早速、明日の学校帰りに結婚情報誌を買って来てみると、言い出した。

倉真から母親の反応を聞いて、利知未は驚いた顔をする。

「お母さんが、式場探しまで手伝ってくれるの？」

「そう、言っていたな。…エライ、乗り気だったぜ？」

倉真はそう答えて、利知未に少し呆れた笑顔を見せた。

「そっか。…そんなに、喜んでくれたんだ」

「お袋の声、十歳分くらい若返っていたな」

「そう……。ご飯、出来てるよ」

「おお、食うか」

「直ぐ、準備するね」

頷いて、利知未は食卓の準備を整えた。

一週間もしない内に、再び倉真の実家へ呼ばれてしまった。利知未の次の日曜休みに、二人で何う話しになった。

式場探しの為に、二人の意向を是非、聞いておきたいと言っていた。

二十日の日曜日に倉真の実家へ行った。家族揃って昼食を取りながら、相談をした。両親の希望で、利知未は白無垢を着る事になってしまった。

「髪を、もう少し伸ばしておいて下さいね」

母親に言われて、利知未は渋々ながら頷いた。

「披露宴は、余り派手にはしないで良いのね？」

「はい。出来れば、慎ましく」

「ね、責めて、お色直しでウェディングドレス、着てくれるよね？」  
兄と利知未の結婚式だと言うのに、一美が一番、乗っていた。

「そうね。利知未さんは、どちらかと言うとドレスの方が似合いそうね」  
母親もそう言って、頷いていた。

父親と倉真は、利知未と共に、母親と一美の勢いに押されてしまった。

アパートへ帰宅して、二人はすっかり疲れてしまった。

「お袋と一美のパワーには、負けた」

キッチンへ入り、直ぐにグラス一杯の水を飲み、倉真が息を付く。

「本当だね。けど、有り難い事だよ」

利知未も、倉真の使っていたグラスを借りて、水を飲む。

「夕飯は軽くて良いから、早く風呂入って、のんびりしたいぜ」

「じゃ、インスタントラーメンでも良い？」

「おお。風呂は、洗ってくる」

「お願い」

倉真の言葉に、素直に甘える事にした。

簡単に夕食を済ませ、入浴を済ませて、漸く心地ついた。のんびりと晩酌を始めた。何時もの姿勢で飲みながら、今年に入ってから忙しかった日々を思い出し、話をした。

「まだ、今年は二ヶ月も残ってるのに。二年分くらい、色々有った様な気がする」

利知未の言葉に、倉真も頷く。

「そうだな。……これからのの方が、大変になるのか？」

「そうなりそう、だね。……今度は、倉真をあたしの母親に紹介しないと」

「そうだ。それは、どうするんだ？」

「うん、考えたんだけど。来年、裕兄の十三回忌があるでしょ？」

その時には、母親も戻って来る筈だから……」

言葉を切って、利知未が、倉真の顔を覗き込んだ。

「その時、一緒に行ってくれる……？」

「それで、顔合わせにするって事か？」

「濃い親戚だけは、出席してくれると思うから。ついでに、そっちにも顔を見せる事が出来るでしょ？ あたしの休みも中々、纏まった日数を取るの難しいから」

それで決まってしまった。確かに、利知未は休みが少ない。

ニューヨークまで態々、行くのは、至難の技かも知れない。

それから、改めて今年の事件を思い出した。利知未は倉真に、初めて父親の勘違いを話してしまった。

倉真は目を丸くして、それから笑い出してしまった。

「そりゃ、迷惑掛けたな。っつーか、親父のヤツ、俺の事は全く信用して無かったって、事だ」

それにも笑い出してしまふ。

全く、あの人と心底打ち解けられるのは、何時の事になるのだろうと、我ながら途方に暮れる気分だ。情けなくて、笑いが止まらない。

「誰だって、勘違いは有るでしょう？ あれは、一美さんの説明不足が原因だった訳だし。あたしは、今は感謝してるよ。あれが有って、倉真の実家へ行くのも、いくらか楽になれたから」

「勘違いな。…ま、そりゃ、あるな、確かに」  
漸く、笑いが収まり始めた。

「愛情だって、勘違いって言う意見が、有るんだし」  
「…そうだな」

笑いが収まって、落ち着いて酒を、飲み始めた。  
暫らくしてから、倉真が言った。

「愛が勘違いだって言うなら、俺は一生、勘違いしたままでも、構わねーな」

「どうしたの？ 急に」

「お前の事を思っている気持ち、勘違いだって言うなら、幸せな勘違いだって、事だよ」

言われて、利知未は照れてしまった。けれど、小さく頷いた。

「そうだね。それは、あたしも同じだよ。……こんな素敵な勘違いなら、一生、勘違いしたままでも、構わない」

ニコリとした利知未が、可愛く見えた。倉真は利知未の顎を上げ、そっとキスをした。

のんびりと、幸せな空気を感じながら、秋の長夜は、静かに更けて行った。

勘違い 了  
二〇〇六年 十月二十五日（2008/4/30 改）  
利知未シリーズ 番外・4  
研修医一年・一月から二年・十月 素敵な

4 研修医二年・八月～十月(後書き)

今回も、長いお付き合いを、ありがとうございます。

シリーズとして終了をするまで、あと1作となりました。次回「あなたは私の世界」をアップできるのは、五月八日以降になってまいります。

その間、インターネットが使えなくなってしまうので……。

取り敢えずそれまでは、本文の直しをコツコツと進めて行きたいと思います。

ここまでのお付き合い、本当にありがとうございます。次回まで、もう少しのお付き合いをいただけましたら、幸いです。 > (――) <

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1763e/>

---

素敵な勘違い (利知未シリーズ 番外 4)

2009年3月24日09時26分発行